魔法少女リリカルなのは　その瞳に映るもの

アマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは　その瞳に映るもの

【Ｎコード】
Ｎ３８２２Ｕ

【作者名】
アマ

【あらすじ】
研究所から逃げ出した主人公・公太は高町家にお世話になる。
ジュエルシード、闇の書とさまざまな事件の裏に謎の組織が関与する。
右眼にレアスキルを宿した公太となのは、フェイトのお話。

プロローグ（前書き）

追記：当物語はオリジナルですので多少原作と違います。
それが許せる方のみお読みください。

プロローグ

「待ちやがれ」

1人の少年が研究者らしき白衣を着た集団に追いかけられている。
少年の方は身長は高めで細身だが、身長のわりに顔が少し幼いのでおそらく小学生だろう。
髪は白髪のサッパリした髪型でパッと見ちょっとカッコいい感じの男の子だが、右眼を隠している白い眼帯がその少年のただならぬ気配をあらわにしている。
髪の色と同じ真っ白な色・・・・・まるでこの少年の何も無いというような心を表しているように。

「やっと追い詰めたぜ。散々逃げ回ってくれたが、そろそろ研究所に戻る時間だ」

少年は白衣の中年が言っている研究所から抜け出したばかりのため、この辺の地理に詳しくない。
そのためとうとう壁に行く手を阻まれてしまった。

「もうそろそろのハズなんだが・・・」

少年は何かを待っているみたいだがそれも虚しく、

「構えろ」

リーダーらしき男が片手を挙げて命令を下し、複数の男が銃を構える。
銃の中身は実弾ではないが、アフリカ像をも一撃で眠らせる強力な

麻酔弾だ。
中学生にも満たない子に対するものではない。
男が撃て、と命令しようとしたその時、
「町中で物騒だな」
1人の青年がそう言いながら白衣を着た集団の中に割って入る。片手に買い物袋を持って。
「一般人がしゃしゃり出るな。怪我をしたくなければさっさと去れ、と言いたいところだが目撃者は排除しなければならん。運が悪かったな」
散々人の多い町中で追いかけ回しておいて目撃者はない。ただ単に殺しがしたいだけなのだろうか、男は懐から実弾が入った銃を取り出して青年に向ける。
「しかし、子ども1人相手に随分大人げないな」
青年は全くもの怖じ気しない。
「・・・・・・」
白衣を着た集団のリーダーはさっさと処理しようと思ったのか、引き金に指を添えて引こうとした・・・・・・が
「がっ」
最後まで引くことはできなかった。

その前に青年が銃を持った研究者の背後に一瞬でまわりこんで首筋に手刀を決めていったからだ。

「引け！」

残った研究者が手刀によって気絶した者を引っ張ってあっという間に撤退した。

たいしたまとまりのない集団が行動する場合、リーダーが倒されるとその集団はそれ以上のことができない。

したがって退散することしか選択肢がないのだ。

まだ気絶したリーダーを背負って退散しただけマシな方だ。

「君、大丈夫か？」

青年はそう言って少年に近づくが、

「やっと・・・・・・会えた」

少年は急に体の力が抜けたのか青年の方に倒れ込み、意識を失った。

◇　　◇

「ん」

「あっお兄ちゃん、目を覚ましたよ。私、お父さんとお母さんを呼んでくる」

少年は幼い女の子の声を聞いて体を起こした。

頭が少しぼうっとしていたが、すぐに右眼の違和感に気づいて慌て

る。

「寝るのに窮屈だと思って外しといたんだけど」

先ほど助けてもらった青年が白い眼帯を差し出す。
それを少年が慌てて奪い取るように取り、装着する。
ちなみにここまで左眼は開いているが右眼は閉じたままだ。

「悪い。大切なものだったか？」

「いえ、大丈夫です。それより先ほどは助けていただきありがとうございました」

お礼をいうと部屋のドアが開いて2人の女性とガタイの良い男性が入ってきた。その後ろに先ほどの女の子がついてくる。

「気がついたようだね」

この家の家主と思われる男性が言う。

「とりあえず簡単に自己紹介をしましょうか。私はこの子たちの母の高町桃子です。翠屋って喫茶店でパティシエをやっています」

最初、誰かのお姉さんだろうと思っていた女性が自己紹介をする。
ちなみにそれを聞いた少年は、この星には若返りの薬が存在するんだなと思っていたりする。

「私は父の高町士郎だ」

ついでガタイの良い男性が自己紹介をする。

桃子ほどではないが十分若い。

「私は妹の高町なのはって言います」

「私はなのはの姉の美由希です」

と1人の女性と年齢一桁ぐらいの女の子が自己紹介をする。

「俺は長男の高町恭也だ。で、何であんな状況だったのか聞いてもいいか？」

さっそくの質問。

分かっていたことなので冷静に対処しようとする。

「はい。その前に僕も自己紹介を。僕の名前は神代公太。長年捕らわれていた研究所を抜け出して追われていました」

いきなりの話に皆戸惑いを隠せない。

「なぜ捕らわれていたんだい？」

そんな中、年長者である士郎が代表して質問をする。

「詳しいことは分かりませんが、あの研究所での目的は最強の戦士をつくること。何人か才能ある子どもたちが幼いころから集めて育てる施設です。生き残るために一生懸命戦い方を学んで体を鍛えなければならない状況でした。途中、何人かリタイアした者も当然います。そしてこの眼によって僕はかなり重要視されていました」

眼帯の上から右眼をさすり、公太は一度言葉を切る。

周りの反応はそれぞれだ。
美由希となのははは信じられないといった顔をし、士郎と恭也は思うところがあるのか苦い顔をしている。
そんな中桃子が静かに公太に近づいていきなり胸に抱き寄せて頭を撫でた。

「つらかったのね」

「確かにつらいものでしたが、仲間がいました。仲間がいるというそれだけが唯一お互いの支えになっていましたから」

この言葉に嘘はないが、実際訓練と称してお互いをつぶし合っていたことも多々あった。
そんな中でもお互いを信頼し合い、共に生き延びてこられたからここまで生きていたのだろう。
途中でリタイアした者の分も精一杯生き延びてみせようと心に決めて。

「安心しなさい。あなたは私たちが絶対に守ってあげるわ」

そう言って再度頭を撫でる。
公太は母親の愛情を知らない。物心ついた頃にはすでに研究所にいたからだ。

「母親というのはいいものなんだな」

「公太君、ご両親は分かる?」

公太は首を横に振る。

「僕はこう見えて年は１６なんだ」

公太はみんなが子供にさとすような言い方をしているのに気づいてそう告げる。

そしてみんなは当然この言葉に驚く。

無理もない。雰囲気が大人びているとはいえ、どう見ても１６と見るには難し過ぎる。

「といっても体だけなんだけどね」

「どういうこと？」

「研究所に集められた人はまず最初に人体改造が施されます。これは少しでも長く強い体を保つためです。その結果、体の成長速度が通常の半分になります。ただ、研究所では月日の流れが分からないというのもあってだいたい見た目と変わらないと思っていただいてかまいません」

「ということは君の体には１６年分の経験が備わっているということか。しかしその体ではいくら鍛えても限界があるのではないかね？」

「いえ、その辺もうまく改造してあります。見た目はこんなんですが、実際体は１６そのものです」

士郎は元御神流を使ったその道のプロだったため、最初から見た目のわりにものすごい経験をしてきたという気配は読み取っていたので納得したが他の人はどう反応したらいいか困っている。

なのははこういう世界とは程遠いのだが、自分の知らない世界を知って驚き半分悲しくも感じている。

この子も年のわりに精神的には高いほうなのだ。
恭也もそういう世界を多く見てきたが、今回のはかなり異質に感じていた。
だが、この空気をなんとかしようと少し話題を変えることにして口を開く。

「そう言えば倒れる前にやっと会えたって言ってたけど俺に会うのが分かってたのか？」

恭也の質問に一旦桃子から離れて真剣な顔つきになり質問に答える。
ここからが重要なことだからだ。

「はい。それを説明するためにまずこの眼のことをお話しますね。
この眼には異能な力が宿っています。そのうちの１つが『未来視』です。この眼で今日、僕の力を封じて脱走することで僕の目的を達成してくれる人たちに出会えるという未来を見たんです。ちなみにこの眼の影響か、たまに予知夢も見ます。この場合は『見る』ではなくてお告げみたいな感じでくるのですが」

この「僕の力を封じて」という部分は多少意味合いが違うが、その話はあとにするとしよう。
いずれ分かるだろうから。

「未来を見る力か・・・・・にわかには信じられないが、俺と父さんはそういう人たちを知らないわけじゃない」

随分と細かく出る未来だなと思わなくもないが、恭也にいたっては吸血鬼と霊能力者、ＰＫ使いを知っているからありえないことではないと思っていた。

「ついでに言うと僕はこの世界の人間ではありません」

「!?」

この言葉にさすがの恭也も驚きを隠せない。異能な人は知っていても宇宙人の知り合いは初めてだ。
厳密には宇宙人ではなく異世界人なのだが。

「僕の存在についてはそのうち分かりますので、それまで待っていてください。実際、僕自身どこの世界か知りませんので」

「そのうち分かると言うそれも『未来視』？」

桃子の問いに「はい」と答える公太に
皆、公太がそう言うならと思い、深く追求しないことにした。

「ところで目的って言ってたけどそれは何だ?それに君は今日と言っていたが、俺は普段もよくあそこら辺を歩いているけどなぜ今日だったんだ?」

その言葉に公太は少し言いにくそうになる。先ほどは軽く眼の話に触れたが、もともと自分の異能を他人に、しかもそういうことに縁のない世界で話すには少し抵抗がある。

「言いたくないなら無理に言わなくてもいいのよ」

桃子はそう言ってくれたがここまできて話さないのは勝手だなと思い呟くようにして話す。

「僕は幼いころから地獄の日々でしたが、ここから抜け出したいと

思うことはありませんでした。その時の僕は何に対しても無気力でしたから。ただ生き残るために強くなり戦うというだけの生存本能だけで生きていました。だけどある時、僕が先輩みたいに慕っていた人が言ったんです。「君はいつも眼が死んでいるな。この場所にいたら無理もないことだが何か目標を持って生きないとそのうち死ぬぞ。君の生きる目的はなんだ?皆それぞれ希望を抱いて生きている。いつの日か顔の知らない親に会いたい。自由になって学校に行ったり好きなものを食べたい。いつか叶う日が来ると信じて皆一生懸命に生きている。君は何のために生きているんだ?」と。それから僕は考えました。そしてとりあえず目的を持つことを目的にすることにしたんです。その時に『未来視』が発動しました。あ、この『未来視』は人間の分岐点(ターニングポイント)となる未来しか見られません。しかも自由に見られず、突然見せられるので使い勝手は悪いですね」

「なるほど。だが私たちがどう助けになるんだい?」

「士郎さんたちも無関係ではありませんが、直接関係あるのは・・・」

と言って公太はなのはの方に顔を向ける。

「え!・・・・・私?」

その問いに公太は深く頷く。

「ちょっと待ってくれ。なのはがどう関係あるんだ?まさか研究所絡みで危険なことになるんじゃないだろな?」

今までで一番慌てる恭也。当のなのはは今まで蚊帳の外だったのが急に話を向けられて何がなんだか分からなくなっている。

「安心してください。やつらは関係ありません。先ほど恭也さんの異常な強さを目の当たりにして警戒しているはずです。それに、士郎さんと恭也さん、あと・・・美由希さんもですね。あなたたちは御神流を扱っていますよね?身のこなしと気配でなんとなく分かります。奴らも御神流相手に下手に手を出さないでしょう」

流派を簡単に見抜く眼力に只者でないことを改めて確認させられる高町家。

実際公太は研究所で強くなる一つとして戦いに役立つ知識もかなりつめこんでいる。

「それで、なのはさんは・・・」

「あ、私のことはなのはって呼んでください。年上みたいですし」

「僕にも敬語はいいよ。それでなのははとりあえずフェレットもどきに注意して」

「フェレット・・・・・・もどき?」

なのははもどきという言葉にどの辺がもどきなのだろうといろいろと想像を膨らませる。

「うん。なんかよく分からないけど予知夢でそう出た。『幼き子とフェレットもどきによる出会いが新たな道を指し示す光となるだろう』って」

公太の言葉に皆それぞれ想像を膨らませる。もどきという言葉が余計ややこしくさせているのだろうがまとまる気配はない。

これ以上考えても仕方がないのですぐに考えるのをやめることにしたらしい桃子が

「はい、暗い話はもうおしまい。今夜は公太が家族入りする歓迎会の準備をしなくちゃいけないからみんな手伝って。公太はできるまで休んでて。ビックリするくらい豪華にするから」

「そうだな。桃子の料理はおいしいから楽しみにしてるといい」

「家族・・・・・・」

桃子は何気なく言った一言なのだろうが、公太はその言葉に戸惑う。
生まれて初めて家族というのを経験する。
研究所にいた時から密かに憧れていた存在でもあった。
少し戸惑ったが意を決して言ってみたかったことを言う。

「あの、母さんって呼んでもいいですか?」

今日初めて会った人に言うことではないだろうと思いながらも口にした公太だったが、それを聞いて桃子はにっこりと笑って即答した。

「もちろん」

「じゃあ私の2人目のお兄ちゃんだ」

難しい話が終わってすぐに笑顔になるなのは。本当に笑顔の似合う子だなと思わせる笑顔だ。

「じゃあ私はお姉ちゃんだね。それに恭ちゃんには初めての弟だね」

美由希がすぐにのってくる。
この家族は温かい。武術の家系でもここまで温かくなれるのかと思い、戦いの日々だった公太にとっていろいろと信じられないものであったが、自分もこの輪に入れればいいなと思うのであった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・

＜あとがき＞
初投稿よろしくお願いします。

補足です。
神代公太は見た目は子ども、中身は大人のコ◯ンくんですが実際、精神年齢はそれほど高くはありません。
なのはたちよりは大人びていますが、いろいろな事情により中学生くらいだと考えてください。

なのはものはたいてい大学生くらいなものが体が縮むパターンが多いので、少し変えてみました。
これが吉とでるか凶とでるか・・・

二話連続投稿ですので続けてご覧ください。

プロローグ（後書き）

追記：恭也たちに関しては少しあいまいなのでその辺は見逃してください。
ただ、オリジナルが強く出ます。

第一話　兆し

「公太君このウサギさんなんかどう？すっごくかわいいと思うんだけど」

なのはが差し出したのは、ウサギの絵柄がはいったコップ。

今、なのはともも・・・母さんと一緒に買い物中。高町家ではみんな食器や歯磨きといった日用品まで専用のものを使っているので、僕の日用品などを買いにデパートへやってきた。みんな動物系の絵柄がはいった食器を使っているからとなのはが僕に合う動物を探している。

ちなみになのははは僕のことをお兄ちゃんと呼びたがっていたけど、ガラじゃないし恭也さんに悪いと思って遠慮させてもらった。

「この孤独感を醸し出している目が僕に似ている気がする。かあ・・・さんはどう思う？」

自分からお願いしたことだけど、今だに母さんと呼ぶには戸惑いがある。

ちなみに士郎のことも父さんと呼んでいて美由希のことは姉さんだ。ただ恭也のことだけは恭也さんと呼ぶことにしている。理由は・・・まだ内緒だ。

「あら、愛嬌があっていいんじゃない？」

「じゃあこれにする」

母さんがコップとそれのセットになっているお皿を買いにレジに向

かう。
少し並んでいるから時間がかかりそうだ。

「あ、あの・・・公太君・・・・・・」

買いにいったのは母さんだけなので一緒に待っているなのはが急にモジモジし始めて話しかけてきた。

「なに？」

「えっと・・・お、お手洗いに行きたいんだけど・・・・・・」

ああ、そういうことか。

「行っておいで。ここで待ってるから」

はにかみながら1つ下の階にあるトイレに向かって走っていく。女の子はなんでトイレに行くのを知られるのが恥ずかしいんだろうか。知識としてそんなもんだと知ってはいたけど、実際目の当たりにすると不思議でしょうがない。

そんなことを思っていたら急に右眼が疼きだした。
これは『未来視』！
眼帯の上からでも映像が映し出される。

なんだ？僕が急いで下に向かって走っている。ここは・・・・・・。
女子トイレか！まさかなのはを覗きに行ったんじゃ・・・・・・。
この眼は人生の分岐点（ターニングポイント）しか見られない。確かに覗きに行ったら最終的に人生がひっくり返るな・・・・・・・・・・っ！

「なのはが危ない！」

右眼が見た未来を防ぐため急いで階段を文字通り飛び降りる。
『未来視』でトイレまでの道順を見ていたため迷わず向かう。

「なのは！」

僕が女子トイレに入ったときにはなのはは手を洗っていた。
他に人はいない。

「きゃっ、公太君！？ここ女子トイレだよ」

何か言っているが時間がない。
急いでなのはの手をとって出口に向かって飛び出した瞬間、ドカンッと後ろで爆発した。
爆風でものが飛んでくるのでなのはを覆いかぶさるようにして守る。

爆発が収まるとすごい音を聞きつけた人たちがガヤガヤと集まってきた。
とりあえず起きあがりながらなのはの状態を確認する。パッと見た感じなのはに怪我はないから大丈夫そうだ。

「公太君・・・・・・」

「静かに！」

まわりが騒ぎで集まっている中、爆発のときから感じていた不自然な視線の主を探す。

「・・・・・・いた！」

こちらを見ていた2人組を見ると目が合った。
相手は目が合った瞬間急いでその場から立ち去ろうとする。

「逃がすか！」

「あ、公太君！」

なのはが呼んでいるが応えている暇はない。
2人組との距離は少し離れているが、爆発の音を聞いて多くの人がこちら側に向かってきているため相手は進みづらそうにしている。
僕のほうは持ち前の運動能力で軽くかわしながら進んでいるためどんどん距離が近づいていく。

そこで僕は足に力をいれて一歩で相手に近づいた。

「ぐへぇ！」

近づくときに2人組のうち1人のスキンヘッドの頭を後ろから掴んで地面に叩きつけたので男はカエルが潰れたような声を出した。

「なんだお前は！」

もう1人のほうが叫ぶ。
ちなみにこいつもスキンヘッドだ。ただ眉毛もない。

「それはこっちのセリフだ。なのはの命を狙っといてなんだはないだろ」

片方は完全にダウンしている。そして目の前で僕が警戒しているた

め1人を担いで逃げることは不可能だ。仮に仲間を見捨てて1人で逃げてもダウンしているほうを尋問して場所を吐かせればいい。

「ガキが調子にのるなよ」

どうするのだろうかと思っていたら眉なしの服が急に真っ黒に変わって杖が出現した。

「くらえ！」

「な！」

杖から光の球が発射された。
ギリギリで反応して避けるも続けて発射される。

「お前ら魔導師か」

気を帯びた手で光の球を弾きながら言う。

「なんだこいつ。魔導師でもないくせに素手で俺の魔法を弾いていやがる」

相手はなおも光の球を出し続ける。
これではラチがあかないから一気に詰め寄ろうとした時、また右眼が疼きだした。

それは公太のいる位置に窓の外から砲撃が飛んでくる映像だった。
その映像を見てすぐにその場から飛び退く。

ドォォン

飛び退いた瞬間、立っていたところに窓をやぶって砲撃が当たった。

「完全に不意をついたはずなのによけただと」

窓の外から女の人の声がする。
宙に浮いているようだ。

「見たところ魔導師ではないな。魔導師ではないやつに用はない。撤退するよ」

女の人がそう言うと眉なしが杖を地面に小突いた。
その瞬間3人の足元に魔方陣が出現した。

「またお前とは会いそうだな」

女の人がそう言うと3人の姿が完全に消えてしまった。
おそらくは転移魔法だろう。
公太は魔導師ではないが知識はある。
やつらの場合はリンカーコアというのを使っているタイプだと魔方陣から推測した。

「公太君！」

なのはが母さんを連れてやってきた。面倒なことに警察も一緒だ。

「大丈夫？なのはから聞いたわ。爆発から守ってくれたみたいね」

「僕は大丈夫です。犯人を追いかけてたんですが逃げられちゃいました」

「いいのよ。あなたたちが無事でよかった」

そう言って僕となのはを抱きしめた。

僕は心の底から心配してくれる存在に感謝した。

◇

◇

◇

警察の事情聴取が終わって僕らはすぐに帰宅して夕食の準備をした。

今回のことで分かったことだが、警察は空気が読めない。そして時間泥棒だ。

母さんが抱きしめてくれた時、１０秒もしないうちに声をかけて邪魔をしてくれた。それから事情聴取に４時間も費やされたのだ。初めて警察に会ったけど、正直予想外だった。知識としてだいたいのことは分かっていたつもりだったけど思っていたよりめんどくさい。経験はしてみるもんだとしみじみ思ったよ。こんな経験はできればもうしたくないけど。

「そうか。なのはを助けてくれてありがとう」

夕食を食べ、リビングで今日の出来事を父さんたちに報告する。

「家族・・・・・・だからね」

少しはにかみながら言ってしまう。それを聞いてにこやかに笑う母さん。

・・・居辛い！

なのははなのはであんなことがあったにも関わらず、相変わらずニ

コニコしている。どうやら僕との距離が縮まったことに喜んでいるようだ。

「で、その時の状況をもう少し詳しく聞いていいかい？」

急に真剣な顔つきになった父さんが聞いてくる。やはり実の娘が狙われて野放しにはできないのだろう。

なので空気を変えてくれたことに感謝しつつ、なのはがトイレに行ったときから魔導師との戦闘のことまで詳細に話した。

「君の意見を聞いてもいいかい？」

「はい。爆発のタイミングとやつらの気配からしてなのはを狙ったものと見て間違いないと思います。ただ・・・・・・」

「ただ？」

「最初からなのはを狙っていたのではないと思います。まず、なのはがあのトイレに行くなんて誰も予想できません。僕みたいに未来を見たなら別ですが。

それと爆発のタイミングです。爆発させるならなぜなのはがトイレに入った時すぐに起爆させなかったのかです。まさか律儀になのはが用を足すのを待っていたとは思えない」

用を足すの部分でなのはの顔が赤くなる。

その表情の変化にほほえましく思いながらも気づかないふりをしておく。

「それは俺も気になってた」

恭也も冷静に話を聞いているが、体中に力が入っている。恭也はなのはを危険にさらした奴らに本気で怒っているのだろう。
高町家に住み始めてすぐに分かったことだが、恭也さんは重度のシスコンだ。
姉さんに対してもそれなりに気にしているが、なのはにたいしては異常だ。
まあしょうがないとは思わなくもないけど。

「おそらくですが待っていたんじゃないかと」

「何をだい？」

「その前になのは」

「なあに？」

なぜだか俯いているなのはに声をかける。

「なのはがトイレに入った時、他に人がいたんじゃないか？」

「うんいたよ。鏡の前でお化粧してる人が。私がその・・・個室を出たときにちょうどその人がトイレから出るところを見たよ」

やはりそうか。
それならあの時のやつらの戸惑いも理解できる。

「そうか！敵は他の人を巻き込みたくなかったんだ」

僕の考えに気づいて姉さんが声を上げる。

「そうか。それなら敵はなのはだけを狙ったことになる。となると愉快犯という線は薄いな。私には魔導師というのがよく分からないのだが、それが関係しているのかな？」

「・・・・・そこまで分かりません」

「そうか」

嘘だった。

おそらく敵は魔導師を狙っていた。

僕がトイレに入ったときに2人組の戸惑いを気配で感じた。僕は魔導師ではないから。だが僕がなのはを助けようとしているのだと気づいて慌てて爆発させたのだ。

公太は人間の気配にとても鋭い。

気配だけで見てなくても人の感情、動作などが分かる。

今みんなにこのことを言いたくはなかった。敵の目的から推測するにおそらくなのはは魔導師だ。やつらは魔導師というのをひどく気にしていた。

そしておそらく僕の未来に魔導師としてのなのはが関わってくる。

そのため今みんなにこれ以上のことは言いたくはなかった。

もっとも聡い桃子と士郎は公太が何かを知っているというのに薄々気づいていたのだが、公太を信用して追求することはしなかった。

「なのははそろそろ寝る時間よ。お風呂に入ってきなさい」

「はあい」

桃子の言葉で今日の報告はお開きになった。

◇　◇　◇

「暇だ」

いろいろとあったあの事件から翌日、月曜日なのでなのはや恭也さんたちは学校だ。母さんと父さんも喫茶店『翠屋』でお仕事中。手伝おうかと思ったけど、一週間後に控えている聖祥学園の編入試験の勉強をしとけと言われた。戸籍がないのにどうやったのか、父さんのつてでなんとかしたらしい。どうやら戸籍がないからこそ１６なのに小学校に転入できるらしい。僕がわざわざ小学校に入る理由は学校自体行ったことがない僕に気を遣ってくれたみたい。高校じゃないのはこの体では難しいから。戸籍がないから１６と証明することは難しい。

とりあえず母さんが渡してくれた編入試験対策のドリルを全て解いてなのはの帰りを待っている。ちなみになのはの登下校にはノエルさんって人が付いている。父さんたちが信用している人だから大丈夫だろう。

「ただいまー」

なのはが帰ってきたようだ。
ん？他にも人の気配がするな。

「公太君、公太君」

「おかえり。友達も一緒みたいだね」
慌てたようにリビングにくるなのはの後ろに2人の女の子が。
「初めまして。月村すずかです」
「アリサ・バニングスよ。アリサでいいから」
おしとやかそうな子と活発そうな子が自己紹介をする。
なのはたちとは性格が全然違うな。
「神代公太。よろしく」
「それより公太君。今日フェレットに会ったよ」
「ホントか！」
こんなに早くフェレットに遭遇するとは思っていなかったものだから驚きを隠せない。
というよりなんとか暇を潰そうと考えていたから忘れていた。
「うん。怪我をしてた」
「それだけじゃなくて近くの湖で変なことがあったわ」
3人の話によると湖であちこちが壊されていたらしい。その近くに怪我をしていたフェレットもどきが倒れていたと。
「倒れてたフェレットだけど少しフェレットとは違うみたい」

おそらく僕と同じでこの星の動物じゃあないのだろう。
地球外生物。だからもどきか。

「そのフェレットは今どこに？」

「病院よ」

なのはが本当に魔導師としての素質があるならおそらくそのフェレットは魔導師関係だろう。

ということは・・・・・
だがもしそうなら・・・

「公太君？」

「いや、なんでもない。それより・・・すずかは今が楽しいか？」

「？なのはちゃんとアリサちゃんがいるし楽しいよ」

「そうか・・・・・・」

◇

◇

◇

このままいけばなのはの未来まで変わってしまう。僕はどうしたらいいんだ・・・・・・

～あとがき～

まずこの質問が今まで多かったので先に言っておきます。

人体改造をするほどのやつらが御神流が近くにいるからって公太をほっとくだろうか、という質問です。

これはのちに分かりますとしか言えませんがきちんとした理由があるのでお待ちください。

第二話　なのはの道

少女の運命、今別れる
その運命、選択は自由
その運命、握るは汝
どの道選ぶも波乱の予感
少女の運命、善き道に導くは汝なり
少女の運命、悪き道に導くも汝なり

「予知夢か」

目覚めて視界に映るのは眩しい日の光ではなく、心地よい月の光。
考えている間に寝てしまったみたいだが2時間しかたっていない。
夢の内容はなのはが魔導師として生きるか一般人として生きるかの選択について。しかも選ぶのは僕。

「だけど僕になのはの運命をどうこうする資格はないな」

だけどなのはは大事な家族・・・できれば良い方の道を歩ませてや

りたい。
だけどこのお告げは今ではなく、先のことを言っている気がする。

「余計悩むな・・・・・・・・・ん？」

外になのはが出て行く気配がする。
こっそり出ていこうとしているのは分かるけど気配がだだ漏れ。これじゃあ父さんたちにもバレてんじゃないかな。

「って、僕に考える時間すらくれないのか！」

なのはがこんな時間に出ていく理由は決まっている。
僕は急いでなのはを追いかけるようにして外に出る。
服は寝る時に着替えていなかったからそのままだ。

動物病院に着いた時、黒い狼がなのはを襲っていた。例のフェレットもどきを庇っているみたいだ。

今ならまだ間に合う。
僕があの狼をさっさと倒せばいい。そしたらなのはの道は平穏な毎日のままだ。

だけど・・・・・・

「僕のあとに続いて呪文を唱えて」

「う、うん」

フェレットが赤い小さな玉を渡して呪文を唱える。

「我、使命をうけしものなり」

「我、使命をうけしものなり」

フェレットに続いてなのはが赤い玉を握りしめて懸命に呪文を唱える。

「契約のもとその力を解き放て」

「契約のもとその力を解き放て」

「風は空に、星は天に」

「風は空に、星は天に」

「そして不屈の心はこの胸に」

「そして不屈の心はこの胸に」

「「この手に魔法を！」」

「「レイジングハートセットアップ！」」

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　Ｒｅａｄｙ』

赤い玉から強烈な光が天に向かって発せられる。

「なんて魔力だ・・・・・ええと、君がイメージする衣服と杖を思い描いて」

「急に言われても・・・・・えっと・・・とりあえずこれで」

なのはの服が白い服に変わって杖が出現する。その服は、どこかなのはの学校の制服に似ている。
とっさに思い描いたのが学校の制服だったのだろう。

「結局止められなかった・・・・・いや、もともと止めるつもりなんかなかったのかもしれないな。言い訳を作りたかっただけだ」

1人自己嫌悪に陥っている間に狼がなのはに向かって飛び込んでくる。が、なのはの足に小さな羽が現れて空中に回避する。狼がターンをして再度飛びかかるが

『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』

突然あらわれたバリアによって阻まれる。バリアにも威力があるのか、反動で狼が吹っ飛んだ。

「どうすればいいの？」

『マスター、慌てないで。私があなたをサポートします』

どうしたらいいか戸惑っているなのはに赤い玉、レイジングハートが話しかける。

「うん。お願い」

『では利き手を相手に向かってかざしてください』

なのはが左手を前にかざすと、そこから先日の魔導士みたく光の玉

が出現する。

『Ｓｈｏｏｔ！』

そのまま狼に向かって放たれた。狼は避けようとするも、ギリギリで当たり壁に激突する。

「やったの？」

いや、あれでは・・・

「油断するな、なのは！やつはまだ動けるぞ！」

「こ、公太君！？」

突然の声に驚いているなか、その間に狼が起き上がってこちらを睨む。そして・・・・・・

「な！？」

フェレットが驚くのも無理はない。狼の体が突然半分に裂け、二匹に分裂したのだ。

二匹の狼が一斉になのはに向かって左右から襲いかかる。体が小さくなった分、速度が増している。

「きゃっ」

なのはが当たる！と思った瞬間・・・

ドゴンッ

「敵を前に目を瞑るな」

気を込めたパンチで狼を二匹とも公太が吹っ飛ばす。

互いに睨み合う。

「・・・・・・」

「・・・・・・」

先に動いたのは二匹の狼。

「ワオーン」

「・・・！これは超音波か！？」

二匹の狼が突然遠吠えを発し出した。その遠吠えが超音波のようになって人体の脳に響く。

さすがの公太も突然のことで対処できずに怯んでしまう。

その隙を狙ってか、二匹の狼が建物の屋根をつたって逃げだした。

「しまった！」

公太は慌てるが飛べないため、追いかける手段がない。

『マスター、私の言う通りに』

「え、え？」

『Ｓｈｏｏｔｉｎｇ　Ｍｏｄｅ』

訳が分からなくなっているなのはをよそにレイジングハートの形態が変わってゆく。
ヘッドが音叉状の形態に変形し、ブームが伸び、光の羽根を広げている。こんな形になるのはおそらく、前方に魔力を集中するためだろう。

「なのは。相手は二体。うまく照準を合わせて」

「わたし・・・・・・」

「大丈夫。なのはならできるよ」

頭を撫でて落ち着かせる。
そしたらパッと顔を明るくして

「うん、やってみる。レイジングハートお願い」

狼はそれなりに離れている。
あそこまで届くのか？
しかもあの速度

『慌てないで、ゆっくりトリガーに指をそえて』

照準が二匹を追う。
距離が遠すぎる。間に合うか！？

『今です！』

「シュート！」

レイジングハートから二発の発射。

狼たちの倍以上の速さで狼たちに迫る。途中、狼は方向転換するが、ホーミング機能があるのかそのまま追いかけて命中した。

「ジュエルシードシリアルＸＸ？封印」

「ぐおおお」

なのはの砲撃が当たって完全に消滅、いや小さな宝石だけが残った。

「これは・・・」

『それがジュエルシードです。杖をかざしてください』

『Ｎｏ．ＸＸ？』

レイジングハートのコア部分にジュエルシードが吸い込まれる。

「一件落着だね。いろいろ聞きたいこともあるし、とりあえず家に帰ろう」

◇

◇

◇

「僕はユーノ・スクライア。そのジュエルシードは僕たちスクライア一族が発掘したんだけど、運搬中に何者かに砲撃を受けてこの世

界に落としてしまったんだ」

「すごい落し物だな。で、なのはが封印したのがシリアルＸＸ？ってことは少なくてもあと２０個あるんだよね？」

「うん。僕が自力で封印したものが一つあるから残り１９個」

「で当然なのはは・・・」

「私手伝うよ」

やっぱりか・・・・・いや、これが進むべき道なのか。ユーノたちを襲った砲撃もここに落ちたことも必然。その必然を違う形でこの右眼が見せたわけだ。

「ところで、なんでユーノが集めるの？たしか時空管理局ってのがあったはずだけど」

「なんでそんなことを知ってるんだ！？・・・・・今回の発掘は僕が責任者だったんだ。だから僕が全部集めなきゃいけない」

「無謀だな。結局なのはの手を借りるてるんだ。その意思は意味がない」

その言葉にユーノが俯く。

ま、若気の至りってやつだね。

「とりあえず僕も手伝うよ。こういうのはできるかぎりさっさと片付けたほうがいい」

「ありがとう。じゃあジュエルシードについて詳細を教えるよ」

「いや、僕はいい。だいたいのことは知ってるから。たいていの願いなら叶えてくれるってやつでしょ？無理矢理やると暴走する危険性もある、そっちではロストロギアって言ったっけ？」

「・・・・・君は何者なんだ？魔導師でもないのにあの戦闘力とこの知識・・・」

「そういうのはなのはに聞いて。もちろん今から寝るから念話で。ユーノは僕の部屋にね」

「え・・・・・？」

「おいおい、なのはと一緒に寝るつもりじゃないよね？」

ひどく驚いた様子を見せるユーノ。なのはは一緒でもいいのにと呟いている。
ユーノは分かってるみたいだけどなのはは将来が心配だな。

「ああ、父さんたちにはこのこと黙っておいて。帰ってきた時に聞きに来なかったところをみると、いろいろ察してくれてるんだろうから」

「バレてるの？」

なんと純粋な。天然は時として馬鹿と思われるから気を付けたほうがいいぞ。

「当然」

そう言って公太はユーノを連れて部屋を出る。
ドアが閉まる隙間に、なのはがえーっていう顔が見えて本当に心配になった。

◇

◇

◇

＜あとがき＞
今回はキリがいいので短めです。
いくらか書き留めているので投稿が早いです。

今は主人公知識人です。
なのははとことん天然でいこうと思います。あれ、フェイトはどうしよう。
レイジングハートのセリフは簡単な単語だけ英語表記で他は日本語なのをお許しください。

さっそく感想をいただきました。
とりあえず誤字は直していきます。

追記しましたが、とらいあんぐるハートの知識はあいまいです。
その辺はご了承ください。
当物語はあくまでオリジナルだということを頭に置いておいてください。

第三話　疑惑

「・・・みんなおはよう・・・・・・・」

なのはが挨拶をする。

今日は日曜日。

ちなみになのはが一番起きるのが遅かった。

只今の時間１０時・・・・・・この一週間大変だったから仕方がない。

運動が苦手なのはには過度すぎたかな。念話で夜更かしもしちゃったし。

ちなみに僕もいろいろな裏技で念話が使えます。詳しくは後日分かるだろう。

そういえば、この家族はみんなズバ抜けた身体能力をしているのになんでなのはだけ運動音痴なんだろう。まあそのかわりに魔導師としての資質がすごいんだけど。

「おそようございます。なのは」

「うっ・・・・・・」

「まあ仕方ないよ。で、どうするあの件」

この一週間ずっとジュエルシードの探索をしていた。時々このあいだみたいに戦闘になることもあった。

そして僕は昨日の念話で戦いに慣れるため修業をしないかという提案をした。

この一週間であまりにも素人だということが分かったからほっとけない。

あれではいつか怪我をする。

「うん・・・・・でもそれすると疲れて学校が厳しいかも」

「だろうね。その状態をみると」

どう見ても疲れが溜まっている。
魔法の練習だけなら問題ないだろうけど体を少し鍛えるとなるとまた別だ。

「まあジュエルシードの時はなるべく僕も同行するようにするから。考えといて」

「うん」

ジュエルシード集めだけなら問題ない。僕がフォローすればいい。
だけど、おそらくそれだけではすまない。だから今のうちに鍛えときたかったんだけど・・・・・

「とりあえずユーノもジュエルシードを封印できるみたいだから今から探しに行こうか」

「私も行く」

「なのはは休んでて。今日は僕とユーノが行くから。試したいこともあるしね」

「・・・・・分かった。気をつけてね」

「ああ」

◇　　◇　　◇

「それでどうやって探すの」

ユーノが当たり前のように聞いてくる。
なんか僕に探りを入れているように感じるなあ。

「君にも探査魔法ってのがあるんじゃないの？まあいいや。とりあえず気配を頼りに探してみる予定」

「気配？ジュエルシードの？」

「うん。生き物でない物でも気配はある。特にジュエルシードみたいな強くて異質なものは分かりやすい」

「・・・・・君はなんというか・・・まあいい。その発想はなかったよ。僕たちは物の気配じゃなくて魔力の気配を頼りに探すからね」

集中して探ってみて分かったけど発動しないと強い気配が出ないからかすごく微弱だ。だけど気配が全く無いわけではない。

「こっちだ」

広い敷地に出た。

「・・・・・君のことなのはから聞いたよ」

「信じられない？」

「確かに信じがたいことだけど君の能力のことを考えると、ね。特にその洞察力と知識に驚いた」

ずいぶんと過大評価をしてくれる。

「お、見つけたよ」

発動前のジュエルシードを草陰に見つけた。

ん、犬が・・・・・・

弱々しい、ヨボヨボした犬が近づいてジュエルシードを咥えた。自分のすみかにもっていくつもりなんだろうか。

ピカーンと咥えられたジュエルシードが光りだした。

「あ、発動した」

「あ、発動したじゃないよ！」

犬がどんどんゴツくなっていく。

強くなりたかったのだろうか、その願いを叶えようとジュエルシードが犬をたくましくしていく。

「どうすんだよ！」

「どうすんだよって僕のせいじゃないでしょ。まあちょうどいい」

ゴツくなっているため一回り大きくなっている犬と対峙する。

「僕がどの程度魔法世界の生物と渡り合えるか一度確かめないとね。
なのはのフォローをするんだから手抜きはできないよ」

「・・・・・とりあえず僕は見学してるよ」

「かまわないけど封印のタイミングはハズさないでよ！っと」

一気に距離を詰めて殴りかかる。

ドゴンッ

当たりはしたけど全く効いていない。
予想以上に犬の体が硬かった。

「ガウッ！」

そのまま犬が噛みついてきた。

「はっ！」

体の気を練り上げて腕を伸ばした状態で吹っ飛ばす。
寸勁の要領だ。

「・・・・・・」

ゴオオ

さらにゴツくなる。

ドンッ

犬がすごい力で地面を蹴って距離を縮めるてきた。
ゴツくなったにも関わらず速度が上がっている。

ドンッ

「公太！」

犬が公太に衝突したと思ったら公太が片手で犬を支えていた。

「ユーノ！封印準備」

「わ、分かった」

支えていないもう片方の手で一気に叩きつけた。

「グワッ」

「今だ！」

「ジュエルシード封印！」

「グオオオ」

犬からジュエルシードが分離して落ち着きを取り戻す。

「・・・・・ユーノ、ジュエルシードが分離したら宿ったほうは元に戻るものなの？」

「そうだね。殺さなければ普通に元の生活に戻れるよ」

「・・・・・・・・・」

「どうかしたの？」

「いや、なんでもないよ。今日はこれで帰ろう」

帰宅中はユーノからの質問に答えていた。

「君の最初の一撃は手加減してたんだよね？最後に決めた一撃は本気の力だったの？」

「・・・・・半分も出してないよ。殺さないように手加減を見極めたかったしね。それに僕の戦いの本質は力じゃない」

「というと？」

「今は言えない。そのうち分かる、というか使わされると思う」

「今は言えないって、僕のことを信用してないってこと？」

「いや、今の状況でユーノを疑う理由なんてないよ。ただ、先の未来でも疑いがないとは限らない。ま、単に言う必要がないのもあるしね」

ユーノが俯く。

これは信用されてないという落胆より何かを考え込んでるな。

おおかたユーノも僕のことを完全に信用してるわけじゃないみたい

だから、これからどうするのが1番いいか考えてるんだろう。

「ただいま」

家に到着。

「おかえりなさい」

なのはが出迎えてくれる。

「おじゃましてます」

どうやらアリサとすずかがきていたようだ。

「どこ行ってたのよ。なのははハッキリ言わないし」

「ちょっと散歩。この町の探検だよ」

『なのは、ジュエルシードを1つ回収したよ』

『ホント！』

アリサとすずかと話しつつ、なのはと念話で話す。

「とりあえず部屋に行こうよ。アリサたちは僕に聞きたいことがあるみたいだしね」

「・・・・・よく分かったわね」

なのはの部屋。

なのはの顔色は多少よくなっているけど、まだ疲れが見える。

アリサたちも気づいているだろうね。

「なのはがこんなにやつれている理由はなに？」

単刀直入だな。

「あ、あのね」

「なのはは黙ってて！」

「・・・・・なのはとは探しものをしている。それで疲れただけだよ」

「探し物をするだけでこんなに疲れるわけないでしょ！」

この疲れかたは動き回ったからというより過度の緊張からくる精神的なものだろうけど・・・・・・

「嘘はついてないよ」

「じゃあ、何か隠してる。なのはの顔を見れば何かあったのは分かるわよ」

「なのはちゃん、私たちに話せないことなの？」

子供のわりに賢いな。

簡単にはぐらかせない。

「いずれ話すことになると思うよ。君たちがなのはの親友ならね。ただ、今はその時じゃない」

今は話せない理由はある。
僕の予想が当たっているとしたら、このジュエルシードの件を知る人は少ないほうがいい。

「・・・・・分かったわよ。いずれちゃんと話してもらうわよ」

この子たちは賢い。賢いからこそいろいろと察してくれたのだろう。

「今気づいたんだけど、そのフェレットってあの時のよね？」

さっきから僕の肩に乗ってたのに気づいてなかったのか。
それほど心配だったんだな。

「うん。ユーノ君って言うの」

「よろしくね」

すずかがユーノを抱き寄せる。
少し嫌がる素振りを見せてるけど本心はまんざらでもないみたいだな。すずかには母性みたいなものを感じるからなぜか落ち着くのだろう。それ以外にも理由はあるだろうけど・・・・・

少し雑談をしたあとあまり長居をするとなのはが疲れるだろうと、アリサとすずかは早めに帰っていった。

「あのね、公太くん」

雑談の最中、妙に気合いが入った顔をしていたから言ってくるだろうことは分かってた。

「わたし・・・強くなりたい」

「それはアリサとすずかのため？」

「うん。早く解決してみんなに話せるようにしたい。それにまだいっぱいジュエルシードがあるのにこのままじゃ足でまといになっちゃうし」

「慣れないうちはたいへんだと思うよ」

「覚悟してます」

まっすぐな目。
なら僕はそれに全力で応えよう。

「今晩からね」

「りょ、了解です」

修行の内容は単純だ。
走り込むだけ。もちろんペースは最初はゆっくり。
そして少し疲れた状態でレイジングハートとユーノに習って魔法の練習。
とりあえずハードな魔法戦に慣れるために疲れた状態での魔法を使わせる。
模擬戦をする相手がいないからなあ。
ユーノは無理らしいし、僕は空を飛べない。もう1人なのはと同じ力量の魔導師がいればいいんだけど・・・
まあ、無いものねだりをしてもしょうがない。

「今日はこれで終わり。初日だから軽めにね。明日から学校だし」

「あ、ありがとうございました」

めっちゃ疲れてる。

ランニングも一キロほどでバテてたし。魔導師が空を飛べなかったらどうするんだよ。

確か誰でも飛べるわけではなかった気がする。

「レイジングハート、魔法のほうはどう？」

『素質は十分にあります。ただ、他の魔導師との戦闘経験がありませんから時間はかかるでしょう。こればかりはどうしようもありません』

「なるほどね・・・・・・当面は基礎固めってことで」

『はい』

あまり悠長にはしてられないんだけどなあ。

「なのははもう休んでいいよ。とりあえずあとで疲れを和らげるツボを押してあげるから」

「はーい」

とりあえずジュエルシード集めで経験を積ませるしかないね。

◇

◇　　◇

＜あとがき＞

ジュエルシード編ではなのは中心でやっていきます。フェイトも途中で参加するけど・・・

公太については後半に活躍する予定。今はなのはの師匠って感じです。

第四話　新たな出会い

汝に新たな出会いあり
その出会いもまた運命の分かれ道
選ぶ道より、汝の目的に変更あり
ある道はさらなる苦難を呼び寄せる

「えいっ」

なのはのまわりに現れた３つの魔力球が巨大カラスを襲う。
レイジングハートとの修行の成果か３つまでなら自在に操れるようになった。ただ発射するだけならゆうに１０はとばせる。とりあえず今回は実践での練習なのでコントロール重視でやっている。

「ん～～～」

なのはは集中力があるからそれなりにうまい・・・が、

「痛っ」

僕が石を軽く放り投げたことに気づかずなのはの頭に当たる。集中力があるのはいいことだけどまわりが見えていない。相手が単体な

らいいけど複数相手はまだ無理だな。

「う～～なにするの公太君」

頭を押さえて涙目で抗議するなのは。

「よそ見してる場合じゃないぞ」

「え、きゃっ」

なのはの一瞬の隙をついてカラスがものすごい速さでなのはを襲う。

『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』

レイジングハートのおかげで間一髪防ぐ。
カラスはすぐに立て直してなのはの上空で羽をはばたき始めた。
そのはばたきによってものすごい風が生じる。

「きゃあああ」

地面に向かっておもいっきり吹き飛ばされるところを僕が先回りして抱きとめる。いわゆるお姫様抱っこの状態だ。

「う～・・・・・きゃっ！」

俯いてたなのはが急に顔をあげるもんだから顔がすごく近い。
なのはの顔がかあっと赤くなる。こういうのは恥ずかしいんだな。

「カアー！」

自分を忘れるなと言わんばかりに鳴くカラス。確かに見つめあっている場合じゃないな。

「バインドで動きを止めてから封印だ」

「う、うん」

なのはは僕から降りて上空に飛ぶ。
あ～今気づいた。あの服危ないわ。

そんな僕をよそになのははバインドを決めて封印を完了する。

「終わったよ～」

「あ～なのは」

「何？」

「そのバリアジャケットだけど、非常に危ない」

「え？防御力はちゃんとあるよ。ねえ、レイジングハート」

『Ｙｅｓ』

レイジングハートも気づいてないのかよ。魔法少女としてはこのバリアジャケットは正解なんだろうけど・・・

「スカート」

「？」

「！」

ユーノは気づいたな。そもそもユーノは僕よりももっと低い視点で見てるのに気づくの遅過ぎ。もしかして気づかないフリしてたんじゃないか？

「僕、下。なのは真上。スカート」

ストレートに言えずかたことになってしまう。

「？・・・・・・・・・・あ！」

やっと気づくいたようで一気に顔を真っ赤にさせる。

「・・・・・・公太君のえっち」

「いやいや、僕は無罪だよ。そんなデザインにしたなのはに問題があるよ」

「だって・・・かわいいだもん」

「でもそのデザインって学校の制服をモチーフにしてるよね？」

「うん。いきなりだったからとっさに考えついたのがこれだったの。だけど着てみたらかわいくて・・・・・・」

恭也さんが知ったら卒倒もんだな。

まあいずれどうにかしよう。本当は今すぐ変更させたいけど気に入っちゃってるみたいだし、本人がいいならいいだろう。

◇　　◇　　◇

「これで集まったのは6個。まだまだだね」

今は僕の部屋。

このあとに用事があるから急いで帰ってきたのだ。

「それだけなのはの練習の機会があるってことだよ」

先はまだ長いけどここはポジティブに考えよう。それに練習相手がジュエルシードだけな今、チャンスであることは間違いない。まあ、被害もないわけじゃないから覚醒前に封印することにこしたことはないけどね。

「そういえば午後からアリサたちと遊ぶ約束したけどそろそろじゃない？

「うん。お兄ちゃんも一緒に行くよ」

「恭也さんが？なんで？」

「あ、言ってなかったね。すずかちゃんのお姉ちゃんはお兄ちゃんの彼女さんなんだよ」

お～・・・そうゆうのには疎いと思ってたけどやるなあ。

「すずかのお姉さんってことは美人なんだろうね」

「うん。すっごいキレイな人だよ」

それは楽しみだ。いろいろと・・・・・・ね。

「2人ともそろそろ行くぞ」

お、恭也さんの呼び出しだ。こっちは準備ＯＫ。すずかの家まではバスで行くみたいだからなお楽しみだ。僕はバスはおろか、電車にも乗ったことはないから。

「んじゃ、行くか。あ、そうそうユーノはちょっと自重しなよ」

「何を？」

『君、最近女の子とくっつき過ぎ。なのはたちが君の正体に気づいてないからって好き放題するなよ』

一応ユーノのために念話で会話する。

『なっ・・・僕はそんなことしてない！あれはみんなが無理矢理・・・それよりやっぱり気づいてたんだ』

『おいおい、僕は生き物やものの気配察知や気の扱いに長けてるんだよ。君の気は明らかに人のものだ。年齢はなのはとそんなに変わんないでしょ？」

『うん・・・』

「なに黙ってるの？」

お互い黙ってるいるので不思議に思うなのは。なのはには2人が念話していると気づく様子はない。

「なんでもないよ。さ、行こうか」

これ以上やるとユーノがかわいそうだから念話を切り上げてさっさと部屋を出る。

「あ、待ってよー」

◇

◇

◇

でかいなー。郊外にある月村邸。郊外にあるからこそのこの規模なんだろう。庭で自転車を乗り回すことができるほどの広さ。

「予想はしてたけど、その予想をはるかにこえる広さだ」

恭也さんがインターホンを鳴らして一言二言話す。どうやら門まで迎えにくるそうだ。

「いらっしゃ～い」

おそらくすずかの姉らしき人とメイドさんが迎えにきた。

「お邪魔しまーす」

「あら、この子が恭也の言ってた子ね。私はすずかの姉の月村忍です。よろしくね」

「神代公太です」

お互い自己紹介をして握手する。ずいぶんと話しやすい人だ。社交的なんだろうな。それと反対のノエルさんと言うらしいメイドさんはクールだ。だが、けっして失礼な態度を取らず気のきく人のようだ。それにこの人はそれなりに強い。ま、この家庭に仕えるならこのぐらいはできないと駄目だろう。

2人の案内で家にむかう。ところどころ庭に仕掛けがあることに気づいた。

「けっこう防犯装置が設置してありますね。あれは・・・・・・まさかレーザー？」

「よく気づきましたね」

「ホント、恭也の言った通りの子ね。なんでこんなに厳重なんだと思う？」

「そりゃあ月村邸を守るためでしょ？特にこの家の人を守るならこのぐらいは普通だと思いますよ。恭也さんが忍さんと付き合っているのも納得がいきます」

「公太、お前・・・・・・」

「あら、でも私たちはちゃんとお互い愛し合ってるわよ」

「それは分かりますよ。恭也さんの様子を見てたらね。一見クールに見えるけど内心かなりご機嫌みたいですし」

「お、おい。そんなことはないぞ」

「お兄ちゃん顔真っ赤だよ」

なるほど、恭也さんは普段から忍さんにもいじられてるんだな。
恭也さんの反応を面白がっている間に玄関についた。中でアリサとすずかが出迎える。

「こんにちわ～」

「こんにちわ、なのはちゃん、公太君」

さっそくすずかの部屋に向かう僕たち。ちなみに恭也さんと忍さんは2人きりで忍さんの部屋に行った。別れる際に恭也さんに向かってニヤニヤするのを忘れない。今度2人の馴れ初めを聞きたいな。

「とりあえずお茶にしましょ」

ノエルさんとは違うメイドさんが紅茶とケーキを持ってくる。このメイドさんはノエルさんの妹でファリンさんと言うらしい。ノエルさんとは対極的でかなりドジっ子のようだ。親しみやすい人ではある。この家の人たちが予言にあった新たな出会いかな?訳ありの家系だけど運命の分かれ道になるほどのことかなあ。

「そういえばアンタ昨日うちの学校でテスト受けたみたいね。先生たちが言ってたわよ。我が校のテストで満点者が出たって」

「すごいよ。うちの学校ってそんなに簡単じゃないのに・・・」

「いやなのは、僕が１６ってこと忘れてるでしょ」

「あ、そうだった」

やっぱりか。高町家はみんな順応性が高い方だけど、なのはと母さんは特に高い気がする。というか天然？

「あ、あんた・・・・・・１６だったの？！」

しまった！僕としたことが思わぬミス・・・なのはの流れでうっかり・・・・・・

「ええと・・・その・・・いろいろあるんだ」

「いろいろねえ、なのはは知ってて私たちには言えないことなの？」

「・・・・・・」

「まあ、いいわ。いずれ話してくれるってこの前約束したからね。それまで待つわ」

僕のことを話すと言った約束はしてないんだけど・・・・・・

「ちょうどいいわ。年上のあんたに相談があるんだけど」

相談？すずかを見ると真剣にこちらを見ている。どうやらすずかも関係あるらしい。

「いいよ」

「ありがと。えっと、私じゃなくてなのはのことなんだけど・・・」

なのはのこと？本人はキョトンとしている。

「ここんとこ毎日なのはの下駄箱に手紙が入ってるの。中身はラブレターっぽいんだけど差出人が書いてないのよ」

「え？あれラブレターだったの？」

「どう見てもあれはラブレターでしょ！『あなたにお伝えしたいことがあるので屋上にきてください』って。しかも毎日」

まあ、直接手紙に好きとは書いてなくてもそりゃラブレターだと思うよな。恭也さんがいなくてよかったー。

「でもね、その手紙、少しおかしいの。だから今までほっといたんだけど」

すずかが深刻そうに言って手紙を持ってくる。

すずかが保管してたみたいだ。捨てればいいのに。

「どれどれ・・・・・・」

5通ほど渡された手紙を読む。

「呼び出しの時間が遅いな。それに何度も出して無視されてるわりに内容に変化がない。それにこの封筒の気配・・・」

渡された手紙はどれも内容が同じだった。筆跡、紙、封筒、どれもコピーしたみたいに変化がない。しかも封筒に妙な気配を感じる。

あまりよくない気配だ。

「とりあえずこの手紙は預かるね。それと僕も来週から聖祥学園に通うことになるからそのときにまた詳しく調べるよ。ちなみにすずかは体調とか大丈夫？」

「うん。なんともないけど・・・」

「ならよかった。この封筒からよくない気を発してたから」

「あんた、そんなこと分かるの？」

「まあね」

なんにしてもこのタイミングで編入はよかった。この手紙からはあまりいい予感がしない。

「それにしても、なのはの天然はすごいな」

「ふぇ？」

「普通この手紙見たらまず最初にラブレターが頭に浮かぶでしょ」

「そんなこと言ったって、私こういうのわかんないよ・・・・・・」

「ま、こうゆうところがなのはの可愛いところなんだけどね」

「にゃっ！」

「なのはちゃん、お顔真っ赤だよ」

「そ、そんなことないもん」

手で覆って赤い顔を隠そうとする。まるで小動物みたいだ。まあうちにも小動物がいるけどあいつは例外。

と思ってたらその小動物2人がハッと顔を上げる。もちろん僕も気づいた。

『ジュエルシードが発動したね。しかもこの敷地内で』

発動前では集中しないと気配に気づけない。こんな近くでも分からないとは。

『うん。でもどうやって抜け出そう・・・』

『僕に任せて』

そう言うとユーノがなのはの膝から飛び降りて部屋の外に出ていってしまった。

なるほど、いい案だ。

「あ、ユーノ君」

なのはがユーノを追いかけるふりしてジュエルシードに向かおうとする。

「あ、なのは！」

「ごめんアリサちゃん、ユーノ君連れ戻しにくるから待ってて」

「じゃあ僕も一緒に行くよ」

「うん、お願い」

「2人ともちょっと待っててね」

早くしなさいよという声を後ろで聞きながらジュエルシードの発動場所にダッシュで向う。

僕が着いたときにはなのはと同じくらいの金髪の女の子が巨大猫と戦っていた。

「あの子も魔法使いなの？」

おそらくそうだろう。

なのはと同じ魔力の感じだ。もちろん魔力にもそれぞれ違いはあるが、リンカーコアから発している流れが同じに感じられる。

「はあっ！」

金髪の子が斬撃を飛ばして猫をダウンさせる。

起き上がろうとする猫をもうひとりの犬耳がある女の人が叩きつける。

「ジュエルシード封印」

すかさず金髪の子がデバイスを猫に向けてジュエルシードを封印させた。

なのはよりも断然手際がいい。２人のコンビネーションがよく合っている。
あの子が予知夢であった子だな。
今更ながら予知夢の正確さにはおそれいる。

「君たちは何者だ」

ユーノが叫ぶ。なのははまず何から話せばいいのか考えているように見える。

「なんだいあんたたちは」

「それはこっちのセリフだ。そのジュエルシードは僕たちスクライア一族が発掘したものだ。君たちはそれをどうするつもりだ」

「・・・・・・」

金髪の子は口を開こうとしない。そしてその目はユーノではなくなのはのほうに向いている。

「あ、あの、それはユーノ君のだから返してくれないかな？」

なのはの問いかけに無言で見つめる。

『公太、君が取り返せないか？』

『無茶言わないで。僕は空が飛べない』

となると頼みの綱はなのはだけだけど・・・・・難しいな。

「フェイト」

犬耳の人が金髪の子に何かを促す。
その促しに頷き、魔方陣を展開させる。

転移魔法だな。

「私の邪魔をしないで」

去り際に金髪の子がなのはに向かってそう呟いた。

「ちょっ、待て！」

ユーノが走り出すがもう遅い。
2人は完全に消えてしまった。気配も感じない。

あの子が予言の子。
どうするかな。

＜あとがき＞
変身のとき、下着も変わるけどあれってパンツなのかな？
よく分かりませんが男のロマンのためにパンツだと信じます。

そろそろ公太を強くしたい。

第五話　なのはの決心（前書き）

すいません。タイトル間違えていました。

第五話　なのはの決心

あの子の目・・・・・あの目には見覚えがある。
研究所で多くの人がしていた目だ。
あの子は僕にとってどういった存在なんだ？なのはの練習相手にはちょうどいい相手だが、なのはを鍛えるためだけの存在なんかではないだろう。夢ではさらなる苦難が待ち受けると言っていた。だけど、この夢ではハッキリと悪い道という言葉は言っていない。苦難と悪いは違う。

あれこれ考える前に、まずあの子のことについていろいろと知らないとな。

～第五話～
「で、公太、これからどうするの？」

「君、最近全部僕任せじゃない？」

「え、そうかな？」

あの後何事もなかったかのようにアリサたちのところに戻り、普通にしていた・・・・・僕は。

「まあいいよ。それで・・・・・なのははどうしたいの？」

「・・・・・うん・・・・・」

あれからなのははずっとこの調子だ。おかげでアリサたちには問い詰められ、恭也さんにも家でしつこく聞かれた。もちろんうまくはぐらかしたけど。でもあの三人にはいつまで黙っててもらえるか・・・・・来週から学校だし・・・

そういえば手紙の問題もあったな。問題が山積みだ。とにかく来週までになのはをなんとかしないと。

「こういう時はとにかく悩みまくれ。適当な答えを出すよりずっといい。とりあえずこの問題が片付くまで修行はお休み」

「え・・・・・・」

「そんな状態で効率のいい練習はできないよ。そのかわりによく考えろ。遅れた分は僕がちゃんと取り戻させてみせるから。それになのはが達した答えに僕の助けが必要なら全力でサポートする」

「うん・・・・・ありがとう」

なのはの悩みは疑惑と不安だ。

あの子らのコンビネーションなどの戦闘技術を見て、頑張って修行してもあの子に敵わないんじゃないか、ということと、自分がこれからしようとしている行動は本当に正しいのか、ということだろう。これは僕が教えたところで納得していなければ、必ず戦いの障害となる。戦いにおいて、疑惑と不安は重大な足枷となる。

僕とユーノは部屋から出てお互い深いため息。

ユーノにいたっては、自分のせいで巻き込んだと思っているから自己嫌悪に陥っている。

ユーノより僕のほうがよっぽど巻きこんだ原因なのにね・・・・・。

◇　　◇　　◇

部屋で1人になって深く考えるなのは。
あの子の目が寂しそうだった。助けになりたい。でもそのためには一度戦わなくちゃいけないだろう。あの目はお話しよう、と言って素直にそれに応じる目じゃなかった。
戦いになって勝てるかなと不安にもなる。すごいスピードだった。私じゃ追いつけない。
それに余計なことかもしれない。でも、ジュエルシードはユーノくんのだし・・・・・・

「ああ～、考えがまとまらないよう」

とりあえず一旦考えるのをやめにして気分転換に散歩に出かける。でもやっぱり歩いている最中にあれこれ考えてしまう。

「・・・・・・・・・あ、お母さん」

「あら、なのはじゃない。今日は公太と一緒じゃないの？」

「うん・・・・・・」

「何か思い詰めている顔ね。公太関係ではないみたいだけど」

お母さんにはすぐに私の異変に気づかれてしまう。なのははそんなに分かりやすい顔をしているかな？
お話、聞いてもらおうかな。人に話したら楽になるかもしれないし。

「あのねお母さん、ちょっと時間いい？」

「ええ、いいわよ」

微笑み、だけど真剣になのはのお願いに了承する。

2人は近くの公園の長イスに座る。

なのははあの女の子に会ったことを一通り話した。もちろん魔法のことやユーノのことは言っていない。探し物をしていて相手も同じものを探しているということと、相手の女の子が寂しそうな目をしていて、自分がしようとしていることは正しいのだろうか。そしてそれを実行するのが難しいということ全てを吐き出した。

桃子は静かにその話を聞いていた。

なのはが話終わって少し間が空く。

桃子は瞑っていた目を開いてなのはを見つめて聞く。

「なのははどうしたいの？」

「私はあの子とちゃんとお話がしたい。でも・・・・・」

自分の言葉になのはは俯く。それを見て桃子が口を開く。

「それが正しいか正しくないかは私には分からない。でも、なのはがその女の子を何かから助けたいと思っているなら助けなさい。それは余計なことかもしれない。でもその子が助けを求めているのかもしれない。そんなのは実行してみなくちゃ分からないわ。なのはの信じるようにしてみなさい。ウジウジ考えていても何も変わらな

いわ。そしてそれを成すために目一杯努力をしなさい。公太も協力してくれるのでしょう?だったら尚更大丈夫よ。それに・・・・・・」

「それに?」

「なのはは私と士郎さんの自慢の子・・・・・・なのはならやり遂げることができるわ。自分を信じなさい」

「お母さん・・・・・・」

そうだよね。いつまでもウジウジしているなんて私らしくない。もう迷わない。公太君もいるもん。公太君とならなんでもできそうな気がする。

「ありがとうお母さん。お母さんに話して良かった。なのははもう迷いません。目標に向かって頑張ります」

「頑張って。応援してるわ」

先に帰ってるねと言って公太にすぐ報告するために家に向かって走っていくなのは。その後ろ姿を見ていたのは桃子だけではなかった。

「ありがとう母さん」

「あら、聞いてたの?」

この場にユーノはいない。公太だけがこっそりなのはのあとをついてきていた。

「なのはが心配でね」

「私は何もしていないわ。ただ、ほとんど答えが決まっていたみたいだったから背中を少し押しただけ。自分の行動に自信がなかったみたいね」

なのはは優しい子だからね。
でもその背中を押せるのは母さんだけだよ。

「やっぱり家族っていいもんだね」

「何言ってるの。あなたも大事な私たちの子よ」

「・・・・・うん・・・ありがとう」

僕はこの家族を守らなくてはならない。
この先に何があろうと。

「なのはの決心を聞かなきゃいけないから先に帰るね」

「なのはのことをお願いね。これと決めたらとことん無茶をする子だから」

「母さんの娘なだけあるよね」

「ふふ、そうね」

◇

◇

◇

僕はなのはの先回りして帰宅した。

「公太君聞いてほしいことがあるの」

自分の部屋でなのはを待っていたら、勢いよく扉を開けてなのはが飛び込んできた。

全速力で帰ってきたみたいで汗がすごい。

なのはが運動音痴でなかったら間に合わなかったかもしれない。

「はあ、はあ」

「落ち着いてなのは」

「はあ、はあ・・・・・・ふぅ」

息を整えて目をこちらに向ける。

いい目だ。

「ん、話を聞こうか」

「うん・・・・・・・・・あのね、私もっと強くなりたい。それであの子とちゃんとお話したい。私のすることは余計なことかもしれないけど・・・・・・でも、あんな眼をした子をほっとけない。だから・・・公太君、私を強くしてください」

なのはの真剣な願い・・・・・・・・・もちろん僕に断る理由はない。

それに実は僕はまた未来を見た。

あの金髪の娘・・・フェイトとなのはが戦っている未来が。

でもそれは決してただの争いではなかった。

うまく表現できないけど悪いものではないというのは断言できる。

「それがなのはの覚悟なんだね。ならば僕はその覚悟に全力をもって応えよう」

「ありがとう公太君」

「よかったな、ユーノ君？」

部屋の外で聞き耳を立てていたフェレットに向かってからかいを含めて話しかける。

ばれていないと思っていたのかひどく驚いた様子でこちらを見上げる。

いや、僕は人の気配を読むのが最も得意だというのを知っているはずだよね？

「う、うん・・・よかった」

ユーノの様子がおかしい。

フェレットだから表情が分かりにくいが、あれは喜びの顔ではない。

驚きと困惑・・・・・・今更なぜ・・・

「なのはの決意は聞いたな。君にも手伝ってもらうよ」

「わ、分かった」

僕は魔導師ではないからね。教えるにしてもある程度の限界か制限はある。

魔導師・・・・・・・・・そうか！

『ユーノ、話がある』

『・・・・・・・・・・』

◇　　◇　　◇

ここはまだ僕の部屋。
なのはには先に外に出てレイジングハートといっしょに魔法の練習をしてもらっている。

「で、君は何をしていたんだ？」

「・・・・・・・・・」

「察するに魔法を使って君自身の存在を消したかなんかをしたのだろう？でも僕がいとも簡単に君の存在に気付いた。違うかい？」

「・・・・・そうだ。僕が使った隠蔽魔法は中でも高度で、その分完全に気配も消えていた・・・はずだった。Ｓランク魔導師でも見つけるのは困難な魔法だ」

「なら、僕がＳランク以上の力の持ち主だってことじゃない？」

「ちゃかさないでくれ！僕は君が怖いんだ！あまりにも異質な君が！」

見た目通り小動物的な性格をしているな。

「分かった、なら説明してやる。まず一つ、僕は君たちの魔法につ

いての知識が豊富だ。もちろん僕は魔法を使えないし、一つ一つの魔法を知らない。でもリンカーコアを使う魔導師というもの自体についてはおそらく君以上に詳しい」

「・・・・・・・・」

「だからといって知識だけでは君の魔法を見破ったことには当然ならない。二つ目としては・・・・・あ～そもそも僕の気配察知は特殊なんだよね。それ以前に僕には精神操作とかそうゆう類のも効かないんだよ。もちろん無敵というわけではないんだけどね。効きにくいというより耐性があるのかな」

「異常だ・・・・・そんな存在いるわけが・・・」

「それが僕たち・・・」

『公太君、ユーノ君、まだ？』

僕が言いかけたところでなのはから念話があった。
危なかった。僕としたことがうっかり話してしまうところだった。

「・・・・・・」

僕は無言でユーノを見る。

『・・・・・今から行く』

納得はしてないだろうけどなのはは巻き込みたくないだろうからね。

◇

◇　　◇

「いい？フェイトって子は確かに今のなのはよりは強い、けどそこまで差はない。二人とも実践慣れをしていない。これはけっこう大きなことだ。魔力資質がなくても実践慣れしていればたいていの敵には勝てる。だがあの子はそうではない」

「じゃあなのはが負けている要因は？」

ユーノが質問する。

僕への不信感は抜けていないにしてもなのはの修行だ。

自分のことより他人のことをきちんとしているところがこいつのいいところだよな。

「魔法慣れをしているところとそうでないところだね」

「確かになのはは魔導師になってまだ間もない。確かにこれは決定的な差だ」

「ただ、なあ・・・・・ユーノやレイジングハートに聞く限りでは魔法資質はほぼ同じみたいだけど・・・」

『なにか気になることでもあるのですか？』

久々にレイジングハートが話しかける。

普段なのはとは会話をしているみたいだけど僕とはあまり話さないからね。

やっぱりレイジングハートも僕のことを警戒しているのかな。

「いや、気にしなくてもいいよ。なのはとの戦いに直接関係ないか

ら」

『そうですか』

はい、レイジングハートとの会話終了。
続かないなあ・・・・・・

「とにかく魔法慣れをしないとね。状況によって最も有効な魔法の選択ができるように魔法というもの自体を理解しないといけない。ま、その辺は後回しにして」

僕は頭の中で考えていた練習メニューを再度確認する。
ユーノやレイジングハートの役割もちゃんと細かく考えている。

「なのは、ディバインバスターを空に向かってフルパワーで打ってみて」

「うん、分かった」

『Ｓｈｏｏｔｉｎｇ　Ｍｏｄｅ』

「ディバイン・・・・・・」

レイジングハートの先端に魔力が集まる。

「バスター！」

魔力砲が雲を巻き込み天に向かって発射される。
その影響でものすごい魔力波（僕にとっては単なるすごい風）が発生する。

なるほどね。すごい威力だ、が

「実用性がまるで皆無だな」

「え～、どうして？」

「威力は申し分ないけど溜めに５秒、事後硬直、威力以外は論外」

「う～どうすればいいの？」

「フェイトって子は近接系だろうけどそれよりも使い魔がいることがとてもやっかいだ。なのはは砲撃系だから使い魔が接近戦できたら砲撃では対処しにくいし、本命のフェイトに隙ができる。何が言いたいか分かる？」

「えっと、使い魔さんとのコンビネーションもやっかいで使い魔さんと戦っていたらフェイトちゃんが砲撃魔法とかの準備する時間を与えちゃう・・・・・・ってこと？」

「正解。じゃあその解決策は？」

「え～っと・・・・・・」

『戦闘スタイルを変えるか魔力砲を効率良くするかですね。前者は時間をかけてやらなくてはならないのでディバインバスターの改良を第一とすべきかと』

おお、レイジングハートが答えてくれた。

「そう、正解。当面は魔力供給の効率化だね」

はい、レイジングハートとの会話終了。
なのはにレクチャーしながらそればかり考えてしまう。

「でも君に魔力供給の仕方なんて分かるのか？」

「さっきなのはが魔力を溜めているときに観察して魔力の流れやいろいろな仕組みを持ち前の知識と合わせてだいたい理解した」

僕のセリフにみんな唖然としている。
いい加減そのリアクションに飽きてきたんだけど。

『私はあなたの仕組みが理解できません。一体何者なんですか？』

ユーノが思っていることと同じことを言うレイジングハート。
レイジングハートと会話をしたいといってもこんな内容じゃないんだけど・・・・・・

「公太君は公太君だよ。私のお兄ちゃんだもん！」

なのはが必死にフォローしてくれるけどお兄ちゃんって・・・・・・・
なのはも顔真っ赤だし。

「なのは、そうは言っても・・・・・・・」

「僕の正体を突き止めることが今するべきことか？」

「それは・・・・・・・」

「人は未知なる存在に出会うと恐怖する。そして少しでもそれに抗うために知識を求める。その気持ちは分かるが僕はなのはの味方であるのは間違いないし変わることはない」

『・・・・・分かりました。ではマスターと一度戦ってください。そこのフェレットも一緒に。今のマスターの力量を直に測るいい機会にもなります』

別に十分なのはの力量は分かっているつもりなんだけどな・・・・・・まあこれで納得してくれるならいいか。

「分かった。じゃあユーノが五分間僕の攻撃に耐えたら僕の力の一部を見せてあげよう」

僕は一つだけまだ完全に理解していないものがある。
僕にとってもこれはいい機会だ。

「いつでもかかってきていいよ」

ユーノが無言で魔力弾を放つ。
それを片手で払うようにしてはじく。
とても軽い攻撃だ。なのはの半分の力もない。

一気に詰め寄って右手でユーノに殴り掛かる。

「ふんっ」

当たる寸前でピンク色の魔法陣がユーノを守る。
そのまま僕は体をひねって後ろに回り、再度左手で殴るがこれも防がれる。

これでは埒が明かないので一旦距離をとる。
ここまでで1分。

今度はかなりの数の魔力弾を展開するユーノ。
質より量ってわけか・・・・・いやこれはなのはの魔力も少し混じっているな。

一斉射撃
ものすごい弾幕だがすべて叩き落とす。
なのはのとかユーノとかは関係ない。全部僕にとっては軽い。
なるほどこれで時間を稼ぐわけか。
たしかにユーノの攻撃は当たってもさして問題はないが、なのはの魔力弾は無傷とはいかない。
ダメージを無視して突っ込んでもいいけどなんか気持ちよくない。

「すぅー・・・・・はあっ！」

気当たりを放つ。
まあ単にものすごい風を起こしただけだけどそのおかげで弾幕が止む。

弾幕で周りが全く見えない状況。だが、見えていないけど分かる。
なのはがディバインバスターを放とうとしている。
さすがにあれは簡単に防ぐことはできないので発射と同時に回避する準備をする。

なのはがディバインバスターを放つ瞬間

「なっ！」

「バスター！」

ユーノがやったのか、僕の真上にテレポートした。
よけるのは簡単だが、上からの攻撃だから遠く離れないと完全にはよけられない。
かといってそこまで移動する時間もない。

ドォォォォン！

なのはのディバインバスターが直撃した。

「やった！」

ユーノの喜びとなのはの複雑な顔。

「ユーノ、それは負けフラグのセリフだぞ。それとなのは、気にしなくていいよ。僕は見ての通り無傷だから」

「な、なんで・・・」

僕はなのはとユーノよりさらに真上に移動していた。
なのはは僕が直撃したと思って心配してたみたいだ。

『私は常に彼の存在をとらえていました。ですがマスターの攻撃が

当たる直前で公太さんが眼帯を外すところまでは見えていたのですが・・・・・・』

「その瞬間消えたということか」

『はい』

なのはのあの攻撃を完全によけるには、なのはよりさらに上の位置にいる必要があった。
だから『眼』の力を使ってなのはの真上に移動したというわけだ。
もちろん移動しても飛べないから落下したため木の上にうまく着地する。
もちろん防ぐことも可能だったけど

「ま、五分たたなかったけどサービスだ。僕の目的は果たしたからね」

僕が知りたかったのはレイジングハートのスペック。
レイジングハートは僕の初撃に完全に反応した。
あれはなのはが命じたものではなくレイジングハートが自己の判断で行ったものだ。
しかも完全に不意をついて簡単に目視できないスピードで行ったにも関わらずだ。
ものすごい高性能なＡＩを積み込んでいる。
僕の知識にもここまでのデバイスは知らない。

いろいろ分析したいところだけどそうゆうのは後にして今はなのはの修行だ。
ユーノも考え込んでいたが、すぐに修行の準備をし始める。

「じゃ、修行開始と行きますか」

◇　◇　◇

オリ主紹介

・神代公太

＜能力＞

～の眼（後に名称が出ます）

未来を見ることができる眼。

眼帯をしていても見ることができる。

未来といっても人生の分岐点（ターニングポイント）しか見られず、自由に発動したりできない。

この眼のせいか、夢でお告げのようなものがたまに聞こえる。

～の眼（後に名称が出ます）

詳細不明。

どうやら瞬間移動らしきことができるみたいだが・・・・・・

◇　◇　◇

＜あとがき＞

まだまだ詳しくは出ていませんがオリ主のスペックを紹介しました。

名称は不明なのは教えられない理由があります。
一つ分かれば能力によって自然に名称が分かるものです。

今回はユーノとレイジングハートの疑惑でした。（なのはもかな）
次回はまたフェイトを出したいと思います。

第六話　フェイトと初めての共闘

修行を始めて一週間。
その間にジュエルシードを二つも封印することに成功した。
ジュエルシードの封印はいい練習になる。
毎回発動するものによって相手の戦闘パターンが変わるのは実践相手としては申し分ない。
ただ、僕たちがジュエルシードの気配を感じて現場に急行した時、すでに封印されていたことが何回かあった。
おそらくフェイトが封印したのだろう。
手持ちのジュエルシードはこちらのほうが多いだろうが油断はできない。
向こうもそれなりに強い。
なのはは対魔導師との戦闘は皆無なのだから。
ちなみに僕は全く手出しをするつもりはない。
その結果ジュエルシードがすべてフェイトに奪われてもしょうがないこと。これはユーノにも了承してもらっている。
この物語はなのは自信の手で進めてほしい。
僕がするのはその手伝いだけだ。

～第六話～
「おはよう、なのは」

「んにゅ、おはよう・・・・・・」

これは疲れているからこんなに反応が薄いわけではない。
ただ単に朝に弱いのだ。
ピンクのパジャマを着てまだ髪を結んでいないまま目をこすりながらリビングにくるなのは。
僕は髪はおろしているほうがかわいいと思うのだけどそれを言ったら、「この髪型がなのはなんです」と意味の分からんことを言われた。

「ほらほら肩でてるよちゃんと着て。それと顔洗ってきな」

まるで保護者だよ。
母さんたちは店の用事で早くに家を出たから今はなのはと僕と動物(フェレット)が一匹だけだ。
ちなみに今日から僕は学校に行くことになっている。
最初だからと早めに行こうって昨日言ってたのに・・・・・・

「ふぁい・・・・・・」

これじゃあ早くはいけないな。

「結局遅くなっちゃった～。せっかく今日は公太君の初登校日なのに」

「なのはが寝坊助なのがいけないんだろ。ま、でもなのははそのほうがいいよ」

「う～、どうゆうこと？」

「そのままの意味」

「う～」

キーンコーンカーンコーン

「はーい、今日は転校生を紹介しまーす」

「神代公太です。みんなよろしくね」

今はＬＨＲ（ロングホームルーム）の時間。

なのはとアリサとすずかと同じクラスだ。

「あ、先生は水城瑞希って言いまーす。よろしくね」

「あ、はい」

すごいおっとりした先生だな。

肩ぐらいまでの長さの髪をした眼鏡をかけた女性だ。

生徒たちに人気があるタイプだな。

「席はあそこね」

指定された席はなのはの前の窓際だ。
ちなみに窓際から僕、なのは、アリサと並んでアリサの前にすずかがいるというすばらしい組み合わせ。

「よろしく、公太」

「よろしくね、公太君」

「よろしく、アリサ、すずか」

キーンコーンカーコーン

「ねえねえ、どこから来たの？」
「好きな食べ物は？」
「高町さんと一緒に住んでるってホント？」
「その眼帯はどうしたの？」

転校生にはお決まりの質問攻め。

「外国から親の都合でね。親とは別行動だから高町さんの家にやっかいになってるんだ。眼は生まれつき見えないんだ。食べ物は大体のものは好きかな。でも空豆だけは無理。あの触感が何とも・・・・・」

と予測していたことなのでてきぱきと対応する。

ちなみに空豆が苦手なのはほんとだ。豆自体は嫌いじゃないんだけど空豆だけは無理。

「なあ、お前あの三人と知り合いなのか?」

見るからにガキ大将って感じの男の子が話しかける。

三人ってなのはとアリサとすずかのことかな。

「うん、なのはの家によく来るからね。たまに遊びに行ったりもしてたし」

「な、何!お前家に遊びに行ったりもしてんのか!」

「そんなに驚くこと?」

「当然だ!我が校の三大美女といとも簡単に仲良くなりやがって」

え、なに?今どきの小学三年生ってこんなんなの?なんか周りの男子も睨んでるし。

「いやたまたまだよ。それよりあの三人ってこの学校じゃ有名なの?」

「当然です。キツイところがあるけどそれがいい、このクラスのリーダー的存在のアリサさん。そしてアリサさんの対となるこのクラスの癒し系すずかさん。そして・・・・・・」

いかにもって感じの眼鏡男子が一生懸命説明するけど

「ああ、分かった。もういい」

「そして・・・」

無視かよ。

「いつでも笑顔がまぶしく、天然なところがかわいさをさらに引き出すこのクラスの妹的存在のなのはちゃん」

なんでなのはだけちゃん付けなんだよ。

「とりあえず分かったよ」

「いいえ、彼女たちのすばらしいところは他にも・・・・・・」

まだ続くのかよ。

「ちょっとやめなさいよ！だいたい男子はいつもいつも気持ち悪いのよ。そうゆうのやめてくれない。だからなのはにあんな手紙が・・・」

アリサが眼鏡男子（以下、眼鏡）を見かねてか止めに入ってくれる。すずかとなのはもこっちを見ている。なのはがなぜかすずかの後ろに隠れているのが気になる。

「アリサ、いいよ。それよりお昼食べようよ。屋上って行っていいのかな」

というかやめてあげて。
このぐらいの男の子の精神年齢って女の子より低いものだから。
あ、ほら泣きそうな顔してる。

「いいわ、さっさと屋上に行きましょ」

この学校は給食じゃなくて弁当制だ。
ちなみに僕たちのお弁当は僕が朝作ったものだ。
桃子さんが作ってくれると言ってくれたんだけど、それを毎朝してもらうわけにはいかない。
今日みたいに朝早くに仕事に行くこともあるだろうしね。

「あ、私たちも一緒にいい？」

「僕は構わないよ」

「じゃあ一緒に行きましょ」

いろいろとあったけどこうしてなのはたち以外のクラスの女の子たちと一緒にお昼を食べることになった。当然男子（僕以外）抜きで。
あれ、これってもしかして周りからしたら僕っていい位置にいる？

屋上に行くまでの間も女の子たちからの質問攻めだった。
特にしつこく聞かれたのはなのはたちとの関係だった。
誰が本命だのなんだのってホントに女の子は色恋沙汰が好きだな。
てっきり眼帯についてしつこく聞かれると思ってたんだけど・・・

・・

「わあ、そのお弁当神代君が作ったの？おいしそう」

「あ、高町さんのも同じお弁当だ」

「うん。朝私が起きる前に作ってくれたの」

「うわ～羨ましい」

屋上に着くとみんなでお弁当のお披露目タイム。
すずかもアリサも普通のお弁当だ。
重箱とか持ってきそうな感じだけど、考えてみれば食べきれないか。

「あ、自己紹介がまだだったわね。私は宮井暁子」

「小鳥遊ミリアです」

ショートカットの活発そうな女の子が宮井さんで、眼鏡をかけて腰ぐらいまでの髪の長さをしたおとなしそうな子が小鳥遊さん。
名前からして小鳥遊さんはハーフかな？
見た目は日本人っぽいけど・・・

「・・・・・」

「よろしく」

自己紹介が早々に済んでまた質問タイム。

「で、だれが本命なのよ」

さっきからこの質問ばっかだよ。
質問してくるのは宮井さんだけで小鳥遊さんは黙って聞いてるだけだけど・・・興味津々って態度が隠しきれていない。

「ちょっとやめなさいよ。だいたいこんな得体のしれないやつに好かれてもこっちが困るだけよ」

「別にそんな恋愛感情はないよ。特になのはに関してはかわいい妹って感じだね」

「と言ってますが今のお気持ちは」

マイク風に手を握り締めてなのはの口元にもっていく。

「え、えへへ」

照れてる。

「どうやらかわいいってところに照れてるみたいね」

「高町さんはほんとに見ててかわいいわね。クラスの男子がほっとかないはずだわ」

「男子ってみんなガキじゃないのよ」

まあ確かにここのメンバーからしたらみんなガキに見えるかもしれないね。
アリサやすずかはもちろん、小鳥遊さんと宮井さんもけっこう進んでる子みたいだし。

「そういえば神代君ってなんで眼帯してるの？」

「暁子ちゃん、そうゆうのを聞くのはよくないよ」

なるほど、小鳥遊さんは宮井さんの歯止め役なのか。

たしかに宮井さんは誰かが止めなきゃとことん突っ走っちゃうかもね。

「教室でも言ったけど生まれつき目が悪いんだよ」

「そうなのアリサさん？」

「知らないわよ。そうゆうのはなのはのほうが知ってるんじゃない？」

「わ、私も知らない。お風呂の時ぐらいしか外しているところ見たことないし」

こないだの模擬戦の時に一瞬外したけどね。

「お、お風呂・・・・・・」

「高町さん・・・まさか一緒にお風呂に入ってるんじゃ・・・・・・」

「にゃ、そうじゃないよ。前に一回間違えて・・・その・・・・・・」

ああ、あのときか。

僕がお風呂からちょうど出たときにバスタオルをしまいにきたなのはが脱衣所に入ってきたんだ。

「あれはタイミングが悪かっただけだよ」

ちゃんと僕はバスタオルを巻いてたしね。

「な～んだ。でも高町さんなら平気でお風呂とか一緒に入っちゃいそう」

さすがにそれはないよ。

たとえお願いされても僕が遠慮する。

「にゅ～。なんで遠慮するの？」

「あ～高町さん、一緒に神代君とお風呂に入りたいんだ」

「なのはちゃん・・・」

「そ、そんなことないよ」

「じゃあなんでそんなこと聞くのよ」

「だ、だからね・・・その・・・・・・私と一緒なのが嫌なのかなあって・・・」

なんだそんなことか。

でもだったらもうちょっと聞き方を考えてほしい。

あんな聞き方したら誰だって誤解する。

「そんなこと・・・・・・」

「そんなわけないじゃない。神代君は高町さんと一緒に入るのが恥ずかしいんだよ」

え？

何を言ってんの宮井さん。

「ほんとは高町さんと入りたくて仕方がないんだけどそれを上回る恥ずかしさで遠慮しちゃってるんだよ」

「いや、そうじゃなくて・・・」

「そうなの？」

なのは、そんな目で僕を見ないでほしい。

違うとは言えない。

いや言うのは簡単だけど、どんどん泥沼にはまっていく気がする。

「あんたに羞恥心なんてあるとは思えないけど」

僕がそんなことを思っていないと分かっているから落ち着いた様子でいるアリサ。

まあそうだな。もし僕がホントにそう思っていたらアリサが一番に怒鳴り散らす。

「そうだな・・・・・そんな感情はとっくに失くしちゃったかもね」

今でこそ楽しんで笑っているけど昔はそうゆうのが全くなかったか

ら。

「神代君って不思議な感じがします」

今まで黙っていた小鳥遊さんがそんなことを言い出した。

「あ、それ私も思います」

小鳥遊さんの言葉にすずかが同意する。

「そう? 得体のしれないってとこには同意するけど、不思議ってよりは怪しい」

はは、感じ方は人それぞれだから。

・・

午後の授業が終わって、今は放課後。

「さて、手紙の主を探す時間だ」

中身の手紙はただのコピーだから捨てた。

というより今日も下駄箱に入っていたからまだ手元に一枚ある。

肝心なのは封筒のほうだ。

最初に手紙が入った封筒が下駄箱に入れられた時はなのはが開けて、

次の時はアリサが開けたみたいだ。

それ以降からはほとんどアリサが取り上げるようにして開けていた

らしい。
このことからも考えて封筒に何らかしらのトラップが施されていたことはないだろう。
だがこの嫌な気配は何かある。
それに一つ目の封筒と比べてだんだんまがまがしくなっている気もする。

「で、どうやって調べるのよ」

「気の糸をたどる」

「気の・・・・・・糸？」

「まあ見てて」

目を瞑り、集中する。
封筒から発している気とこの町のどこかにある気の発生源とを結ぶようにして。

「・・・・・・・・・」

これは・・・・・・・

公太は静かに目を開ける。

「公太君、何か分かった？」

「この学校から気配を感じる」

「え！」

しかもこの場所は・・・

「屋上に来てみたけどなんにもないじゃないのよ」

確かに何もない。けど屋上に気配が充満している。
昼食を食べているときにはこんなことなかったのに。
僕が気付かなかった・・・・・いやそんなことはない。
ここまで強い気配に気づかないはずがない。放課後になって急に現れたんだ。
それにこの気は！

「みんな今すぐここから離れるんだ！」

「え、どうゆう・・・・・こ・・・と」

ドサッ

「アリサちゃん！」

アリサが倒れた。
この気に当てられたんだ！

「どうしよう公太君」

原因は分かっている。だけどすずかが・・・・・

ドサッ

「すずかちゃん！」

馬鹿な！

なぜすずかまで。

「なのは、よく聞いて。この場所には複数の気配が混ざっている。その一つが・・・・・・・・・ジュエルシードだ！」

「きゃっ」

発動した。

しかもジュエルシードとは違う力も発動した。

「なのは！構えろ」

屋上に漂う大気が渦状になって集まり始めた。

中心にジュエルシードらしきものが見える。

「形にならない！？」

気配がただただ渦巻いているだけだ。

「とりあえずあの渦に向かって攻撃するんだ」

「うん。アクセルシューター」

なのはの周囲に魔力球が出現する。

「シュート！」

なのはが放った魔力球で大気が霧散したが、すぐにまた集まる。

威力が弱い。

一気に魔力であの大気ごと覆うしかない。

「ハーケンセーバー」

黄色い輪っかが渦に衝突した。

先ほどより大きく霧散したがまた集まる。

「フェイトちゃん！」

「ジュエルシードは私が封印する」

フェイトが再び攻撃を行おうとする。が渦から触手のようなものが飛び出してフェイトを襲う。

「！？」

「大丈夫？」

襲ってくる触手に対して目を瞑ってしまうフェイト。

そこに公太がかばうようにして触手をはじく。

「なんで私を助けるの？」

「女の子を助けるのに理由が必要？」

心底驚いた顔をするフェイト。
そこまで驚くことか？

「フェイト！」

使い魔であるアルフがフェイトのもとへと駆けつける。

「アルフ」

「フェイト、大丈夫なのかい？」

「私は大丈夫。この人が助けてくれたから」

「あんたは・・・・・」

一気に敵を見る目にかわるアルフ。
でも今は相手をしている場合じゃない。

「今は争っている場合じゃない。とにかくあれを鎮めるよ」

「何言ってんだい。ジュエルシードは・・・・・」

「フェイトちゃん一緒に戦おう？」

「でも・・・・・」

あれはジュエルシードだけではないから僕が直接終止符を打ってもいい。
でも・・・・・
僕はなのはの力を信じている。

僕が鍛えたからじゃない。それになのはの強さは魔力とか魔法とかそれだけじゃない。
いや、魔力は強いかもしれないけどまだ魔法は強くなかったね。

「フェイトちゃん。お願い。私と公太君を信じて」

「どうするんだい、フェイト」

「私は・・・・・・」

フェイトの脳裏に先ほど助けてもらった公太を浮かべる。
そして今の真剣ななのはの顔を見る。

「分かった。今だけ」

「フェイトちゃん・・・」

アルフもフェイトがそうするならと協力体制をとる。

「いいかい？あの渦を二人の魔力で覆い尽くす。君たちが魔力発射する準備の間僕が全力で守るから安心して」

「あたしも守るよ」

「分かった」
「うん」

とりあえずなのはは魔力運用にだけ集中して効率とか難しいことは考えないようにする。
あの渦を完全になくすには、生半可な魔力じゃ消しきれない。

中途半端にやってもし消しきれなかったら二度手間になる。
さすがに二回もできないだろう。
それにフェイトも時間がかかるみたいだから僕がしっかりその間の時間稼ぎをする。

「いくよフェイトちゃん」

「うん」

今まで長々と話しているように感じるが実はその間も動いていた。
主に僕が。
手に気を込めながら触手をいなす。

多くの触手がなのはとフェイトを一斉に襲う。
おそらくなのはたちが魔力を溜め始めたから危機感を抱き始めたんだ。
今まで触手が分散して襲っていたものが僕とアルフを無視してなのはとフェイトだけに的を絞り、その分一人あたりの触手の数が増えた。

フェイトは一瞬、また目を瞑るがなのはは瞑らない。

「よく目を開けていられたね」

「公太君が最初に教えてくれたことだから」

「よくできました」

なのはと公太のやり取りを呆然と見ているフェイト。
何を思っているのか、

「フェイト、魔力がしぼんでない？」

「あ、」

公太の言葉でフェイトは再び魔力を込める。

ブウォンッ

「なんだ！？」

いきなり渦がさらに広がって触手が倍以上に増えた。
そして触手の先が鋭くなり少し太くなる。
あれではいなすのが難しくなる。

「大丈夫。二人とも、僕を信じて」

「うん」

「・・・・・・」

「でもそうするんだい？」

「十分に魔力が溜まったね。二人とも５秒後に発射だ」

「「分かった」」

「5，4」

公太は右目の眼帯を外す。
右目には白い瞳が。

「3、2」

なおも触手は二人を襲う。
このままではあと一秒間に合わない。

「1・・・・・発射！」

「ディバインシュート！！」

「スパークスマッシャー！！」

二人の放った砲撃が触手もろとも渦を覆い尽くす。
覆い尽くしてのちまた霧散するが今度は固まらず跡形もなく消えてしまった。

「一件落着、だね」

「うん、やったね」

大喜びするなのはと公太。いや大喜びという表現が正しいのはなのはだけだが。

「今一瞬・・・・・・」

フェイトは何かに驚いている。

なのはは気づかなかったみたいだけどフェイトははっきり見た。
おそらくこの場にユーノがいたら、同じように感じていただろう。

「とりあえずフェイト」

「!?」

アルフがすかさず僕たちの間に割って入る。

「大丈夫。ただちょっと話し合いをしないか?」

「なにいってん・・・・・・」

「うん。分かった」

「お、話が速くて助かる」

「フェイト・・・・・・」

ジュエルシードは封印してとりあえずフェイトが保管することなった。
なのはがそれでいいって。
ユーノがいたらまたうるさくなりそうだけど、アルフを落ち着かせるためにはこれが一番いい方法だ。

アリサたちをノエルさんに任せて学校を出る。
そしていつもの公園に寄る。

まず最初に話すことはジュエルシードについてでいいだろう。
なのはも落ち着かないだろうしね。

それにフェイトも僕に何か言いたいことがあるみたいだし。

「さて、ジュエルシードのことっていってもまずは何から話す？」

……………………………………………・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・

～あとがき～
まずはごめんなさい。
勝手にお弁当制度にしました。
屋上で食べたかったんです。
６人だけでのお話がしたかったので・・・・・
とりあえずこの先も今回のメンバーで屋上で昼食をとります。
それと先生と生徒にオリキャラと出しました。
けっこう重要キャラになる・・・・・と思う。
今回出た右目の能力については次回本文で話します。

第七話　フェイトとの距離

公園の木の机つきの向かい椅子に座っている。
屋根つきだ。

「さて、ジュエルシードのことっていってもまずは何から話す？」

最初の僕のセリフから沈黙が続いている。

なのははは何から話したらいいのか迷っている。
フェイトのほうは話し出すきっかけを探しているといった感じだ。
アルフは僕をずっと睨んで離さない。
「あ、まだ自己紹介してなかったね。私高町なのは」

沈黙を最初に破ったのはなのはだった。
なのははこうゆうの苦手だもんなあ。

「僕は神代公太。よろしく」

あ、ちなみにユーノはここにはいない。
フェイトたちの前に出すとまためんどくさくなりそうだから念話で来ないように念を押しといた。

「あなたたちのお名前は？」

すでに名前は知っているはずなのに、あくまで自分で名乗らせたいようだ。
なのははこうゆうとこ強情だからね。

「フェイト・・・テスタロッサ」

「・・・アルフ」

なのはを見て、名乗らないと先に進めないと思って諦めたのか、渋々ながらに名乗る。
アルフも主が名乗ったなら使い魔である自分も名乗らなくてはならない。

「じゃあまずフェイトの疑問から聞こうか？こっちは名前を聞いたから」

フェイトは下を見て沈黙していたが、やがて意を決して口を開く。

「じゃあ・・・・・・」

「あ、僕のことに関してはだめだよ。ジュエルシードのことだけね」

「っ！」

ちょっと意地悪だったかな。でも僕の話から入るとまた長くなりそうだからそれは後回し。

「じゃああなたたちにとってジュエルシードは何？」

「その話はなのはだな」

そう言って公太はちらとなのはを見る。
フェイトにとってジュエルシード絡みの話っていったらこのぐらいのことしかないだろう。

僕は最初から予測していたからこそこうゆう形をとった。
まずはなのはのためにフェイトと話す場を設けてあげないと。

「えっとね、ジュエルシードはユーノ君のものなの・・・・・・・・・」

なのはは今まであったことを一通り話す。

「そう。でも私にも集めなければならない理由がある」

まあフェイトの答えも決まってるよね。
でもなのはも簡単には引かない。

「じゃあフェイトちゃんの理由も教えて」

「・・・・・・・・・」

「フェイト、こんなやつらに言う必要はないよ」

アルフはそう言うが、フェイトは人に聞いといて自分だけは言わないなんて卑怯なことはしたくはなかった。
でも簡単に言える内容でもない。そもそも・・・・・・

「なんて言ったらいいかわからないって顔だね」

「!?」

「まあまだ言わなくていいよ。じゃあ僕の話を少ししようか」

実は公太は最初から自分のことを話すつもりでいた。

まずはフェイトの警戒を解かなければならない。
それに僕の未来視通りなら言ってもさして問題はない。
ユーノをここに来させなかったのはこの理由でもある。

「なんでほとんど初対面の私たちにそんなことを？」

「ん？僕は未来が見えるからね」

「どういうこと？」

「そうだね。まずはそこから話そうか」

自分の過去から遡ってフェイトに話した。
過去についてはなのはに話したのと同じ内容だ。だから深くは話していない。
深く話さなかったのはフェイトたちを信用していないわけではなく、小学三年生に話すには少しキツイものがあるからだ。

そして未来視の話。
これはフェイトに誤解を与えないように注意しながら話す。
未来視で見たからなのはと僕がフェイトに近づいたと思われないように。
事実そうではないからね。
未来視はあくまで安心材料。
もしよくない未来を見ていたとしてもなのははそれを覆そうと努力していただろう。
結果はともかく過程は変わらない。

「ということだけど何か聞きたいことはある？」

「そんなの信じらるわけないだろう。魔導師でもないのに魔導師以上の能力を持っているなんて」

アルフが怒鳴る。
フェイトが警戒を解けばアルフも自然に警戒を解くだろうと思っていたけどそれ以前の問題だったかな。

「待ってアルフ」

まだ口を開こうとしていたアルフをフェイトがいさめる。
フェイトは最初から聞きたかったことがあったみたいだからね。
まあその内容も僕は分かっているけど。

「あの時・・・・・ジュエルシードを攻撃する一秒前にあの触手が止まったように見えた。あれもその眼の能力？」

「うん。そうだよ」

公太は右目の眼帯を外す。そこから白い目がのぞくが、やがて時計の針のようなものが出現する。

「この眼はあらゆる時間を止める。といっても自由には止められないけどね。いくつかの条件とリスクがある」

「すごい・・・・・・でも・・・」

「そうだな。僕の話をしたからといってジュエルシードを諦める理由にはならないだろうね」

今日の話し合いはこの辺で終わりだな。いきなりすべてを解決する

ことはできないだろう。

「じゃあ今日はこの辺で・・・・・・」

「あら、なのはと公太じゃない？」

「お母さん」

母さんが買い物袋を片手にこっちに向かって歩いてくる。
なんかにやにやしているような気がするのは僕の気のせいか？

「その子たちは二人のお友達？なんだか顔色が悪いわね」

「えっと、私はそろそろ・・・」

「あなたお昼は食べた？」

「いえ、まだです」

「そう。ならお昼を食べにいらっしゃい」

「え、でも・・・・・・」

「あなた普段きちんと食事をとってる？」

「・・・・・・」

捕まったな。でもフェイトの顔色には僕も気になってたんだよね。
パッと見た感じアルフのほうは問題はないように見える。
だからたぶんフェイトが自分の意志であまり食べてないんだろう。

おそらく母さんもなんとなくその辺には気づいているはずだ。

「フェイト、母さんは一度言ったらきかないよ。なんてったってなのはの母親だからね」

フェイトはおそるおそる母さんの顔を見るが、一切表情を崩さない母さんを見て、

「いただきます」

と諦めた。

その瞬間、何気にアルフが喜んだように見えたのはたぶん気のせいじゃないだろう。

その後、みんなで『翠屋』でお昼を食べた。

その間特に会話らしい会話はなかったけどアルフの警戒が解けたみたいで少し前進だ。

フェイトは案の定アルフと違って（アルフは肉を何度もおかわりしてた）そんなに食べなかったが『翠屋』のチーズケーキが気に入ったらしく、お持ち帰りもしたほどだ。

ちなみに母さんが無理やり何回か店に寄るように約束させた。

……………………………………………………………

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

公太たちと昼食をともにしてから一週間がたった。

フェイトはお気に入りの『翠屋』のチーズケーキを持ってとある場所に転移する。

「母さん」

ここは時の庭園と呼ばれる場所。
フェイトの母、プレシア・テスタロッサの住む居城。

「何しに来たのフェイト」

「・・・・・・・・・」

一応プレシアとフェイトは親子関係にあるが、

「私は何しに来たのか聞いてるのよ」

「えっと、ジュエルシードを二つとおみやげ・・・・・・」

プレシアの顔がさらに険しくなる。
フェイトは下を向いているためその表情に気づかない。

「まだ五つよ。あなたが今まで持ってきたジュエルシードと合わせてたったの五つ。おみやげなんか持ってくる余裕があるなら少しでもジュエルシードを集めなさい」

「ごめんなさい、母さん」

「さっさと私の前から消えなさい」

これが親子の関係なのかと疑ってしまうほどの態度。
それでもフェイトはプレシアに認めてもらうために懸命にジュエルシードを集める。
それだけでなく手土産を持ってくるほどの気配りもある。

ここに公太がいたら、なのはがいたらなんと言うだろう。
自分でも少しおかしいと思うこの関係にあの二人ならと考えてしまう。

「お土産ここに置いとくね」

自分のお気に入りのチーズケーキを近くの机に置いて転移する。
フェイトは転移しながら考える。
私はまたあの人たちと争わなければいけないんだろうなと。
なのはと言った子も着実に強くなっているし、あの少年は規格はずれの強さだ。
それでも私は戦わなければいけない。
時の庭園から転移する間際にプレシアの険しい顔を見た。
母さんはさっきからあんな表情をしてたんだね。

……

「アルフはいつ来てもよく食べるね。たまにはおなか痛くなったりしないの？」

何杯もおかわりをするアルフを見てついついそんな質問をしてしまう。
にしてもこの店、よくこんなに肉があるなあ。
ちなみに今は恒例の昼食タイム。
フェイト、というよりアルフがよく無理やり店に連れてくる。
フェイトも来るたびに表情は暗いが、心なしか最近少しずつ僕たちに心を許してきている気がする。

「好きなものを食べておなかが痛くなるわけないよ。それよりフェイトももう少し食べたほうがいいよ。あんなやつのことは忘れてさ」

あんなやつという言葉に少し気になりながらもフェイトにもう少し食べたほうがいいと勧める公太。

今日はなのはとユーノはいない。

まあユーノは僕が追い出したんだけど、なのはたちはアリサの家に遊びに行っている。

今日はフェイトと話がしたかったから。

ユーノが仲間外れにされかけていることに不満を言っていたけど追い出した。

邪魔だから。

というかフェイトが完全に警戒を解くまでは存在自体邪魔になりかねない。

もちろん本人には言ってないよ。

「フェイトは今日けっこう食べたほうなんじゃない？腹休めも兼ねて少し歩かない？」

アルフはまだ肉を食べたがっていたからそのままにして僕はフェイトと二人でいつもの公園まで歩いていった。

「なのはが心配してたよ。フェイトちゃんはどんどん寂しそうな眼になっている気がするって」

フェイトはまた下を向いている。

「君はいつも下を向いているね。下ばかり向いていると重要なことを見落とすよ」

その言葉にハッと顔を上げる。
何か思うところがあるのか、しかし顔は上げても心は俯いたままだ。

「あなたたちといるといつも温かい。でも私はそんな状況を喜んではいられない」

「フェイトって家族いる？」

フェイトの言葉を遮るように質問する。
その質問に一瞬フェイトが怯むのを公太は見逃さない。

「・・・母さんがいる・・・・・・」

絞り出すような声。
いろんな感情が入り混じった顔をしている。

「僕はまた夢を見たよ」

「・・・・・・・・・・・・」

「内容聞かないの？」

「私はあなたが怖い。私が何も言わなくてもあなたはすべてを知っているような気がする」

「夢は自然に見るものだよ。僕だって好きでみているわけじゃない。でもこの夢で誰かを救えるんだったら僕はとことんこれを利用する」

「内容は？」

「興味を持ってくれてうれしいんだけど、今回はお告げじゃないんだ」

そう。今回は夢なのになぜかお告げじゃなくて映像だった。
僕となのはが雷からフェイトを守っている映像。
それを聞いたフェイトは

「やっぱりそうなるのかな」

と呟くだけだった。
間違いなくアルフが言った「アイツ」、フェイトの迷いはフェイトの母親が関係しているのだろう。
こうなるとまず先にフェイトの母親から何とかしたほうがいいか。
だけどどんな関係であれ、親子だ。
そう簡単に親子の関係が切れるわけがない。
僕には本当の母さんのことは知らないけど、桃子さん・・・母さんがいるから分かる。

「さ、そろそろ戻ろうか」

どうも僕が話すと暗くしかならない。
まあそうゆう話しかしてないからだと思うけど。
でもやっぱりなのはと打ち解けるのが一番の近道なのかもしれないな。

フェイトとの公園からの帰り道、当然会話などないから僕は一人考える。
あの夢には続きがある。
なぜか最後に一言お告げがあった。

「眼の使い過ぎに気をつけろ」と。
いつものお告げと違って忠告だった。

自分の眼のリスクのことはきちんと理解している。
だから普段はあまり頼らないようにして、最近でも使ったのはなのはとユーノとの模擬戦とジュエルシードの時に一回使っただけだ。
でも夢で見た映像で僕は眼帯を外していた。
もしかして今回の夢は映像も含めて僕に対しての忠告だったのではないだろうか。
もしそうだとしたらフェイトの問題は一筋縄ではいかないかもしれないな。

……

「なのは」

「うん分かってる」

今は夕食を食べた後の勉強時間。
このあとに訓練があるから、早いうちに学校の宿題も兼ねての勉強だ。
なのはは理系には強いんだけど文系がね……
まあそれ以上に体育がひどいんだけどね。
と、そんなことよりジュエルシードが発動した。
ジュエルシードの数も半分を切った。

ジュエルシードだけが今なのはとフェイトをつないでいる。
昼食によくくるけど、それもジュエルシードの件が済んだら来なくなるだろう。

「なのは、早く！」

「あ、ユーノは今回も来ないで」

今回もユーノは仲間外れだ。

「フェイトちゃん！」

いつものように僕たちが現場に到着した時にはフェイトが先に来て戦っている。
今回の敵は巨大蜘蛛。
てかジュエルシードが宿るものってみんなでかくなるな。
まあ小さくて強い虫ってのも困るけど・・・
にしても今蜘蛛をドアップで見てるけど・・・・・・グロいな。

「どっせーい！」

アルフがおもいっきりパンチをかます。
・・・よく触れるね。

「フェイトこれぶっ飛ばせる？」

なぜか尻尾を左右に激しく揺らしている。
ああ、犬だからか。

「やってみる。アークセイバー！」

デバイスから魔力が三日月型に圧縮されて蜘蛛に向かって発射される。
それは弧を描いて蜘蛛の足を切り落とした。

「私の出番なし？」

残念ながらそうはならないみたいだよ。

切り落とされた足がロケットのように飛び回り始めた。
一本ずつそれぞれフェイト、アルフ、なのは、僕と向かってくる。
ちなみにフェイトが切り落とした足は４本。
もちろん縦一列に切り落とされているから蜘蛛の恰好はものすごく悪い。

フェイトとなのはは魔力球で対応するが意外に硬いようで撃墜できていない。
アルフは・・・・・噛んでる・・・！
僕は軽く片手で叩き落とす。

「二人とも、それぐらい大技を使わないで小技をうまく使って対処して。前に教えたはずだよ」

なのはがディバインバスターを発射しようとしているのを見て助言、というより課題を出す。

「そうだった。フェイトちゃん見てて」

なのはが魔力球を６個ほど展開させる。
向かってくる足に向かって四方八方から囲むように魔力球を叩き込

む。
魔力球は互いにぶつかり合って小さな爆発（といってもなのはたちからしたらそれなりに大きい）を起こして足を木端微塵にした。
フェイトもなのはにならって同じように魔力球をぶつけて迎撃する。
アルフは・・・・・食べた・・・！

「じゃあ今度は本体を工夫して倒してみて」

「どうするフェイトちゃん？」

「今やったのをもっと大がかりにしてみたらどうかな？」

「そうだよね。二人でやればきっとできるよね」

赤と黄の色をした二種類の魔力球がものすごい勢いで蜘蛛を囲うようにして展開されていく。
蜘蛛が危機を感じてか口から糸を吐き出して魔力球を壊していくが、二人は間隔をほとんどあけずに魔力球を再度生成している。
蜘蛛が壊すスピードより速くに魔力球を展開している二人。
二人の魔力量からして大量の魔力球を生成すること自体はさして問題はないだろうけど、速さも重視しているため実際かなりの負担がかかっているだろう。
汗を大量に流している二人を見るとその様子がよくわかる。
中途半端な量で倒せる相手じゃない。そして何回も試せるほど楽なことでもない。だからこの一回にすべてをかけて、万全の状態で敵を倒さなければならない。

「できた。これなら・・・」

「うん。いける」

赤と黄の魔力球が月の光に照らされてきれいに輝いている。
ものすごい量だ。これなら確実に倒せるが・・・・・・

「くっ・・・・・・」

やはりか。なのはは最近僕との修行で多少こういうことには慣れてきたけど・・・・・・

「フェイトちゃん！」

フェイトはそうもいかなかったようだ。黄色の魔力球がどんどん消滅していく。
なのは一人の量では微妙なところだ。
これで失敗したら確実になのはたちだけでは倒せないことになる。

ギュッ

「フェイトちゃん・・・」

「あっ・・・」

なのはがフェイトの手をそっと握る。
なのはがその手をつたってフェイトに魔力を送り込む。

なのは・・・そこまで強くなっていたのか・・・・・・いや、僕との修行なんてまだたいして成果が出るほどやっていない。
これはなのはがフェイトを思う気持ち、やり遂げなきゃという強い気持ちがここまでのことを可能にしているんだ。

自分の魔力球の生成、速度、そしてその維持に加えてフェイトへの魔力供給・・・生半可なことではない。

「フェイトちゃん、頑張って」

私の手を握っている手・・・・・温かい。
そしてその手から体の中に温かいものが流れ込んでくる。
私だけ倒れるわけにはいかない。

「大丈夫」

黄色の魔力球がものすごい勢いで生成されていく。

「いっせいのせにいくよ」

「うん」

「「いっせいの・・・・・せー！」」

囲んでいた魔力球が一気に巨大蜘蛛を襲った。
ものすごい爆発。
僕はその爆風でなのはたちが飛ばされているところを急いで抱きとめる。
ちなみにアルフは結界の維持（爆発が強いため）で忙しいみたいだ。
飛ばされてるけど。

ていうか小技で工夫しろって言ったけど、ここまできたら大技とたいして変わらないんじゃ・・・
そもそも工夫してないし。
質より量でごまかしてるな。

「あ、あの・・・」

フェイトが顔を赤くしてもじもじしている。

ん?ああ抱きとめたままだった。

「ごめんごめん」

フェイトとなのはをおろす。

二人の顔が赤い。やはり負担が強かったのか。

「フェ、フェイトちゃん」

「は、はい」

「なんとか倒せてよかったね」

「さっきは・・・その・・・・・・」

「なのは」

「え?」

「私高町なのは」

二度目の自己紹介。

フェイトは今までなのはの名前を呼んだことがない。

何回か呼ぼうとしていたことはあったけど、結局一回も言えてない。

「なの・・・は」

「うん。フェイトちゃん」

「さっきはありがとう、なのは」

「お友達を助けるのは当然だよ」

「とも・・・だち・・・」

これでまた一歩前進だな。
アルフもなんか喜んでるし・・・・・・ぼろぼろだけど。

「フェイト、なんで大技を使わなかったの？」

「え・・・・・・」

「僕はなのはにしか言ってないよ。そもそもフェイトは僕と修行なんかしたことないでしょ？」

まあ実際なのはに向かって言ったけど、無意識にフェイトはそれに乗ってくるという思惑はあった。
見事、自然になのはと共闘することができた。
たぶん今までも心の中でなのはとうまくやっていくことを望んでいたんじゃないかな。

「意地悪はこの辺にして・・・・・・悪くなかったでしょ？こういうのも」

顔が少し赤くなっているのを見られたくないためか、また下を向い

ていたフェイトはこの言葉に驚いた表情をする。

「・・・・・うん。悪くなかった」

無意識にやっていたことだけど、フェイトは思い返すと悪いものではなかったと感じていた。
なのはから送られた魔力のせいか、まだ体が温かい。

「フェイトもなのはといっしょに修行する？」

「・・・・・・・・・」

フェイトが困った顔をする。
フェイトが即答できないのも無理はない。
こんなので即答できたら今までのフェイトの迷いはなんだったんだということになる。

「強くなったら、それだけジュエルシードを集めるのも効率よくなると思うよ」

これでフェイトの答えは決まっただろう。
もちろん修行をして効率がよくなるわけがない。
今のフェイトの実力ならジュエルシードの暴走を抑えることも難しいことではないし、修行をしていたら探す時間が無くなる。
こんなことフェイトなら考えなくても気づくことだけど、もともとフェイトは修行をしたいと思っているのは間違いない。
なんたって目の前でなのはの成長を見たんだから。
同い年の子に自分より力が上だってことを間近で見たら自分もこのままではいけないと思うだろう。
ただ、自分の使命と自分の意志と、どちらを取るか迷っていただけ

のこと。
だったら意志のほうに使命を無理やりこじつけてやればいい。

公太はそんなふうに考えていたが、実はフェイトが思っていたこととは少し違っていた。
なのはといっしょに戦いたい。
ジュエルシードを奪い合う敵としてではなく、友達として。
それに・・・神代公太。この人のことも気になる。

そんなこんなで毎日の修行にフェイトが加わることになった。

・・・・・ユーノはいつ紹介しようかな。もう表に出してもいいと思うけど・・・・・めんどくさいからまだいいや。

…………………………………………・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・

～あとがき～
次回はあの魔女がお怒りになられます・・・・・・たぶん。

第八話　管理局登場

「艦長。小規模な次元震の反応が第９７管理外世界から出ました」

「あら、原因は？」

「詳しくは分かりませんがロストロギアが関係しているようです。しかし、気になることが・・・・・・」

「気になること？」

「近くにかなり高ランクの魔導師の存在が確認されています」

「ということはその魔導師がロストロギアを回収してるってことね」

「おそらくそうだと思います」

「そう・・・では第９７管理外世界に向かいます。エイミイはその間にその魔導師のことを詳しく調べてちょうだい」

「了解」

一つの組織が動き出す。

このことはまだ公太は知らない。未来も告げられていない。

公太が未来を見ていないということは、これは必然。

公太の未来視は人生の分岐点（ターニングポイント）しか見られない。

この時観測された次元震はロストロギア・・・ジュエルシード単体のものではなかった。

この反応がしたときに公太たちがいた場所は学校の屋上。
ジュエルシードともう一つ、大きな力が働いて大気の渦と戦闘していた時だった。

～第八話～

「あいかわらず神代君のお弁当はおいしいよね」

なんとなく久しぶりな気がする学校。
そして今は屋上で恒例の昼食タイム。
なのは、アリサ、すずかに加えて宮井さんと小鳥遊さんもいる。
いつも宮井さんが僕となのはの弁当にたかりに来る。
アリサもいちいち言うのを諦めたみたいだ。

そうしているうちに小鳥遊さんとなのははお互いを名前で呼び合う仲になった。
宮井さんは人によって違うみたい。
なのはのことは高町さんって呼ぶけど、小鳥遊さんのことはミリアって呼んでいる。
どうでもいいことだけど、高町と小鳥遊って音が似てるな。

「そういえばこの間、神代君となのはちゃんが公園にいるところを見たよ」

・・・・・え？
公園というとだいたい魔法の修行をしている時だ。
まさか見られた・・・

「外国人の女の子と一緒だったよね？」

「なにー！神代君、高町さんだけでは飽きたらず、外国人の女の子にまで」

宮井さんは何が言いたいんだ？いやそれより

「えっと・・・僕たち何してた？」

「えっと・・・その・・・・・・抱き合ってました」

「「「・・・・・・・・・・・・・えー！」」」

「にゃあ。そんなことしてないよ」

・・・・・ああ、あのときか

『なのは』

「え、何？」

「どうしたの高町さん」

おいおい、念話での呼びかけに口で応えるなよ。うろたえすぎ。

「な、なんでもない」

『あはは、何？』

『たぶんそれは気を送り込んだ時だと思う』

『あ……』

なのはの顔がかあっと赤くなる。

あのときは人間の体にはみんな気が流れているということについて話していた。

なのはとフェイトが魔力運用の効率化をしていた時、あまり忍耐力のないアルフが放った言葉がことの発端だった。

「あーんもう！いつもいつもこんなことして退屈だよ。もっと簡単に短時間でできないものなの？」

いつか言ってくるとは思ってたけど、ここまで忍耐力がないとは。

フェイトの使い魔なのにどうして。

「ないことはないけど、この方法は無理だよ。非効率的だ」

「なんで無理なのさ」

「・・・・・ちょっと二人ともこっちに来て」

こっちにきたなのはとフェイトの手を握る。

「あ・・・」

フェイトの顔が少し赤くなる。
なのははなぜか握り返してくる。

「あ、体が・・・」

「温かい？」

「うん」

僕は僕の気を二人の体に流した。
僕の気によってもともと二人の中に存在した気の流れを活発にさせた。

「それが気だ。一般の人は自分の体の中に気が流れているという自覚がない。
自覚がなければ気を扱うということも当然できない。
だけど気を扱える人が補助をしながらなら一般の人でも簡単な気を扱うことができるようになる」

「それで気の存在を自覚させてどうするのさ」

「じゃあ魔力を運用させて」

二人の魔力が増幅していくのを感じる。そこに、

パンッ

「「きゃっ」」

僕がそれと同等の量の気を魔力にぶつけて相殺した。

「これは最近気づいたことなんだけど魔力と気は違うようでほとんど性質が同じなんだ。いや性質が同じというよりは相性がいいといったほうがいいかな」

「相性がいいと何ができるの？」

「魔力と気は同じように扱える。要するに持ち前の魔力が倍になるということだ。しかも気をうまく扱えるようになれば魔力の補助としても使える。まさに万能だ」

「そりゃすごいじゃないのさ」

「それで肝心の気を扱えるようになるにはどのくらいかかるの？」

お、フェイトは理解したみたいだね。

「三年かな。しかもそれは一日中修行をしている場合ね。だから一般生活の合間にするなら十年以上はかかるかな」

「がっくし・・・」

「でも公太君がサポートしてくれれば気の扱いの体験ができるんだよね？私一回使ってみたい」

「わ、私も」

「じゃあはい」

ぎゅっ

「え、あ、あの」

公太がいきなりフェイトに抱きついた。
この行動にアルフが暴れだす。

「いいから二人ともじっとして」

僕はフェイトに抱きつきながら気を僕たちの周囲を囲むように球体の形をイメージする。

その際、公太はフェイトの魔力を包み込むように気を混ぜ合わせる。
その結果、公太とフェイトの周囲に球体のバリアが展開された。

「このバリアは気と魔力を混ぜ合わせているからちょっとやそっとの攻撃では破壊されない。なのはのディバインバスターぐらいなら軽く防げるよ」

「すごい・・・」

１０秒ほど展開して魔力と気の融合を解く。

「次はなのはの番ね」

「にゃっ、私も？」

「いや、別に無理にとは言わないけど」

「や、やりたい！」

「じゃあこっちにきて」

顔を真っ赤にしたなのはが公太に寄り添っておそるおそる公太の腰に手を回す。

そして先ほどと同じようになのはの魔力に公太の気を融合させる。

「にゃ～あったかい」

まるでこたつに入った猫のように満足そうな顔をするなのは。

１０秒ほどして融合を解くと、なのははとたんに不服そうな顔をする。

ホントに猫みたいだ。

「ちなみに気と魔力が混ぜ合わせられるということは魔力同士も混ぜ合わせられるということだ。ただし気と違って魔力同士というのはあまり相性がよくない。お互いに信頼し合っていないとね」

二人がこの作業をできるようなればきっと。

……………………………………………

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・

ピンポーン

「ごめんください」

「はいはーい」

お昼の高町家にインターホンが鳴り響く。

「どちら様でしょうか」

桃子が扉を開けると、桃子さんと同じくらいの年齢（見た目）の女性と中学生くらいの男の子がいた。

「ここに高町なのはさんという方はいらっしゃいますか？」

「なのはは私の娘ですが・・・」

「紹介が遅れました。私は時空管理局に所属してますリンディ・ハラオウンと申します。この子は息子のクロノと言います」

「私はなのはの母の高町桃子です。それでなのはに何の用ですか？」

いきなりの訪問に戸惑っている桃子の質問にリンディが少し戸惑う。

桃子は魔法のことを知らない。

時空管理局の名前を出しても反応を示さなかった。

調べたところ娘さんは小学三年生。

両親に魔法に関して話していてもおかしくないと思っていたのだけど。

その時リンディはエイミイが気になることを言っていたのを思い出す。

ロストロギアの反応があった場所には二人の魔導師のほかに二人いるという報告があった。
一人は魔導師の使い魔と思わしき存在らしいのだけど、もう一人は完全に一般人だったという。
自分の両親以外で魔法について話している存在って・・・
私たちはロストロギアの反応場所から映像で二人の女の子の顔を知り、そのまま帰宅場所まで突き止めた。
そして使い魔らしき顔も映像で確認できたけどもう一人の少年だけが途中で姿を消した。

「どうしたの母さん」

家の中から少年が出てきた。
後ろで立ち聞きをしていたのだ

「あなたは・・・！？」

この子は映像にあった一般人の少年。
でも高町家に小学生の男の子がいるという報告は・・・・・・

「あら、公太のお知り合い？」

「・・・・・ああ、あなたたちですか。うん、この人たちは僕の知り合いだよ母さん」

「ならこんなところで立ち話もなんなので上がってください」

「いや、この人たちとは外で話すよ。僕ちょっと用事があるから行きがてらにね」

ついに来たか時空管理局。
しかし、いきなり提督と執務官が来るとは思わなかった。
執務官の方も実力があれば年齢問わずでなろうと思えばなんにでもなれるというのは知っていたけど、まさかこの年で執務官だとは・・・
その母親のリンディという人もかなり頭が切れるとみた。

ここで気を付けておかなければならないのはフェイトのことだ。
彼女はまだ法に触れるようなことをしてはいないけど、たぶん最終的にフェイトの母親のほうが法に引っかかることをしようとしている可能性がある。
一応いろいろとこの日のために考えてきたけど

「あなたがたがこの星に来たのはロストロギア・・・・・・ジュエルシードの件ですね？」

やはりこの子は侮れないとリンディとクロノは警戒する。
私たちが地球の外から来たことを分かっている。
それにそうとう頭が回る。
でもこの子は魔導師ではない。それに私たちの監視から完全に姿を消した。
ではなぜなのはさんと同じところに住んでいるのに姿をわざわざ隠蔽したのか・・・・・・
その辺も警戒しないと。

「ええそうです。ですが私たちがこの存在に気付いたのは小規模な次元震が観測されたからです」

「次元震？」

次元震というのを僕は体験したことはないけどどういうのかは知っている。
小規模とはいえ次元震となれば僕が気付かないはずはないんだけど、全く覚えにない。

「先日、あなたとなのはさんが通っている学校から観測されました」

あのときか！
そうか、ものすごいエネルギーの放出で次元震に気づかなかったんだ。いやあのエネルギーが次元震だったのかもしれない。

「それで、あなたがたの要件は？次元震の問題だけならわざわざ最初に僕たちに会いに来る必要はないでしょう」

「気になることがありましたので」

さて、この人たちが僕の思惑通りに考えてくれていればいいけど・・・

「まずは君のことだ。君は魔導師じゃないよね。なぜジュエルシードを？」

「僕は気配に敏感なんです。なのはが外にこっそり出て行ったんので後をつけたらジュエルシードに・・・・・って感じです」

「でも君には魔導師に関しての知識がある。それはどう説明するんだ？」

「・・・・・なぜ僕がそこまであなたがたに話さなければならないんです？ジュエルシードに関しては別ですが、僕自身のことに関

しては話すつもりはありません」

「なにを・・・！」

「いいのよクロノ。これは信用の問題よ。会ってばかりの私たちにほいほい話す内容ではないということね」

ますは一つ目の関門クリアだ。

僕自身のことは警戒してほしいけど、僕の能力について余計な警戒を抱いてもらっては困る。

「でもこれだけは聞かせてください。なぜ私たちの監視の目をくらましたのですか」

「先ほど僕は気配に敏感だと言いましたよね？機械からの監視でも見られていることに気づけます。監視されているとなったらふつう逃げようとするでしょう？」

これは嘘だ。

機械からの監視でも僕は気づくことはできるが、おそらくこの人たちは宇宙から観測していたに違いない。

さすがに宇宙までは無理。

この時、というよりずっと僕は姿を消して帰るようにしていた。

理由は僕に注意を向けるため。

僕に対して警戒心を抱かせて注意を向けることによって、フェイトに関心がいかないようにすることが目的だ。

「なるほど・・・・・・あなたのことについては分かりました。では・・・・・・」

とりあえず僕のことについてはなんとかなった。
このあとなのはのことの話になり、これはユーノがジュエルシードのことも含めて説明した。
そしてフェイトのことだが、これは桃子さんがフェイトの親は遠出をしているから預かっているということでとりあえずは納得してもらった。

ちなみに終始クロノが僕に注意を向けていたのが非常に分かりやすい。
まだまだ子供だなあ。

……

「お世話になります」

管理局の目を欺くためフェイトが高町家にやってきた。
しかも母さんたちが僕たちと同じ学校に通わせるとのこと。
もともと母さんたちは僕たちが何かをしていると分かっているから特に理由は聞かれなかった。
時々この人たちはすごいと思う。
もともと僕なんかをなんの疑問も抱かず受け入れたのだ。
とりあえずフェイトのことについては親がいないというふうに説明した。
学校まで行かせてくれるとは思っていなかったけど、フェイトが家にくるところまでは僕の考え通り。
管理局がやって来た今、ジュエルシードの探索に力を入れるのは難しい。

そうなるとフェイトと会う回数が減ってしまう。
もちろん修行も部屋で魔力の効率化をする以外中止。
いろんなことがとても窮屈になる。
なのはたちが管理局に協力するという手はあるがフェイトのことがあるからあまり会わせたくないし、なにより僕が闘うことができない。
ただのジュエルシードなら問題ないけど、前みたいなイレギュラーなことがあったら僕が出ざるをえなくなる。
とりあえずジュエルシードに関しては管理局に任せる。
その間に僕はフェイトの母親のほうをなんとかする。

「さてアルフ。さっそくで悪いけどフェイトの親の元へ僕を送ってくれないか？」

「それはフェイトのためかい？」

これはフェイトには内緒でやることだ。
とりあえずフェイトの親に会ってみないことにはどうしようもない。
そこでとりあえずフェイトの親に嫌悪感をむき出しているアルフに話を持ちかけたわけだ。

「そうだよ。時空管理局がきたから早急に手を打たないと最悪フェイトが捕まることになる」

「私にはあいつがジュエルシードを集めて何をしようとしているのかなんて分からないけど、あんたが言うならそうなるのかもしれないね・・・・・・・・分かった、連れていくよ」

「ありがとう。あ、一応管理局に特定されないように転移の回数を重ねてくれ」

「了解」

確実に監視されているから転移を重ねて逃れなければいけない。
でも転移していることは当然確認され、わざわざ監視を振り切るようにしているのだから怪しまれるのを覚悟しなければならない。
それでも、その危険を冒してでもこれはやらなければならないことだ。
それにしてもいつの間にかアルフは僕に気を許してくれてるな。
やはり母さんの手料理のおかげかな。

「着いたよ」

「転移って慣れないとけっこう酔うね。しかも十回もしたんだからなおさら」

ちなみに今回来たのは僕とアルフだけだ。
なのはとフェイトは自主練中。
ユーノは・・・・・・・・・知らない。

「失礼します」

ドカンッ

大きな扉を開けると雷が飛んできた。
ずいぶんな挨拶だ。

僕は何でもなかったかのように広間に入る。
その奥にまるで玉座のように椅子が一つあり、そこに女性が座っている。

「なぜ部外者を連れてきたの？」

これはアルフに向けて放った言葉。
アルフはそれに答えず、睨みつけている。

「すみません。僕が無理に言って連れてきてもらいました」

「あなたが最近フェイトの周りをうろちょろしている神代公太ね」

「自己紹介が省けて助かります。プレシア・テスタロッサさん。といっても僕はあなたのことは名前しか知らないんですけどね」

「それで、何の用でここへ来たの？」

「いえ、あなたがフェイトのことをどう思っているのか確かめにね」

「あの子は私の子よ。それ以外に何があるっていうの？」

「嘘・・・・・・ですね。あなたの言葉から娘という感情がうかがえない。別にあなたとフェイトが本当の親子でなくてもかまいません。ですが、フェイトはあなたのことを想っています」

「・・・・・・・・・・・・あなた・・・・・・どこまで知っているの？」

苛立ちを表した言葉。

フェイトとプレシアが親子じゃないということに確信はなかった。
でもこの態度から見て図星みたいだね。

僕はフェイトに母親のことを詳しく聞いていた。
ほとんどがフェイトの思い出話みたいなもの。
そしてフェイトの母親に対する態度はとても好意的だった。
アルフの話によると、普段痛めつけられていていい扱いを受けていないとのこと。
それとは別にフェイトの話を聞いていて僕は違和感を感じた。
そしてプレシアのフェイトに対する言葉を聞いて、それがほぼ確信に変わってさっきのことを言った。

「では取引をしませんか？」

「取引・・・・・・？」

「はい。フェイトにジュエルシードを集めるのをやめさせてください」

「ふざけないで。そんなことできないわ」

「管理局が動いていることぐらいあなたも気づいているでしょう？
これ以上続けるとフェイトがジュエルシードを集める前に捕まりますよ」

「・・・・・・・・・それで、あなたは何をするのかしら？」

「僕があなたたちについて知っていることを話すことと・・・・・・
あなたの病気を治すように尽力しましょう」

「!?」

これは僕が最初にプレシアを見たときすぐに気づいたことだ。

「フェイトから聞いていませんか?僕は人の気の流れを感じることができるんですよ。あなたの気は流れがひどすぎる。そんなに遠くないですよね?」

「いちいちむかつくわね。なんでも見透かして。でもあなたは魔導師ではないでしょう?私のこの病気は・・・・・・」

「リンカーコアの汚染」

これもすぐに気づいたことだ。

「本当にむかつくわ。なぜ魔導師でもないあなたがリンカーコアについて分かるのよ」

「僕はなのはとフェイトが魔法を使うところを何度も見ています。あなたがさっき魔法を使ったとき、二人に比べて明らかに魔力の流れの乱れがひどかった」

「不意打ちでやったことなのによく感じていたわね」

プレシアの苛立ちが増していくのが分かる。

もちろんこれもわざとだ。

相手にされないことがないように注意をこちらに向けるためにやったことだ。

「いいわ。でも確実に私の病気を治せるという保証はないでしょう

？だからこちらは条件をつけさせてもらうわ」

食いついてきた！

こんなに簡単に引き受けるとは思わなかった。

でもこれでまた一つ確証を得た。

「あなたのその右眼の秘密を教えてもらえないかしら」

そう来たか。

これは僕がこの右眼について隠したがっているというのを分かって言っているのか、それとも単なる好奇心からか・・・・・・

でもどちらにしろ答えは決まっている。

「いいでしょう。でもそれは・・・・・・」

「冗談よ」

なっ！？

「もし私の病気が治らなかったらジュエルシードをあなたが管理局から奪ってでも持ってきなさい」

あなたが・・・・・・ね。

「分かりました、約束しましょう」

こうして僕の思惑通りにことが進んだ。

ちなみに僕たちはお菓子を持ってきていた。

フェイトが、母さんは翠屋のチーズケーキが好きなんだよって言ってたから。

プレシアさんが素直においしいと言うわけないだろうから、フェイトがよく見ていたのだろう。

……

「昨日あなたたちはどこに行ってたのか聞いてもいいかしら？」

今リンディさんとクロノに昨日、プレシアさんのところに行ったことについて問い詰められている。
わざわざ提督さん自ら来ての詰問とは・・・・・よほど僕のことを警戒しているらしい。

「なぜそんなことをいちいちあなたがたに教えなければならないのですか？罪人でもあるまいし」

「でも君たちは転移を重ねて僕たちの監視を振り切ったじゃないか！」

「そもそもそこがおかしい。なぜ僕たちの監視を？そしてなぜ僕たちはわざわざそれに従わなければいけないのでしょうか？僕たちは念のため移動の際、転移を重ねただけです」

「くっ・・・・・しかし・・・」

「だいたいあなたがたが逃した責任を僕に押し付けないでほしい」

言いすぎなぐらいがちょうどいい。
こうでもしないといちいちめんどくさい。

こうすることによって相手の監視はもっと厳しくなるかもしれないけど、厳しくしようと思ったところで程度はしれている。

「そうですね。確かに神経質になりすぎていたわ。ごめんなさい」

「母さん！」

クロノと違って大人の対応だな。

「僕たちのことよりジュエルシードの件はどうなりましたか？」

「それこそ君たちには・・・・・・」

「まだ一つしか封印していないわ」

クロノのセリフを無視してリンディが告げる。

いい選択だね。

僕に無意味な喧嘩を売らない。

クロノも優秀なんだろうけどまだまだ子供だ。感情ですぐに冷静さを失う。

「なのはとフェイトとも相談したのですが、僕たちもジュエルシードの件を手伝わせてもらえないでしょうか？」

ああ、あとユーノもいた。

「理由は？」

「まずなのはとフェイトに実戦経験を持たせたいというのと、まあ二人の性格で一度やりかけたことを途中でやめたくないと言ってい

るので」

プレシアさんと会うまでは管理局との無意味な対面はフェイトのことがある手前やめておこうと思っていたけど、プレシアさんとの約束で万が一ということもあるためジュエルシードについて管理局と触れておく必要がある。
それに二人に経験を積ませたいというのは本当のことだ。

「あなたは？」

「残念ながら僕は戦闘には参加しませんよ。これは最初からそうしていたことなので。それ以前に僕は魔導師ではないので戦うなんてとても」

これも大げさに言ったけど半分は事実。
それ以前にこの人たちに僕の力を見せるつもりはない。
まあ、僕の気についてはリンディさんたちも知っているので肉弾戦ぐらいなら問題ないけど約束は本当にしていたことだ。

「あの二人に実戦経験を持たせてどうするつもりだ？」

「別に。ただ二人が強くなりたいと言っているので師匠として・・・ね」

「分かったわ。あの子たちは十分戦力になるので問題はないでしょう。もちろんあなたの力もね」

いろいろと含みのある言い方をする。
クロノが何か言いたげな顔をしているが、リンディがそれを言う暇

を与えないようにして話す。

「でも一般人が危険度の高いロストロギアを回収することに簡単に許可を出すことはできません。とりあえずあの子たちの師であるあなたがそれに見合う実力を見せてください」

やってくれるね。
この人は僕が普通に戦って十分魔導師に引けを取らないというのを感じ取っている。
確証はないだろうから試しているのかもしれない。

「・・・・・まあいいですよ。師匠と言っても魔力の循環とかに口出ししているぐらいですからジュエルシードを探すぐらいしかできませんけど」

あくまで戦えるということを含まない言い方をする。
この人相手にこちらの情報はできる限り与えないほうがいい。

「それでかまいません。ではさっそく今からでもいいですか？」

「いいですけど、ジュエルシードも残り数少ないし、海の中とかはさすがに無理ですからね」

この場で集中する。
ジュエルシードの気はよく覚えているからそれを頼りに探る。
風に乗っていないかどうかも感じ取り、この街全体を包み込むように細い気の糸を探す。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・見つけました」

「何!?」

クロノが驚いている。
リンディさんも声にこそ出さなかったが、表情を隠しきれないでいた。

「本当なの?」

「こんなことで嘘言ってどうするんですか。こっちです」

ジュエルシードと僕とを結んだ気の糸をたどって歩く。
発動前のジュエルシードは簡単に見つからないことのほうが多い。
人ごみの中にあったりしたら、いろんな気に紛れてしまって完全にジュエルシードの気が消えてしまうことがある。
今回は山の中にあったから問題なく見つけることができた。

「これですね。発動前でよかった」

「本当にあった」

まだ疑ってたのか。
見つけたのは?とあるジュエルシード。
でもおかしいな。こんな何もないところにあったんなら、もっと前に気づいてもいいはずなのに。

「これで次回からは二人を参加させてくださいね」

「ええ、約束は守るわ。後日連絡するので詳しい日程とかを決めといてください」

「了解しました」

ここまでは僕の計画通りにことが進んでいる。
あとはプレシアさんが最後までおとなしくしてくれてれば問題はない。

でもこのあと僕が全く予想しなかった出来事が起きた。

……

「ただいまー」

「た、ただいま」

玄関の扉をあけて元気な声で言うなのはと遠慮がちに言うフェイト。
フェイトはまだ完全に高町家に入り込んでいない。
それに男の人が苦手なのか、父さんと恭也さんの前では縮こまってしまう。
僕は平気らしいけど修行の時ぐらいしかあまり会話はしない。
でもなのはとは仲良くやっている。
ユーノは会話は一回もしていないけど、存在だけは許してもらっているようだ。
ちなみに今日僕は学校を休んだ。
リンディさんたちとなのはたちがいないときに話したかったからだ。
今日はフェイトにとって初めての学校だったからいろいろとフォローしたかったんだけどね。

やがて二人が僕がいるリビングに入ってきた。

「おかえり、二人とも」

「た、ただいま。お、お、お兄ちゃん」

「ただいま。お兄・・・ちゃん（声が小さい）」

ん？

聞き間違いかな？

僕は耳にもけっこう自信はあったんだけど。

「今は恭也さんいないよ」

「あぅぅ・・・・・・」

『公太さん』

お、レイジングハートか。

『何？』

『マスターたちはあなたに言ったのですよ』

「・・・・・なんで？」

いや、うん。

たしかにお兄ちゃんと呼ばれて嫌な気はしないよ。

でもいきなりすぎる。こんなんだったら無理してでも学校行っとくんだった。

「あのね、今日宮井さんがね・・・・・・」

＜屋上＞

「この子が神代君と抱き合ってたっていうフェイトちゃんね。かわいいじゃない。神代君もすみにおけないわね」

「だ、抱き合ってた・・・・・・」

「いやあほんとかわいい子だわ」

「暁子ちゃん、それくらいにしてあげて」

フェイトが俯いてしまったのでミリアが助け船を出す。

なのはも同じことをしていたので赤くなって俯いてしまっている。

「で、結局二人は神代君のことどう思ってるの？ちょうど本人がいないんだから話しちゃえ」

「私はその・・・・・・頼りになる男の子・・・かな」

「私もそう。いろいろ助けてもらったから」

「（ふむふむ。恋愛感情は今はないと。二人とも精神年齢が高いのにこういうところは幼いねえ）」

いろいろと考え込んでいる宮井。

宮井は、自分は恋愛とか全然興味ないのに、人の恋愛ごとにとても

興味をもつ女の子である。

「それで、神代君はあなたたちのことどう思ってるの？」

「分からない。公太君大人だから」

「まあ確かに気持ち悪いほどに大人びてるわね」

公太は本当に中身が大人なのだが、宮井たちはそのことを知らない。でももともと、ここにいるメンバー全員が標準よりずっと大人びているため人のこと言えない。

「でも最近あまり相手してくれないの。前はよく遊んでくれたのに・・・・・。今日だってなんで学校をお休みしたのか教えてくれなかった」

公太が何かをするときは決まってなのはやフェイトのためというのは二人とも十分に理解している。
それでも無理をしているんじゃないかとか、何も知らされていないと悪い方向にしか考えられなくなってしまう。

「まるで旦那に愛想つかされた奥さんみたいね」

宮井がそんなことをつぶやくが、実際そんなことはないのは二人は分かっている。
それでも心配やら悲しみやらで、そうなのかもしれないと二人は思ってしまう。
フェイトにいたっては会話もほとんどしていないけど、それは何を話したらいいかわからないだけ。
最初に屋上で助けてもらった時から公太に気を許していて好意もす

くなからず抱いている。
ただ、二人とも不器用なのだ。

「だったらさあ、お兄ちゃんって呼んでみたら？」

「ぶー」

その言葉にお茶を飲んでいたアリサが噴き出す。

「な、なんでそうなるのよ！」

「だって一緒に家族同然に住んでて、しっかりしてて、お兄ちゃん的存在なんでしょ？だったら呼んでみなよ。そのほうが新鮮だし、神代君も兄として接してやらなきゃって思うようになるよ」

「お兄ちゃん・・・・・でもなんか恥ずかしいよ」

最初は呼ぼうと思っていたものだが、いざ改めて呼ぶとなるとなんだか気恥ずかしいのだろう。

「何言ってるの。神代君にかまって欲しいんでしょ？だったら恥ずかしさなんて全然苦にはならないわよ」

もっともらしいことを並べているが、本人はただ楽しんでいるだけだ。
二人がお兄ちゃんと呼んだら公太はなんて顔をするだろうかなどと、頭の中でそれしか考えていない。

「そうだね。私頑張ってみるよ」

「私も頑張る」

決心した顔をしたなのはとフェイト。
アリサはもうどうでもいいと、また噴き出さないようにと慎重にお茶を飲んでいる。
すずかとミリアは、明日が楽しみだなと内心楽しんでいた。

「ということがあったの」

「・・・・・・」

宮井さんは絶対に楽しんで言ったな。
あの人はろくなことを言わないのは短い間でよく理解している。
でも、かまってほしいか・・・・・・
芯はしっかりしている二人も、やっぱり子供なんだな。

子供らしい一面を見せてもらえてうれしく思う反面、知らないうちにフェイトがなのはだけじゃなくて公太にも心許しているということに気づかなかったことに全然見ていなかったんだなと反省する公太。

「お兄ちゃんって呼んでいい？」

でもこれには最大の問題がある。

「僕はかまわないけど、恭也さんがなんて言うかなぁ」
超が付くほどのシスコンな恭也は、なのはが自分以外の人にお兄ちゃんと呼んでいたら発狂するんじゃないかなと苦笑する公太。
「それよりもみんなの前で普通に言えるかな？」
冗談交じりに告げると二人は赤くなって
「「が、頑張ります」」
と、かわいく気合を入れるのであった。

その後、みんなが帰ってきて夕食の時、なのはとフェイトがお兄ちゃんって呼んだら、予想通りに恭也は発狂した。
桃子と士郎も、フェイトまでそう言うとは思っていなかったのでとても驚いていた。
初めてフェイトと会ったときに感情を表に表さないことを心配していた二人だったが、夕食の時の笑顔を見て安心したのであった。

……………………・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・

～あとがき～
すいません。

お兄ちゃんと呼ばせたかったんです。
でも実はこれが二人の気持ちの変化に必要なことなので嫌がらず読んでください。

今回はいろいろと動きがありました。
とりあえずクロノはユーノと同じような扱いは決定と。
でもまだ出番はあるからユーノよりはマシかな。

第九話　運動会

「来週から運動会です。今日はみんながどの競技に出場するかを決めたいと思います」

委員長である内田さんが教壇に立って、黒板に種目を書きあげている。

今年は僕との修行で少しは運動能力が上がっているから、もともと運動が苦手なのはも楽しめるんじゃないかな？

それにフェイトにとっては転向早々のこういう行事はちょうどいいのかもしれない。

「お兄ちゃんは何に出るの？」

宮井さんの陰謀でお兄ちゃんと呼ぶことになったフェイトとなのはだけど、慣れてきたようで、学校の中でも普通に呼べるようになっていた。

しかし仲のいいアリサやすずかたち以外の人の前では、恥ずかしがってまだ言おうとしない。

「う～ん、目立たない種目がいいな」

たぶんどれに出ても一位になるだろうから、正直あまり気が進まない。

「だったら三人で三人四脚に出ない？」

後ろにいるなのはが身を乗り出して提案してくる。

「三人四脚か・・・・・・いいね。うん、やろうか」

三人四脚なら十分普通に楽しめる競技だな。
にしても二人三脚じゃなくて三人四脚とは、ずいぶんと都合のいい競技だ。

「やった。内田さーん。私、フェイトちゃんとお兄ちゃんと三人四脚に出ます」

元気よく立ち上がって、手を挙げて委員長に告げるなのは。

「あちゃー」

「・・・・・・・・・？」

言っちゃったよ。
人前で言うのをあんなに恥ずかしがってたのに。
もしかしたらずっと前から僕たちと三人四脚に出ることを考えていたのかもしれないな。

「あのー高町さん。お兄ちゃんって神代君のことですか？」

「～～～～～～～～っ！」

なのはは真っ赤になって縮こまってしまう。
なにせクラス中に大声で言っちゃったからね。

「フェイトも気をつけなよ」

「うん。気を付ける」

かの偉い人は言った。
人は「経験」によって成長するのだと。
そしてこの「経験」とは人の失敗や成功から学び取るという意味だ。

でもこれで二人がお兄ちゃんって言わなくならないかが心配だ。
いや別にお兄ちゃんって言わるのが気に入ったわけじゃないよ。
せっかく二人が変わったんだからって意味だからね。

ちなみにアリサとすずかは短距離走。
宮井さんと小鳥遊さんは二人三脚と障害物競走だ。
てか二人三脚もあるのかよ。

それとアリサ、すずか、宮井さん、フェイトと僕がクラス対抗リレーに出ることになった。
このチーム・・・・・・かなりずるくないか？

「高町さんのお兄ちゃんはぜひリレー頑張ってくださいね。なんたってアンカーなんだから」

「先生・・・・・・」

かわいそうに。
しばらくの間いじられるな。

「せっかく三人四脚に出るんだから一位にならないとね。ということで三人は特訓よ」

今は放課後。
宮井さんが妙なやる気を出して僕となのは、フェイトは練習に駆り出された。小鳥遊さんも連れてこられている。
ちなみにアリサとすずかは習い事があるようで今ここにはいない。

「人のことを言う前に宮井さんたちは大丈夫なの？」

「私たちは問題ないよ。試しに一回見せてあげる」

そう言って自分と小鳥遊さんの足にひもを結ぶ。
小鳥遊さんはまだ一言も話してないんだけど・・・・・・

「じゃあ行くよミリア」

「左足からいきますね」

左足とは小鳥遊さんの結んであるほうの足だ。

「「せーのっ」」

確かに見事だった。
まだ練習もしていないはずなのにこれだけ息が合っていれば一位は間違いないだろう。
宮井さんはともかく小鳥遊さんはそんなに運動神経がいいほうではないから、よほどお互いのことを理解し合っているからこそできるのだろう。

「いち、に、いち、に」

ゆさ、ゆさ

「いち、に、いち、に」

ゆさ、ゆさ

・・・・・えっと・・・すごいな、うん。

ゆさ、ゆさ

ほんとに小学三年生か？

「神代君、ちゃんと見てるかー」

いや、僕がいちいち子供の揺れに反応しているほうがおかしいな。
どうしたんだろ。なのはたちと長い間いっしょにいて僕の世界観が
変わってしまったのかな。

「はっ！お兄ちゃん見ちゃだめ」

フェイト勘がいいな。
なのはは・・・・・・・・・

「すごいな～」

羨ましがってるよ。
フェイトは羨ましく思わないのかな？

「じー」

あ、自分の胸と見比べてる。

「はあー」

あ、ため息ついてるよ。

「お兄ちゃんはやっぱり大人だから胸は大きいほうがいいよね？」

自分の胸に手を当てて答えは分かり切ってるって顔で聞いてくるなのは。

フェイトも何気にこっちをちらちら見ている。

「いや胸だけで女性の良さを確定するもんじゃないよ。それに僕は正直あまりそういうのに興味はないな。

胸にというより、人の好みとかそういう恋愛自体にね」

今まで僕は人の色恋沙汰を見たことがないし、したこともない。

そういう感情がどんなものか僕にはわからない。

「ぶー。いいもん。そのうちナイスバディになってお兄ちゃんにもそういう感情に気づかせてあげるんだから。ね、フェイトちゃん」

「う、うん」

そりゃ楽しみだ。

フェイトもそのナイスバディになるまで僕たちといっしょにいるってことになるな。

「はいはーい。そっちで勝手に世界作らないで練習練習」

いつの間にか走り終えた二人がこっちに向かって走ってくる。
まだ足は繋がったままだ。
掛け声すらなく普通に走ってくる。
すごいな。ここまではさすがに僕もできないかもしれない。

「じゃあなのは、フェイトやろうか」

「うん」

身長のバランスもあって僕が真ん中で右になのは、左にフェイトという配置だ。

「んしょ、んしょ」

二人が懸命に足のひもを結ぶ。

「君たち無防備すぎ」

「何が？」

しゃがんでいるから胸元が見える。
ナイスバディになる前に女性としてそういうところを気にするところから始めようか。

「できた」

「こっちもできた」

「じゃあ行くよ」

三人四脚の走り方は、なのはが最初に右足を出したら同時にフェイトの右足と僕の左足を前に出す。
その次に僕の右足となのはの左足を出して、フェイトが左足を出す。
これの繰り返しだ。
当然真ん中の人がとても大変な動きをするけど、僕にとっては当然大したことはない。
でもこれ普通の人はできるのかなあ。
なのはがやったらかわいらしいことになりそうだけど。

「いち、に・・・きゃあ」

やっぱりなのはか。
これは運動神経うんぬんというよりただどんくさいというだけなんじゃ・・・・・・

「うー」

「ほら捕まって」

僕は右手を出してなのはを引っ張ろうとするが、

「ありがとう・・・・・・きゃあ」

僕とつながっているほうの足で立とうとするなよ。
これはゴールまで着くことすら難しいな。

「高町さん大丈夫?」

「なんとか・・・・・・ミリアちゃん、なにかコツとか教えて～」

だからなのははコツとか依然の問題だって。

「う～ん、コツってほどでもないけど」

ミリアがなのはの耳に近づいてコソコソ話をする。

「重要なのはお互いを信頼すること。なのはちゃんの場合は隣の神代君のことを信じて、自分のすべてを預けるようにして走るの」

「自分のすべてを預ける・・・・・・頑張ってみる」

「じゃあもう一回やるよ。せーのっ」

「いち、に、いち、に」

「そうそうその調子」

おぼつかない足取りながらも懸命に前に進んでいく。

これならけっこういい勝負になるんじゃないか。

「じゃあ三人ともそのまま翠屋にＧｏ！荷物は私とミリアが運ぶから」

まじですか・・・

なのはとフェイトをちらっと見ると、なんだかやる気十分って顔をしている。

この子たちはそれがどういう意味か分かっていない。

「ほんとにいいんだね？」

「うん、うまく走れるように私頑張るよ」

「私も頑張る」

ああ・・・・・分かってないよ。

「いち、に、いち、に」

「い、いち、に、いち・・・・・・」

「あらあらかわいいわね」

「もう少しだから頑張って」

「う、うん」

「頑張ってー」

「は、恥ずかしい・・・・・・」

当然だよ。

商店街を三人四脚で走ってるんだから目立って当然だ。
道行くおばさんたちが僕たちを応援してくれている。
それがかえってなのはたちに羞恥心を与えてしまっている。
学校を出る前は走る気十分だったのに、今は下を向いてなんとか羞恥心をこらえるので精一杯って感じだ。
でもこんな状態でもちゃんと転ばずに走れているんだからすごいな。
小鳥遊さんがなんて言ったのか非常に気になる。
耳を澄ませていれば簡単に聞こえただろうけど、さすがにそういうことはしない。
でも気になるな。

「ほら二人ともちゃんと前を向いてないと危ないぞ」

顔を真っ赤にしながらも、なんとか前を向いて走るなのはとフェイト。
お、翠屋が見えてきた。

「いち、に、いち、に・・・・・・きゃあ」

「っと、到着。街中で転ばなくてよかったね」

僕は転びかけたなのはを抱きとめて、足のひもをさっさとほどいてあげる。

「あらおかえりなさい」

「三人ともおかえり」

店に入ると母さんと父さんが迎えてくれた。
店の中にはお客さんがちらほらと。

この時間は女子高生が多い。

「あ、神代君だ」

なんで女子高生の中に水城先生がいるんだ?
茶髪でスカートが短く、ルーズソックスをはいた今どきの女子高生と水城先生が楽しそうにおしゃべりしている。

「あ、あの子が例の神代君ですか?かっこいい~」

なんだ?
どうやらあの女子高生と水城先生は知り合いみたいだけど。

「ぶー」

「むっ」

なんかなのはとフェイトの機嫌が悪いようだけど・・・・・・疲れたのかな。

「ねえねえ、あなたが瑞希ちゃんの生徒の神代君だよね?」

「そうですけど・・・」

話が見えない。
それとなのはとフェイトは僕の服を引っ張らないでくれ。

「瑞希ちゃんが神代君は小学生なのに大人っぽくて不思議な子だって言ってたの。それとあなたたちが妹のなのはちゃんとフェイトちゃんね。かわいい~」

先生・・・・・あのお兄ちゃん事件も話したな。
にしても先生とこの人の関係ってなんだ？
まあ中身が子供っぽいから女子高生と普通に話してても違和感はないけど。

「あ、紹介が遅れちゃったね。私、前に瑞希ちゃんの生徒だったユウナでーす」

名前だけかよ。かといって苗字をわざわざ聞くのもはばかれるし・・・

「えっとユウナ・・・さん。初めまして、神代公太です」

「公太君って呼んでいい？公太君は来週の運動会で何の種目に出るの？もしかしてリレーのアンカーをやっちゃったりする？」

すごい勢いだ。これが女子高生パワーなのか？

「えっと、はい。それと三人四脚にも出ます」

「三人四脚ってなのはちゃんとフェイトちゃんと一緒に？すごい仲がいいんだね。二人はお兄ちゃんのどんなところが好きなの？」

「す、好きって・・・・・・」

「あれ、好きじゃないの？」

「いえ好きです！やさしいところとか、頼りになるところとか、とにかく全部！」

「なのはちゃんはお兄ちゃんっ子なんだね。かーわいい」

「〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜っ！」

一瞬にして顔を真っ赤にさせるなのは。

最近なのははこんな役ばかりの気がする。

「それより二人はこのあと用事があるんでしょ？早くしないと」

まあ用事っていっても僕との修行だからそんなに急がなくてもいいんだけど。

「そ、そうだった。ユウナさん私たちもう行きますね」

「あ〜ん。もうちょっと話したかったのに〜」

なおも僕たちを引き止めようとするユウナさんを振り切ってとっと退散しようとする。

「鞄持ってきたよー」

タイミング悪！！

…………………………………………………………………

「運動会を開催いたします！」

あっという間に運動会。
あれからもけっこう三人四脚の練習をした。
その甲斐あってか、なのはも転ばずに行けるようになった。

最初の種目は学年ごとの玉入れだ。
あいかわらずなのははどんくさい動きで玉を投げる前に拾うことすら満足にできなかった。

次は綱引き。
僕が参加すると不公平だから、手は触れていても引っ張ることはしなかった。
ここまでが全員参加の競技だ。

「次はミリアちゃんたちの二人三脚だね」

「はい」

『二人三脚に出場する選手はスタート地点に集合してください』

「じゃあ行ってくるね」

「頑張ってね」

「うん」

スタート地点に選手が集まる。
この学校の二人三脚は他と少し違っていて、二人でいくつかの障害を乗り越えて進んでいく競技なんだ。

ただでさえ動きにくいから大変だが、この競技に出る人たちはみんなベテランばかりだからそんなに時間がかからない。
ちなみに三人四脚には障害物はない。でも距離がそれなりにある。

『スタート！』

選手が一斉に走り始めた。
さすがベテランがそろっているだけあって普通の徒競走みたくスムーズに走り続ける。

第一の関門は二人で卵がのったスプーンを持って走ること。
落としたら卵を取りに関門まで戻る。
宮井さんたちはなんなくクリアー。

二つ目の関門は縄跳び。
お互いが片方ずつ持ってジャンプする。
いろいろとはずんでいます。
これがけっこう難しいはずなんだけど、宮井さんたちはこれも簡単にクリア。
ちなみに他の人はみんなここでペースが落ちる。

最後は普通にダッシュ。
この時点で宮井さんたちの優勝は間違いないってくらいに引き離している。

「ゴール！」

歓声の声を背に僕はある人たちの元へ向かう。

「あら公太さん」

「公太」

なぜかリンディさんとクロノが観客に混ざっている。
しかも母さんたちといつの間にか仲良くなってるし。
確かにこの間、大切な子どもたちを預かるんだから近いうちに挨拶に行きますとは言っていたけど・・・・・・
まあ二人ともフレンドリーな人たちだからしょうがない・・・・・・のか？

「こんにちわ。今日もなにか用事ですか？」

これは僕たちにって意味だ。
まあリンディさんはその辺考えてくれている人だからそんなことはないとは思うけど緊急の可能性もある。

「今日は公太さんたちの応援にきたのよ。ちょうどお休みもとれたから」

「お休みがとれたのなら自由に過ごしたらいいのに」

「お世話になってる子たちの晴れの舞台ぐらい応援に行かなきゃと思ったのよ」

公太はクロノをちらと見る。
クロノはいつものように公太を睨んでいるだけだった。
リンディは笑顔を崩さない。

「・・・・・・・・まあ期待しているものは見られないと思いますよ」

「あら公太、せっかく応援に来てもらっているのに失礼よ」

「いいのよ桃子さん。では私たちは連れがそろそろ来るので迎えに行ってきますね」

連れってエイミイさんのことかな？

「やっぱり公太さんには感づかれたみたいね」

「まあそんな簡単につかめたら苦労はしませんよ」

「あの人たちが例の？」

「はい」

「物腰が柔らかいがかなりできるな」

「クロノのほうはまだまだ子供ですけど一応優秀みたいですよ。リンディさんはあの歳でかなりの地位に立ってますからね。いろいろとやっかいな人です」

実は父さんと恭也さんにはけっこう話している。
というより魔法のこと以外は全部。
魔法のことは言っちゃってもよかったんだけど、なのはが自分で言いたいって。
大切な娘が危険なことをしているというのも知っている。
それでも信頼してくれているその期待に僕は応えなければない。

「まあ見た感じ悪い人たちではなさそうだ」

「だが組織というのは個人の人柄ではどうにもならないものだ。用心することにこしたことはないだろう。ま、公太は言わなくてもわかってるか。
それに公太はうまく誘導してるみたいだしな」

なのはたちに注意がいかないように、僕の力に注意を向けさせていることを言っているのだろう。
この人たちは察しがいいからいろいろと助かる。

「お兄ちゃーん」

「ほら、お兄ちゃんを呼んでるぞ」

「じゃあ行ってきます」

次は三人四脚だからスタート地点に向かう。
ちなみに恭也さんの視線がひどかったのにはもう慣れた。

『では三人四脚に出場する選手はスタート地点で足にひもを結んでください』

進行役の委員長がマイクで指示をする。
委員長は三年生なのにかなりの仕事を任されている。
僕の周りに普通の三年生はいないのか？（いや男子陣は普通だったな）
そんなことを考えていると横でなのはがそわそわしているが見えた。

「なのは、緊張するのは分かるけど落ち着いて。フェイトは落ち着いてるぞ・・・・・・って」

フェイトはじっと前を見ていたから落ち着いていると思っていたんだけど・・・・・・固まっている。

「ほら、二人とも力抜いて」

僕は二人の頭を撫でる。
二人ともなぜか頭を撫でられると落ち着くらしい。

「ん～」
「にゃあ～」

しばらくの間二人の頭を撫で続けた。
僕も二人の頭を撫でてると気分が落ち着く。

「落ち着いた？」

「うん」

「もう大丈夫」

「大丈夫みたいだね・・・・・・・・・・・・ん？」

ふと周りを見渡すとみんながこちらを見ていた。

『ん、んん・・・・・・・そろそろいいですか？』

「あ・・・・・・・・・・／／／」

「あらあらなのはったら」

せっかく落ち着いたのに顔を真っ赤にしてしまう二人。
母さんも笑うなよ。
それと恭也さんはそんなに睨まないで。

『えーそれでは始めます』

真っ赤になった二人をよそに淡々と進める委員長。

『位置について・・・・・・』

「いつもどうりにね」

僕の言葉にコクとうなずく二人。
どうやら声を出すこともできないほどの緊張らしい。

『よーい・・・・・・・・・ドンッ』

一斉に走り出す。

ペアは5組だから二十人が一斉に走り出したことになる。
いやあこの学校の校庭は広いなあ。

「いち、に、いち、に」

問題なくスタートがうまくいった。
二人には言わなかったけど陸上の競技においてスタートは重要だ。
これを言うともっと緊張してただろうからあえて言わなかったんだけど、どうやら正解だったみたいだね。
三人四脚は二人三脚と違って障害物はなく、トラックを一周するだけだ。
ただ距離がそれなりになるから結構つらい。
長い間走っていると自分の感覚がおかしくなっていく。
例えると目が見えない状態でまっすぐ歩いているつもりなのに、本当にまっすぐ歩けているのかと錯覚してしまうあれである。

「練習の時よりも長く感じる」

極度の緊張状態に陥っているからそれは仕方がない。
転ばないだけまだマシだ。

「いち、に、いち、に」

今は三番目。でも一番と二番との差はほとんどない。
逆に四番と五番との差もあまりない。
ゴールまであと少し。

「スパートかけるよ。大丈夫？」

コク

「大丈夫」

少しずつスピードを早める。

「いち、に、いち、に」

並んだ！

このままいければ・・・・・・

「いち、に・・・・・・きゃあ！」

フェイト！

「っと・・・・・・大丈夫？」

僕は転びそうになったフェイトを抱きとめる。

当然止まってしまったから順位はビリだ。

「お兄ちゃん・・・なのは・・・・・・」

「気にしない気にしない。ほら、最後まで走るよ」

「うん・・・・・・・・・」

『ゴール！』

最後まで走りぬいてはみたものの、フェイトの落ち込みようが半端ない。

「ごめんなさい！」

「気にしなくていいよ」

「そうだよフェイトちゃん。私お兄ちゃんとフェイトちゃんと一緒に走れて楽しかった。練習の時も本番もすごく楽しかった」

「なのは・・・・・・」

「そうだね。僕もフェイトと一生懸命になれて楽しかったよ。フェイトとは魔法の時しかあまり接することがなかったから」

「お兄ちゃん・・・・・・・・・ありがとう」

負けちゃったのは残念だけど、これまでしてきたことは無駄にはならない。
フェイトともかなり近づけたと思う。

『これにて運動会を終了いたします』

小学生の運動会にしてはかなり活気だっていた。
校庭が広いのと観客が多かったのもあってすごく盛り上がっていた。

ちなみにリレーは二位と一周の差をつけて余裕の勝利で終わった。

「公太」

「父さん、恭也さん」

なのはたちは母さんと一緒に先に家に帰ってもらって、父さんたちには話があると言って残ってもらった。

「それで俺たちに何の話だ？」

「はい、僕の体のことで相談が・・・・・・」

……………………………・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・

～あとがき～

今回は少し番外編みたいな感じにしました。

次回は公太の秘密編です。

恭也さんが活躍します。

第十話　ロスト

「おはようなのは、フェイト」

「おはようアリサちゃん、すずかちゃん」

「おはようアリサ、すずか」

「あれ、今日公太は一緒じゃないの？」

青空の下、なのはとフェイトの顔は沈んでいる。
もちろんアリサとすずかはその原因が公太にあることもすぐに理解していた。

「お兄ちゃんは風邪ひいちゃって・・・」

これは今朝の話。
いつものようになのはとフェイトが起きてリビングにきたとき、いつもならすでに起きているはずの公太がどこにもいなかった。

「公太なら風邪引いたから部屋で寝てるぞ」

「え、お兄ちゃん風邪引いちゃったの？」

「お兄ちゃんは大丈夫なの？」

「あ、ああ、たぶんな」

なのはは恭也に対してもお兄ちゃんと呼んでいる。
そのお兄ちゃんの向きが自分でないことに恭也は軽くショックを受けているみたいだ。

「はあ・・・・・・」

これは昨日の運動会が終わった後のこと。
士郎と恭也を呼び出したときのことだ。

「僕の体のことで相談が・・・・・・」

「あまりいい話じゃないみたいだな」

コクリとうなずく公太。

「僕の能力については前に簡単に説明しましたよね。このことはそれにも関係するんだけど・・・・・・」

「・・・・・・・・」

士郎は静かに耳を傾けて続きを促す。

「僕は月に3日間力をなくしてしまいます」

もうたいていのことでは驚かなくなった二人が冷静に質問をする。

「力を失くす?眼の能力のことか?」

「いやそれだけではないだろう。わざわざ私たちに相談するんだ」

眼の力を失くしても公太には気がある。

そもそも公太は眼の力をなるべく使わないようにしているほどだ。

「さすが父さん。この時に失くすのは僕の力すべてです」

「それは公太がよく使う気も完全に使えなくなるということか？」

「はい」

「だけど、気は人間の体全員に存在するものだろ？それもなくなるのか？」

「いえ、気自体はなくなりません。ただ気を自由にコントロールすることができなくなります」

「・・・・・なぜそうなるのか理由は分かっているのかい？」

「詳しくは分かりません。ただ研究所のやつらは、僕の能力は人の持てる力をはるかに超えているからそのリバウンドではないかと言っていました」

「なるほど。では相談というのはなのはたちのことか」

この人たちは察しがよすぎるから話が簡単で楽だ。

「そうです。僕はこのことを知られないために三日間風邪ということで部屋にこもります。その間なのはとフェイトの登下校などをお

願いしたいんです」

今問題なのは管理局とプレシアのことだけではない。
デパートで会った魔導師たちの心配もあるし、研究所のやつらのこともある。
二人はまだまだ未熟だ。
そのため僕の弱点でもある。

二人が強くなるまでは・・・・・・・・・・

「分かった。毎回ノエルに頼むのもあれだからな。私と恭也とで交代に警護しよう」

「にしても公太の体はほんと不思議だな」

恭也さんがつぶやくが、僕自身も全然分かっていないのが困る・・・・・

「はぁ・・・・・・・・・なのはたちのためとはいえ、なんで俺がこんなことを・・・・・・・」

なのはたちの後ろで気配を消しながら警護をしている恭也。

なんだかんだ言っても、なのはを見守っていることに満足している。

「だが、ひさしぶりにお兄ちゃんらしいことをしているな」

普通のお兄ちゃんは気配を消して警護したりはしません。

「にしてもあの神代君が風邪を引くなんて・・・・・・」

公太を除くいつものメンバーでお昼をしている。

「あのって・・・・・・暁子ちゃんはお兄ちゃんのことをどう思っているの？」

「いやあなんか殺しても死ななそうじゃない？」

公太が実はあんなに強いというのを知らないはずなのに、案外外れていないことを言う。

「お兄ちゃんだって死んじゃう時は死んじゃうよ・・・・・・・・・・・・たぶん」

「なのはそこは自信をもたなきゃ」

「でも公太ってなんでもできそうな感じじゃない？風邪程度でダウンするとは思えないってフェイトたちも思わない？」

アリサの指摘に否定できない。
実は二人は最初から少しおかしいとは感じていた。

朝も様子を見に行こうとしたら、お父さんとお兄ちゃんがなぜか行かせてくれない。
風邪がうつるからと言われても少し見に行くぐらいしてもいいと思うの。
昨日の夜もお兄ちゃんは修行を早めに切り上げて早く寝ちゃったし・・・・・
まるで今日風邪を引くのが分かってたみたい・・・・・・・・・

「う～ん・・・・・・・・・」

『フェイトちゃん』

『うん、なのは』

『今日は帰ったらお兄ちゃんもお父さんもまだいないだろうからお兄ちゃんの部屋に突撃するよ』

キーンコーンカーンコーン

「みんなごめん。今日急ぐから、じゃあね」

「私も先に帰るね」

猛ダッシュで走り去る二人。
その後ろで恭也が屋根をつたって追いかける。
ちなみに大学は友人に出席の代弁を頼んでいる。
最近の大学は機械でとることが主流だが、恭也の通う大学は声で確認する古い方法を使用しているのだ。

「ははあん。これは神代君絡みだね」

「まったくしょうがないわね」

宮井とアリサがいつものこととばかりにため息をつく。

「でも私は羨ましいな」

「何が羨ましいのミリアちゃん？」

「誰かのために一生懸命になれるのが羨ましいと思って・・・・・・
すずかちゃんにはそういう人いる？」

「私にはまだ・・・・・でもいつかできるといいなあ」

「やばいな。二人が強硬手段に出やがった・・・・・・・・・・
でも家に先回りして妨害しても余計怪しまれるしなあ・・・・・・・
・・」

2人が走っているとはいえなのはの足ではさして早くない。

考える時間はあるけどいい案がなかなか思い浮かばない。

「なら先に公太のほうを移動させるか」

力を失っているとはいえ、別に風邪を引いているわけではないので移動させるくらいは大丈夫だろうと恭也は踏んだ。

「ということで少し移動してほしいんだが」

一応布団の中に入っていた公太に窓から侵入した恭也がさっそく提案する。

「・・・・・・・・・・・・」

何か問題点でもあるのか、すぐに了承しない。

「どうした?早くしないとなのはたちが帰って来るぞ」

「いや、なのはたちが心配してくれてるのに騙しているのが申し訳

なく思ってきて・・・・・・」

「だけど隠しているのは、なのはに余計な心配させないためと無理をさせないためだろ？」

もし僕のロストのことを知ったら、もし僕にしか対処できない敵が出てきても無理をしてしまうだろう。

なによりもなのはたちに余計な心配をかけさせたくなかったというのが主な理由だ。

「僕はなのはのことを家族だと言った。もちろんフェイトもそうだ。こういうことは包み隠さず打ち明けることが本当の家族だと本に読んだことがある。

そもそも母さんにはほとんど話していない」

「それは巻き込みたくないからだろ。俺だってできる限り巻き込みたくはない」

家族のためと巻き込まないように黙っているのがいいのか、すべて打ち明けるほうがいいのか・・・・・・・・・・

「だがお前は俺と父さんにも話していないことがあるだろ？」

「それは・・・・・・・・・」

「別にそれを話せとは言わない。だが家族だからってなんでもかんでも話したほうがいいとは限らないだろ」

確かにそうだ。

なのはが自分で話したいというから僕からは魔法に関して話ず、機

会を待っている状態だ。
いずれ話すことにはなるだろう。それと同じでロストのこともいずれ話すだろう。
では今話すのと後で話すのとの違いはなんだ？
なのはたちが強くなってからということになるのだろうか・・・・・・

「おい、二人がすぐそこまで来てるぞ」

気配が分からないから気づかなかった。
運動が得意でないなのはが休まず走ってきたみたいで、ひどい疲れを感じているようだとと恭也さんが言う。
それでも高町家に向かって一生懸命走り続けている。

・・・・・・やがて2人が家の前に辿り着いたみたいだ。

「公太！」

「すみませんが恭也さんは少し席をはずしてくれませんか？」

「・・・・・・・・・分かった。お前が決めたことなら俺は何も言わんさ」

公太がこう言うことがなんとなく分かっていたのか、すんなりと受け入れる。

「ありがとうございます」

なのはと鉢合わせにならないように行きと同じく恭也さんは窓から外に出る。

今までの悩みがなんだったんだと言わんばかりの決断かもしれないが、やはり二人にはできるかぎり隠し事はしたくない。
そうでなくても他にもいろいろと話していないことは多いのだ。

「「お兄ちゃん！」」

汗を大量に流したなのはとフェイトが僕の部屋に飛び込んできた。

「おかえり。なのは、フェイト」

「お兄ちゃん風邪大丈夫？」

「なのは、大丈夫だからこれで汗を拭いて。君たちが風邪を引いちゃうよ」

そう言って僕は二人にタオルを渡す。

2人はそれを受け取って首回りと額の汗を拭く。

「僕は後ろを向いているから体もよく拭いといたほうがいいよ」

「「うん・・・・・・」」

後ろを向くと二人はおずおずと服の中にタオルを入れて拭いているのが気配でわかる。
見ていないとはいえ、男が近くにいるとやりずらいのだろう。

「拭いた？」

「終わったよ。タオルは後で洗濯機に入れておくね」

それを聞いて僕は前を向いて真剣に2人を見る。
なのはとフェイトも何かを感じ取ったのか、真剣な顔つきになる。
「心配してくれてたみたいだね」
「当然だよ」
「そうだよ」
「嘘をついてごめん。でもきちんと話すよ。僕の体のこと」
僕は父さんと恭也さんに話したことと同じことを二人に話した。
「それと二人にはもう一つ話したいことがある」
「それもお兄ちゃんの体のこと？」
「体というより・・・・・この眼のことだけど」
眼帯で覆っている右眼を指して言う。
「でもこのことは今回のジュエルシードの件が終わったらきちんと話すよ。今は二人がちゃんと強くなることに専念してほしいからね」
本当はジュエルシードの件ではなくプレシアさんの件が終わったらという意味なんだけど、これはまだフェイトには内緒だ。
「でもジュエルシードは管理局の人たちが・・・・・・・」

ジュエルシード探しの介入を許されているとはいえ完全に管理局の管理下に入っている。
最近ではジュエルシードの数が残りわずかだからとほとんど触れていない。
僕もなぜか気配を完全に捉えることができなくなっていた。

「大丈夫だよ。とにかく二人は強くなることだけを今は考えてくれ」

「・・・・・・うん私はお兄ちゃんを信じて修行を頑張るよ」

「私も頑張る。だから・・・・・・」

「「これからも修行をお願いします」」

「ああ」

「それと話してくれてありがとね。私たち、お兄ちゃんが力を失くしている間一生懸命守るからね」

「いや、だからそれは・・・・・・」

それを避けるために今まで黙っていたのだが・・・・・・

「分かってる。そのために私たち強くなるから」

・・・・・・ったく。

ピンポーン

「あ、誰かきたみたい。お父さんたちが帰って来るにはまだ早いよね」

恭也さんかな？

気配が感じ取れないから何とも言えない。

なのはが急いで玄関に向う。

「リンディさん！」

玄関まで行ったなのはが叫んでいる。

たった今管理局には内緒にしていると言ったばかりなんだから叫んでしまうのはしょうがないことだけど、あれでは何かありましたと言っているようなものだ。

僕は聞き耳をたてるために部屋の外にこっそり移動する。

だけどリンディさんとクロノも単純な気配はつかめるだろうから用心しないと。

「公太さんはいるかしら？」

「お兄ちゃんは今ちょっと・・・・・・」

「少し神代と話がしたいんだが今どこにいるか分かるか？」

「お、お兄ちゃんは今日風邪を引いちゃったから部屋で寝てます。たぶんけっこうひどいから三日ぐらい」

フェイト違う。「たぶんひどいから」じゃなくて「ひどいからたぶん」だ。

「・・・・・それはたいへんね。なら今日のところは失礼するわ。公太さんにはお大事にと伝えてください」

間があったのが気になるけどやけにあっさり引いたな。

「お兄ちゃんなんとかばれずにすんだよ」

「あ、ああちゃんと聞いてたよ。二人ともありがとう」

まあどうであれ結果的におっぱらえたのだからこの場は良しとしよう。

「じゃあ今日は修行お休みだから久しぶりに勉強でもしようか」

「え！？」

なのはが後ずさる。

フェイトはわりと勉強できるけどなのはは苦手だからな。

「力がなくなったからって頭まで弱くなったわけじゃないからね。
たまにはお兄ちゃんらしいことをしないと」

「い、いえお兄ちゃんは普段からちゃんとお兄ちゃんらしいことを
しています！」

「お世辞でもうれしいよ。でも勉強はきちんとやろうね」

「そ、そんな～」

「お兄ちゃんとお勉強・・・・・・」

そういえばフェイトと一緒に勉強をするのは初めてだったな。

「フェイト、分からないことがあったら質問してね」

「うん」

フェイトはもともと頭がいいからそんなに手間取らなかったけどな
んとか僕に質問しようと変な方向に頑張っていた。
なのはも頭が悪いわけではないんだけど苦手意識が強いせいか集中
力がない。
そのたびに僕はなのはの頭を撫でてやる気を出させる。
フェイトは最初それを見て頑張ってサボろうとしていたから、フェ
イトの場合は問題が解けたら頭を撫でることにした。
そういえばなんか忘れてる気がするんだけど・・・・・・・・・

「俺はいつまで外にいればいいんだ・・・・・・・・・」

～二日目～

一応今日も学校を休んだ。

普通ならもう行ってもよかったんだけど管理局と鉢合わせしたくないため家に引きこもることに。

と思っていたんだけど・・・・・・

ピンポーン

「すごく嫌な予感がしてならないんだけど」

気配が読めないから実際に出るしかないけどリンディさんの予感がしてならない。

リンディさん相手に覗き穴で見ようものなら間違いなく気づかれる。

「ここは居留守をつかうか」

高町家に用がある人だったら申し訳ないけどここは無視を決め込もう。

ドカンッ

「なんだ！」

爆発音がした。
これは管理局の人じゃないぞ。
まさか研究所のやつらか？
いやそれはない。御神流を相手にしたくないはずだからもっと秘密裏に実行するだろう。

ということは・・・・・・

「神代公太！いるのは分かっている」

この声・・・・・やはりそうか。先日デパートで会った魔導師だ。
だがなぜ今なんだ・・・・・・

バンッ！！

いきおいよく扉が開けはなれた。
逃げる余裕すらなかった。

まあたとえ逃げたとしてもすぐに追いつかれただろうが。
飛び込んできたのはこの間と同じくスキンヘッド、眉なし、気の強そうな女性の三人だ。

「ずいぶんと物騒な来訪者ですね」

「ふん。まさかお前があの神代一族だったただなんてな。どうりでブロウの攻撃を軽くいなせるわけだ」

俺のことを知っている？
一介の魔導師が神代一族のことを知っているわけがない。
こいつらのバックにはそうとうの大物がいるな。
しかもこのタイミング・・・・・・

「なぜ今ここに？」

「おや、分からないのか。自分の体のことなのに」

やはりそうか。こいつらは僕の『ロスト』のことを知っている。

「なるほど。正面切って僕と戦える自信がないのか。偉そうな口ぶりなわりには小心者なんだな」

「ああん。言ってくれるじゃないか」

つい挑発してしまったがどうする・・・・・・
今の僕では確実に瞬殺される。
恭也さんたちが帰ってくるのを待つのは気が引けるし、それ以前にそれまで持たない。
となるとやはり管理局を待つしか・・・・・・

かなり派手に入ってきたところからみて、こいつらはこの星に管理局がいることを知らない。

「助けを頼りにしても無駄だ。一応魔力がこの部屋から漏れないようにしているからな。それと私らの目的はだいたい察しがつくだろ？」

おそらく研究所と同じく監禁して僕の目をどうにかして手に入れようとするか、戦争の最前線に立たせるのだろう。

「お断りだ。もうあの生活には戻りたくないからな」

「だが断る！」

どうする・・・・・念話でなのはたちを呼べるけどそれはできない。

禿と眉なしはともかくこの女は二人より強い。（これは前回に測定した結果だ）

やはりおとなしくついていくしかないのか。

「・・・・・・・・・わかっ・・・・・・・」

ドカンッ！！

「「お兄ちゃん！」」

「なのは、フェイト・・・・・・」

なぜここに？学校から魔力を感じたわけでもないだろうし。

「僕が伝えたんだよ」

そうだった、ユーノはこの家にいたんだった。

余計なことを・・・・・今まで出番がなかったからって無理やり入って来るなよな。

「ん？ならなんでユーノが助けに出なかったんだ？」

「え、いやほら。僕が出ちゃったら戦闘になって家が壊れちゃうでしょ」

「いや、結局なのはが壊しちゃったけど」

要するに小心者ってことだな。

「その話はあとにして。まずこいつらを外に」

「分かった」

ユーノが小規模な転移魔法で家の外に敵を移動させた。

「ちっ。まあお前らをさっさと倒せば問題なしだ。ブロウ、ボネス」

「「へい」」

「フェイトちゃん」

「なのは」

2人が気合を入れて立ち向かう・・・・・・・・・が。

ガキンッ！！

「そこまでだ。僕は時空管理局執務官クロノ・ハラオウン。双方おとなしく武器を引け」

……………………………・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

～あとがき～

下っ端A、Bの名前が安直ですみません。

そろそろ公太の能力が明かされます。

第十一話　修行

なのはたちがこの女と戦うにはまだ早すぎると思っていた。
だがそれでも逃げる術はない。それに運がいいことに女のほうは何もせず男たちだけで戦わせるつもりらしい。
おそらくなのはたちが子供だから自分が出るまでもないと判断したのだろう。
だがそれは僕たちにとってはちょうどよかった。
正直三人同時にきていたら勝ち目はない。
でもこの男たち程度なら今の2人なら確実に勝てる。
そして2対1ならまだあの女相手でも勝機はあった。
僕は実戦ということもあってちょうどいい経験だと思い、二人にアドバイスを送りながら戦わせようと考えを変えた・・・・・・・・・・
が、

「そこまでだ。僕は時空管理局執務官クロノ・ハラオウン。双方おとなしく武器を引け」

空気の読めないやつがいきなり現れた。
今方針を変えたばかりなのに・・・・・・
確かに助けはほしかったけどそれならなのはたちが来る前にきてほしかった。
クロノはおそらくユーノと同じ扱いをされるだろうな。

「クロノ君」

「なんだおめえは」

「またガキかい？」

女はまだ余裕の面だ。
どうやら見た目で強さを決めつけているらしい。

「君たちは完全に包囲されている。すみやかに武器を下ろして投降してもらおうか」

そう言いながらクロノはなんかのデータを見せつけている。
パッと見た感じ、どうやら指名手配犯のようだ。

「・・・・・・・・8，9，10・・・こりゃかなりの数で囲まれちまってるねえ」

僕たちからは姿が見えないが近くに待機しているらしい。

「姐さんどうするんですかい」

「・・・・・仕方がない。ここはおとなしく引くとしよう」

「逃がすと思っているのかい？この地域では転移魔法も使えないようにした。強行突破もできない」

「だから管理局はいつまでたってもダメなままなんだよ・・・・・・・・・おい！」

女が叫んだとたん、いきなり白い髪の少年が現れた。
口元を白いマスクで覆い、年齢はクロノと同じくらいだろうか。

「・・・・・・・・・」

「またね。無能な管理局ども」

少年が僕たちに背を向けた途端三人ともども姿を消した。

「な！？」

あっという間のできごとだ。

クロノの慌てっぷりから見て魔力の気配を完全に見失ったらしい。

「エイミィすぐに追跡してくれ！」

『無理だよ。完全に姿を消している。そもそもそこに現れるまで感知されなかったぐらいだよ』

「くそっ」

『公太さん。いろいろとお話を聞いてもいいかしら？』

「リンディさん・・・・・・・・・・・・拒否権は？」

『ありますよ。ですが今後もなのはさんたちが危険にさらされることになります』

・・・・・確かにそうだ。あの三人組程度ならまだいい。

だがあの少年はやばい。

一般人に成り下がった僕でも雰囲気で分かる。おそらく瞬殺だろう。

それにやつらは僕の『ロスト』のことを完全に把握している。

今後もその隙を狙って今度はなのはたちを人質にでも取られたら管理局としても打つ手がなくなる。

「分かりました」
『ではクロノ。なのはさんとフェイトさんも一緒にアースラまで連れてきてください』
「・・・・・はい」
何事もなかったかのようにしているリンディさんと対極にすごい落ち込んでいるクロノ。
ここがリンディさんとクロノの大きな違いだろう。
まだクロノは精神的に見てかなり未熟だ。
それを自分でもきちんと分かっているからこそ余計に悔しいのだろう。
僕もリンディさんに会うまでに考えをまとめておかないと。いろいろと、ね・・・・・

……………………………………・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・

僕たちはアースラの会議室のようなところに案内された。
来る途中に何人か武装局員を見たけどこの場にいるのはリンディさん、クロノ、なのは、フェイト、僕だ。
ユーノには少し調べ物をしてもらっている。
「いろいろと疑問点があるから聞いてもいいかしら？」
「そのためにここに連れてきたのではないんですか？それに僕に拒否権はありません」

分かりきった質問を分かりきった答えで返す。

「そうね。まず先ほどの三人組について知っていることはありますか？」

「やつらと会ったのは今回で二回目です」

「二回目？」

リンディさんではなくフェイトが疑問にする。

「そういえばそのときはまだフェイトと会っていなかったね」

僕はデパートであったことを説明した。
あの時のことは地球では単なる爆発事故としてしか扱われていない。
だから管理局も情報を得ていないのは当然のことだ。

「そんなことが・・・・・狙いは公太さんのようでしたけど？」

「そうでしょうね。僕は珍しい能力を持っていますからね。そちらの言葉でいえばレアスキル持ちってところです」

「あの三人組は盗賊団なんだ。ロストロギアを移送中に襲って奪ったり、発掘中の場所を荒らして持ち帰っていることで指名手配されている」

「二人の男は魔導師ランクがＢランク程度だけど女性のほうはＳランクよ。でも・・・・・・・・」

「なぜ君はさっさと追っ払わなかったんだ？君の力なら十分撃退可

能なレベルの敵だ」

僕は管理局に戦闘に関しての力を見せたことがないのだが、なのはたちからの話で少なくともなのはとフェイトが束になっても勝てない男という印象を勝手につけているのだろう。
それにこの間ユーノとの模擬戦のこともユーノがばらしていた。
・・・・・・本当に余計なことしかしてくれない。

「それは僕を戦力として考えているから知っておきたいということですか？」

「そうです。いざという時は公太さんにも協力してもらうかもしれません。これは私の勘ですが彼らの後ろにはもっと大きな組織があるような気がしています」

僕もその意見には同感だ。
一介の泥棒が僕の『ロスト』のことを知るはずがない。

「一般人に管理局自らですか」

ふつう管理局は一般人を巻き込むことは極力避けるようにしている。
ただしリンディさんはあらゆる状況を鑑みたうえでの決断だろう。
そもそもここまできといて一般人も何もない。むしろ当事者に近い。
ていうか当事者だろう。

「・・・・・なのはたちのこともあるし、そちらも僕たちのことを部外者扱いしないのならお話ししましょう」

「こちらも協力してもらうのですからきちんと情報等をお渡しします」

とりあえず2人には僕の『ロスト』のことを話した。

「不思議な体ね。あなたの能力が強すぎるっていうのはレアスキルがってことよね？」

恭也さんたちにも言ったように僕の能力は人の持てる力をはるかに超えているからそのリバウンドだろうというところまで話した。
その持てる力が僕が言っていたレアスキルのことではないかとリンディさんは言っているのだ。

「そうです。この右眼が」

そう言って眼帯を外す。

「やはりそうか。その眼はなにかあると思っていたんだ」

この親子は勘がいいな。
これは管理局としての経験なのだろうか。

「詳しい能力については・・・・・・」

「言えません」

「そう・・・・・・」

最初からそう言うのが分かっていたのだろうかしつこく追及をしない。

「ですが戦争レベルまでになったらお話ししますよ。そもそも今は

なのはとフェイトたちに集中したいのでせめてそれが終わるまでは待ってください」

戦争レベル・・・・・・

背後に大きな組織があるとしたら可能性はゼロではない。

そうなる前に二人をもっと早く成長させないと。

「ぜひ聞きたいところだけど戦争になることは避けたいわね」

リンディさんのその可能性を考えていたのか、やけに重く言う。

「あの三人組についてはどの程度分かっているのですか？」

戦争になるとしたら相手の組織は管理局に匹敵するということになる。

そんなことは普通は考えにくいのだが、その可能性が高いと思う理由が・・・・・というより気にかかることが一つある。

「あの三人組はＡ級指名手配犯だ。危険度の高いロストロギアばかりを狙うやつらで、奴ら以外で似たような事件が他でも起きている」

もしそれも一つの塊だとしたら、危険度の高いロストロギアを集めてどうするのだろうか。

僕はロストロギアの一つ一つの能力は分からないが、どれも一筋縄ではいかないものだというのは分かっているつもりだ。

たった一つのジュエルシードですらあれだけの力を秘めているのだ。

「だとしたら奴らはジュエルシードも狙っているのではないでしょうか？」

「その可能性は高いわね。でもそれなら21個すべてを欲しがるでしょう？」

確かにそうだ。
もちろんジュエルシードが2、3個あるだけで大きな力にはなるが、相手はいくつもロストロギアを集めているのだ。
たかが数個ではないだろう。
だがそうなると21個すべてそろったところを奪いに来るだろう。
となると・・・・・・

「ジュエルシードの件は置いといて、あの女には注意したほうがいいかと」

「それはSランク魔導師だからではなくて？」

「そうです。あいつはなのはたちの力を見極めることが全くできていませんでした。それなのに・・・・・・」

「それなのに私たちが包囲している数を把握していたということね」

この人は僕の頭の中でも読めるのかと言うぐらい察しがいい。というより頭がいい。
クロノもそれなりに頭はいいのだろうが、リンディさんはもはや別次元だ。僕でもここまではいかないだろう。

「これは異常です。魔力にしろ、気配にしろ普通はどっちもできるかできないかなはずです」

誰かと通信していたという可能性もゼロではないが、あいつはちゃんと数を数えていたように見えた。

「どんな能力を持っているのか分からないから用心をしておけということだな」

ここまできたらクロノも理解できたみたいだ。

「ではあのマスクの少年は？」

リンディさんがおそらく一番聞きたかったことだろう。

そう。それが一番問題なのだ。

「・・・・・あいつは僕がなんとかします」

「ちょっと待て。なんとかするってどういう意味だ？」

クロノが突っかかるが、リンディさんは僕の言葉の意味を理解してくれたようだ。

「私たちの手に負える相手ではない。そういうことよね？」

「はい」

ロストしている状態であそこまで危険だと感じられた。

詳しくはロストから解放されて会ってみないと分からないが、少なくとも一介の魔導師がどうこうできるレベルの相手ではないことだけは確かだ。

「魔導師ではないのね？」

「おそらくやつは僕と同じです」

「・・・・・今は確信もないでしょうから詳しくは聞きません。でも何か分かったら一応私たちにも知らせてください」

「それは約束します。お互い同じ条件で協力するつもりですから」

これは絶対に守るつもりだ。

この事件に関しての隠し事はお互いなしにしたい。

敵の情報が少なすぎる。こういうことを調べるのは大きな組織である管理局に頼ったほうが効率がいいだろう。

僕にとって重要なのはなのはとフェイトを守ること。いや、相手が大きな組織となると高町家にまで危険が及ぶかもしれない。

家族を守るため、そのためには僕はなんでもする。

「あの～」

今まで蚊帳の外だったなのはとフェイトが手を挙げて質問してきた。

「結局ジュエルシードはどうすればいいんですか？」

「このまま集めるよ。相手もすべて集めるまでは今更手を出さないだろう」

それにプレシアさんとの約束もあるからジュエルシードは一旦すべて集めておきたい。そもそもあれほどの力を放置しておくことはできない。

「いざとなった時、私勝てるかなあ」

フェイトの自信なさげな一言。

でも僕はその言葉で少しうれしくなった。

「そのために僕がいる。それよりも一緒に戦ってくれるんだね」

「あ・・・・・」

顔を赤くして俯くフェイト。

いつの間にか大きく変化していたんだな。

「じゃあジュエルシードの件は君たちに任せるよ。僕たちはこの街全体の警戒と情報収集に徹する」

クロノの言葉でこの場はお開きとなった。

「了解」

とりあえず明日は学校に行こう。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・

「と、いうことがありました」

「それは・・・・・また面倒なことだな」

とりあえず管理局と話したことを父さんと恭也さんにも話した。

２人には都合のいい部分でもいいから話すという約束をしている。

主に話してないのは魔法というワードを省いただけ。

「とりあえず明日一日だけ二人の警護をお願いします」

ロスト三日目さえ乗り切れば対策も抵抗もできる。
この2人ならその辺の魔導師なら遅れはとらないだろう。
少なくとも飛ばなければなのはとフェイトよりも断然強い。

「分かった。明日は一日中俺が見張るよ」

父さんは店での仕事があるため恭也さんが一日警護することになった。
まあ恭也さんなら目立つことはないだろうけど第三者から見たら完全に不審者となるな。

「この件が終わったらすべて話してくれるんだよな」

「それはなのはがちゃんと話すと思います。もちろん僕のこともきちんと話しますよ」

僕自身のことは今話そうが後で話そうがたいして変わりはないが、なのはは別だ。
僕のこともなのはが話すときに一緒に話すと決めている。
でも、この件が大事になったらそうは言っていられなくなるが。

「小学三年生にはいろいろとキツイものだな」

「でも敵がなのはも狙っているので避けられません」

「分かっているさ」

苦虫を噛み潰したような顔をする恭也。

「家族を守るのが俺たち男の仕事だ」

自分の娘が危険にさらされているというのにこの落着きよう。
内心いろいろな感情が入り混じっているだろうに。

『分かったか？』

後ろで聞き耳を立てていたなのはに念話を飛ばす。
もちろん父さんたちも気づいているだろう。

『・・・・・うん』

敵が強大だと理解しながらもなのはの決意は揺るがない。
フェイトも母・プレシアのために決意はしているが、それがなのはの存在で揺るぎ始めている。
ジュエルシードは集めるだろう。だが集めた後どうするのか。
ジュエルシードは管理局が管理している。
プレシアの望みを叶えるということは管理局にたてつくということ。
そうなれば今のような生活はもう送れないだろう。
だから僕はそれを回避するためになんとかしようと思う。いや、しなければならないのだ。
それにプレシアさんがジュエルシードを病気を治すために集めていたのか微妙なところだ。本人はそうだとは一言も言っていないしね。
どう使えば病気を治せるのか僕には分からないが、元科学者のプレシアさんなら不可能ではないだろう。
が、２１個も必要なのだろうか。
まあその辺の謎もこの件が片付けば分かるだろう。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・

三日目飛んで四日目、ロスト解放。

「塞がってた気が解放される感覚というのは何回やっても慣れないな。少し気持ち悪い」

「お兄ちゃん、よかったね」

いつも寝坊助ななのはが僕よりも早く起きて迎えてくれた。
フェイトも同じく心配してくれてたみたいだ。

昨日は何事もなく終わった。
今日からいろいろと動かなければならない。修行も再開だ。
それとユーノに頼んでいた調べものの報告もあとである。
これによってはフェイトとプレシアに関してかなり進歩するだろう。

「今日は今まで遅れてた分を取り返したいから一日修行に費やすけど大丈夫？」

今日は土曜日だから一日中フリーである。
小学三年生の女の子にとっては遊びたい年ごろだろうけど、この2人は覚悟していたようだ。

「「お願いします」」

今回は現在の2人の修行の流れを紹介しよう（一日フルバージョン版）。

朝食を摂り、食べ物が消化されるまで休憩（主に夜休めるようにするため勉強）。
お昼三時間前くらいに走り始める。
距離はおよそ５Ｋｍ。小学三年生の女の子にはきついイメージだが、魔力を運搬させて肉体を強化しているからだいたい２Ｋｍぐらいの量だ。そこまで濃く魔力を流していない。
走り終えたら疲れたまま魔力弾の展開。
先日の蜘蛛戦のように限界まで魔力を展開させて維持する。
これで分かったことだが、わずかになのはの方が魔力量が大きい。
といってもクロノやユーノに言わせるとフェイトも馬鹿でかいのだそうだが。
そして維持したまま僕がちょっかいをかけるのを避ける作業だ。
これがけっこうキツイ。特になのはは要領があまりよくないのか、展開した魔力を数個消してしまう。
ちなみにフェイトは持ち前の運動能力で軽くかわせる。
ここまでやったら休憩に昼食の時間だ。
すぐに食べると気持ち悪くなるから、僕が簡単なツボ押しマッサージを全身にやってあげる。
なぜかこれをするとき、二人ともじもじするんだよね。
そして昼食を食べた後はまた二時間ほど休憩。ここでは家でゲームをしたり、軽く昼寝をする。

午後の修行は個々の戦術に合わせた魔法の練習だ。
なのはは魔力運用の効率化と、僕とユーノの攻撃をひたすら避ける練習。
フェイトは僕との格闘戦だ。
フェイトのウリはスピードだ。だが、スピードをより速くしようとした結果防御がかなり薄くなってしまっている。
中途半端に装甲を厚くしたら、逆に弱体化するだろう。だからスピードを極限までに特化させる。

考えてみると防御が高くて砲撃型のなのはと、スピードで翻弄する接近戦タイプのフェイトが組んだらものすごくいいのではないだろうか？

「じゃあなのはは少し休憩してて」

なのはとの軽い模擬戦が終わって、次はフェイトとの模擬戦だ。
今回の模擬戦は僕との眼の力を使わない状態でのガチバトル。
ただしフェイトは空を飛ばない。回避のために空中に逃げるのはありだが、空中からの攻撃はなしでいく。
空中で砲撃をやられまくったら僕はちょっと本気をださなければならなくなるからな。
そして僕は気配を読むということをしない。すべて目視と音で行動することにする。

「準備はいいかい？」

「お願いします」

「いつでもかかっておいで」

その言葉が言い終わると同時に僕の目の前に瞬時に移動してきた。
もちろん僕はその程度に驚かないで軽く後ろに下がる。
と、またさらに目の前にくっつくようにして移動してきた。

「魔力の使い方が上手になったね」

その言葉にフェイトが少し照れた顔をする。

「油断しない」

僕は気を足に込めて瞬時にフェイトの後ろにまわる。そして軽く掌底を叩き込む。

「くっ・・・」

僕の掌底によって後ろに吹っ飛ぶフェイト。内臓にダメージがいかないように攻撃したから問題はないだろう。

『フォトンランサー』

先のとがった黄色い魔力が八つほど展開される。
この魔法は簡単に大量生産することはできないが方向転換することができる。

『Ｆｉｒｅ』

まず四つが公太に向かって放たれた。
公太はそれを軽くかわしてフェイトのほうに向かう。

『Ｆｉｒｅ』

飛ばしていなかった残り四つの魔法が正面から向かってくる。

『ターン』

最初にかわした魔法が後ろから迫ってきて、挟み撃ちの形になった。

「単純な戦術だな」

誰でも簡単に予想のできる行動。
公太は音で後ろから迫ってくる魔法の距離を判断して、ぶつかる直前にしゃがんで前方の魔法と衝突させた。

「！」

だが相殺されたのは四つのみ。
フェイトは魔法を四つのうち二つだけターンさせて公太に攻撃したのだ。
残った二つはその場にとどまっている。
そして前方の魔法がまだ二つ相殺されずに残っている。

『ターン』

公太はしゃがんだため、真上から下に前方から放った魔法が叩きつけられ、後方にとどまっていた魔法も襲い掛かった。

「なのはもそうだけど、二人の魔法の資質とバトルセンスは天性のものだな」

もちろん公太は無傷。
気を全身に膜のように包んでフェイトの魔法を凌いだのだ。
公太にとってはフェイトの魔法は軽すぎる。
だからフェイトは戦法を変えた。

『フォトンランサー』

『Ｆｉｒｅ』

先ほどと同じ数の魔法が上空から地面にふりそそぐ。

だがほとんどが公太に向かって放たれていない。

「これは目隠しか」

地面にたたきつけることによって粉塵が舞う。
そしてフェイトが高速で公太に切りかかる。
今の公太は目視と音でフェイトの場所を判断しなければならない。
本来の公太なら音でフェイトの場所を特定することなんて造作もないこと。
だが公太は普段の癖でとっさに気配に頼ろうとしてしまった。慌てて気配ではなく音で場所を特定しようと切り替えたが、それが大きな隙となった。

ザンッっとフェイトの攻撃が二撃当たった。
フェイトのスピードが速すぎるため、ちょっとした隙で二撃も与えられてしまった。
その辺の魔導師なら大打撃のレベルだ。

「うん。合格だね」

「ありがとうございます・・・・・・・・・あの、お兄ちゃん大丈夫？」

フェイトは当たった二撃を心配しているようだ。
本気でやらなければ相手にもならないのでつい深く二撃入れてしまったのだ。

「大丈夫だよ。僕の体は頑丈だから」

そう言って服をまくって見せると、擦れて赤くはなってはいるもの

の、どう見てもダメージにはなっていない。

「あ、うん。な、ならよかった・・・・・・」

いきなり裸を見せられてフェイトは慌てて眼をそらす。
ちなみになのはは恭也で見慣れているのか普通の様子だ。

「フェイトちゃんすごいよ。お兄ちゃんに二回も攻撃が当たったんだもん」

「そんなことないよ。お兄ちゃんが気配を読んでいたら最初から相手にならなかったよ」

「いや、でもフェイトもなのはも強くなったよ。だいたい気配を読むなんてことをする魔導師はいないと思うから十分やってけるよ」

「ほんとに!?」

「・・・・・・・・・・・・」

公太の言葉を聞いてよろこぶなのはだが、フェイトが複雑そうな顔をしている。

「どうしてお兄ちゃんはなのはだけじゃなくて私にも優しくしてくれるの？」

「・・・・・・・・・」

「私はジュエルシードのことで裏切るかもしれないんだよ」

「フェイトちゃん・・・・・・」

「僕は本当のフェイトを信じてる」

「本当の私？」

「今のフェイトはとても複雑な状況だ。今もつらそうな顔をしているから痛いほど分かる。でもフェイトの中身はどんな状況であろうと変わらないはずだよ。最終的にフェイトがどう行動するのかはわからない。でもフェイトが優しい子だってことは僕となのはが一番よく知っているから。それにフェイトが間違った道に進んでしまったら必ず僕が正しい道に導いてあげるしね」

「・・・・・・お兄ちゃん」

「何か悩み事があったら僕に相談してくれていいんだからね。もちろんなのはでもいい。女の子同士でしか解決できないことってのもあるだろうし」

「・・・私・・・・・・ここにいていいの？」

「もちろん」
「もちろんだよ」

「・・・ありがとう。なのは、お兄ちゃん」

フェイトの目から涙が流れた。でもそれは決して悲しいから流れたのではないことは言うまでもないだろう。

・・

第十一話　修行（後書き）

これまでの文章量は他の方と比べて少々長いことに気づいたのですが、第二章から量を減らしたほうがいいですか？
もし希望があれば感想で教えてください。

第十二話　プレシア・テスタロッサ

「リンカーコアが汚染した病例は何件かあったよ」

「本当か！」

「うん。でもなんでそんなことを？」

その質問を軽くはぐらかして、ユーノから渡された資料に目をとおす。

プレシアさんの病気を治すためにユーノにいくつか調べてもらった。

思った通り、治す方法がないようで不治の病と言われているようだ。

だが僕が知りたかったことも詳しく載ってる。さすがユーノだ。

今最高に輝いているぜ。

「ありがとう。助かったよ」

「だからなんでそんなことを調べているんだ？」

「ありがとう。助かったよ」

「だからなんで・・・・・・・・・分かった。無駄だということが」

「ありがとう。助かるよ」

もう言ってもいいことなのだが、なのはとフェイトたちにはギリギリまで黙っておきたい。

だからユーノもその時まで待っててもらう。

「いずれ分かる。とにかく今は僕を信じてくれ」

まだ僕に対する疑惑がなくなってはいないものの、ある程度は信用してくれているようだ。

最近ユーノの出番が少ないから増やしてあげたいな。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「今日学校が終わったら大事な話がある」

今日の朝に公太が2人に言ったことだ。本人たちは何のことだか皆目検討もつかない。

朝から放課後まで8時間ぐらいあるため、気になってしょうがない。これまたしょうがないことで、わからないことを考えれば考えるほどどんどん悪い方向に考えてしまう。

お前たちは弱くて戦力外だから戦闘に参加するな、とか

高町家を出て行くことにしたよ、とか

授業中ずっと唸ってたかと思うと、急に涙を流したりと情緒不安定な状態であった。

そんな様子を見かねたアリサら4人は昼食時に何があったのかと問い詰めた。

問い詰めながらも、公太関係なんだろうなと誰もが予想していたのだが。

ちなみに当の本人は用事があるといって休んでいる。

小学生にしては風邪以外で休みすぎだと思わなくもないが、公太だからとこの場にいる誰もが納得する。

それだけ公太という存在は無駄なことをしない人だと思われている

のだ。

「で、公太に何言われたのよ？」

「お兄ちゃんだなんて言ってないよ」

「あんたたちがおかしくなることなんて公太以外にありえないわよ」

「そんなこと・・・・・・ないもん」

「いいから話しなさい」

なのはとフェイトは朝にあったことを話した。それを聞いたアリサは2人のネガティブさに呆れ、なぜか宮井がニヤニヤしている。

「むっふっふ」

「何よ、気持ち悪い笑い方して」

「なのはちゃん、フェイトちゃん。それはズバリ愛の告白よ！」

「「あ、愛の告白！？」」

「そう。あとで大事な話がある。こんなセリフ、愛の告白以外にありえないわよ」

「そ、そうなのかな」

「そんなわけないでしょっ！」

見かねたアリサが声を上げる。

「だいたいそれならどちらかが振られるってことでしょ。そもそもあの公太が唐突にそんなこと言うわけないじゃない」

「ふ、振られる・・・・・・」

この2人はまだ公太に対して尊敬や好意を抱いているのは間違いないが、それが恋愛感情だという自覚はない。
それなのにアリサの言ったことに軽くショックをしてしまう。
当然「公太が唐突にそんなこと言うわけない」って言葉は耳に入っていない。

「たぶん神代君は告白とかじゃなくて、他にきちんとした大事な話があるんだよ」

見ていられなくなったすずかがフォローをする。
それにすずかは初めて公太に会った時から何か不思議な感じを感じたのだ。
それは誰にも言っていない。いや、言語化することができるような感じではなかった。

「それは分かってるの。でもだからこそ不安で・・・・・・」

「フェイトちゃんも？」

「わ、私は・・・・・・その・・・」

フェイトの感情はなんなのか。なのはと同じ感情を抱いているのは間違いないだろう。

だけど公太が家を出ていこうが戦力外だと言われようが、本来フェイトには関係のないはずだ。
確かに世話にはなっている。最近では公太に対していい感情も抱いている。
でも今のフェイトにはここまで心配する理由にはならない。
今のフェイトはとても微妙な立場だ。

「神代君のことを信用してみたら。そんなに悪いことじゃないと思うよ」

「そう・・・・・だね」

「うん。私も・・・・・・」

最近の2人はネガティブ思考すぎるのがよくない。それはここにいる4人が心配していることだ。

なのはとフェイトは放課後まで悶々と過ごしていた。
完全なネガティブ思考から解放されたものの、今度は宮井が言っていた告白という言葉が頭をよぎって仕方がない。
もしどちらかが振られたらと結局ネガティブになってしまっているのだが、初めての色恋沙汰の経験に頭が混乱している。
色恋沙汰と言っても勝手に思い込んでいるだけなのだが。

「二人に大事な話、というより会わせたい人がいる」

「「え?」」

「どうした?間抜けな声を出して」

身構えていた二人に、話ではなく会わせたい人がいると言われて思わず力が抜ける。
ここまできたら普通ならここでなのはとフェイト以外の女性がと考えるものだが、その可能性はみじんも考えつかない。
それは決して自信からとかではないがそれだけは絶対にないと本能で感じている。

「会わせたい人？」

「フェイトのよく知っている人だよ。アルフ！」

「あいよ」

僕と一緒に来ていたアルフと転移魔法でフェイトの母、プレシア・テスタロッサの住む居城に移動した。プレシアが好きだというチーズケーキを持って。

「ここは・・・・・・」

「フェイトのお母さんのところだよ」

「なんでお兄ちゃんが・・・」

「僕は何でも見通している・・・・・・とまでは言わないけど、たいていのことには気づいているつもりだよ」

「そうだよね・・・・・・お兄ちゃんなら知っていてもおかしくはないよね」

「なのはにはまだよく分からないのですが」

「なのはは聞いているだけでいい。大切な友達とその母親がどんな状況なのか」

「うん・・・・・・」

「こういうことはフェイトに言ってからというのが普通なんだけど、そうも言ってられない状況になったから。ごめんな」

「でも・・・」

「怖いか？」

今の親子の関係は人に見せられるものではない状態にある。しかもやっと仲良くなれた友達に見せたら、嫌われるのではないか、と。

『少しはなのはのことも信用してあげな。なのははそんなことで友達を見捨てるようなことはしないよ』

念話でフェイトに言う。

そんなことはフェイトも分かっているはずだ。

『うん』

「じゃあ行くよ」

目の前にある、大きな扉を開ける。

「ぞろぞろと連れてきてなんのようかしら」

思いっきり苛立ちをあらわにしたプレシアの言葉が飛んでくる。
その苛立ちの原因はフェイトを僕と一緒に連れてきたからだろうか。

今回急にこんなことをしたのにはもちろん理由がある。
一つは不安要素の排除。これからの戦いはとても厳しいものになると予想される。それで不安や迷いを抱えたまま戦うのは危険すぎる。これはフェイトの迷いを断ち切るためでもある。
二つ目、これは難しいことだが、これからの戦いに戦力を補給したい。時空管理局の局員レベルではおそらく厳しいだろう。
それにおそらくプレシアさんにしか分からない情報を持っている可能性がある。
これらのためにも、今フェイト親子の関係をなんとかしなければならない。
時間をかけてはいられないのだ。
ちなみに現状把握のためにユーノも連れてきている。

「フェイトには今お母さんがどんな状況か教えておこうと思って」

「お母さん、病気なの？」

「黙りなさい。公太、約束が違うわ」

公太はその言葉を無視して言葉を続ける。

「なんで病気だと？」

「お母さん、たまに苦しそうにしてたから」

「黙りなさいと言っているのよ」

「黙りませんよ。そんな約束はしていない。フェイト、よく聞いて。今プレシアさんは・・・・・・」

ドンッ

雷撃が僕とフェイトの真横に落ちる。

「では聞きますがなぜ言ってはいけないのですか?」

「人形には知る必要のないことだわ」

「人形・・・・・・」

母親からのフェイトに対する人形発言に公太以外の人は戸惑いを隠せない。

「それは雷撃を飛ばして怒るほどのことだと?」

「何が言いたいの?」

「あなたももう分かっているんじゃないですか?」

そして公太はフェイトに告げた。今のプレシアはもう長くないと言うことを。そして治せるレベルでもないと言うことも。

「う、そ・・・・・・」

嘘だよねとプレシアに問い詰めたい気持ちでいっぱいだが、公太がこんなことで嘘をつくはずがないと分かっている。

だからショックと突きつけられた絶望に言葉が出なくなっている。

「フェイトはあなたの体調がよくないことに気づいていた。このチーズケーキが好きだということも。あなたのちょっとした変化に気づけるほどあなたをよく見ているんですよ。それでもあなたはフェイトを人形扱いするんですか？」

「ええ、そうよ。その娘は私の人形よ」

「お母さん・・・・・・」

「そうですか・・・・・・ならあなたの病気は治しません」

「え！お兄ちゃん・・・・・・」

まさか公太がそう言うとは思わなかったなのはは驚きを隠せないでいる。フェイトはもはや涙目だ。

「ならあなたが管理局からジュエルシードを取ってくると言うの？」

「もちろん約束ですから持ってきますよ。ただし、管理局も一緒にね」

「ふざけないで！約束が違うわ！」

「違いませんよ。ただ、持ってくるものが増えるだけです」

「くっ・・・・・・」

本来なら親子の関係修復なんて強制でやらせるものではない。だが公太にはいくつかの確信があった。

「では聞きますが、あなたはなぜジュエルシードを欲しがるのですか？最初は病気を治すためだと思っていました。でも調べてみたらそれはありえません。確かにいくつかあればリンカーコアの汚染を取り除けるでしょう。でも副作用が大きい。結果的に割に合わず意味がないんです。そもそも、２１個も必要ない。大規模な次元震を起こせるほどのものを使って何をするつもりですか？」

「・・・・・・」

「まあ理由のほうは今は置いておきましょう。それより、娘が大事ではないのですか？」

「そうね」

「か、母さん・・・・・・」

フェイトに突き付けられる現実。そんな予感はしていた。でも昔は優しかったから何か事情があるのだと、そう思って今まで頑張ってきた。

それがすべて無駄だったのだ。なのはや公太に敵対していたことも、自分の母親に対する愛情もすべて。

「ほう。ということはアリシア・テスタロッサも大事ではなかったということですね？」

「！？」

その名前が公太の口からでてくるとは思っていなかったのか、怒りより驚きのほうが強く出てしまっているプレシア。

「フェイト、よく聞け。プレシアさんにはもう一人娘がいた」

「いた？」

「そうだ。当時大型魔力駆動炉の設計主任だったプレシアさんは、効率のみを重視し安全性を度外視した結果、駆動炉の大爆発を引き起こした事件によって窒息死した。まあおそらくこの研究の方向性を決めたのは上の人間だろう。結果のみを早く求めた結果の悲しい事件だ」

「そうよ。だから私はあなたを作ったのよフェイト。でもあなたはアリシアではない、ただの失敗作。だからアリシアだという記憶を消してプロジェクトの名前をそのままつけたのよ」

「プロジェクトF．A．T．E。人造生命と死者蘇生を可能とする技術。おそらくプレシアさんは人造生命から記憶等をすべてコピーして結果的に蘇生しようとしたのだろう」

「そうよ。なのに使えないものができてしまったからほんとがっかりだわ」

「実の娘になんてことを！フェイトは今までお前のために頑張っていたんだ！」

アルフが吠える気持ちも分かる。実際僕も殴りたいぐらいだ。だがそれでは結果が得られないし、フェイトにもかわいそうだ。

「僕は最初、ジュエルシードを集めるのはアリシアを生き返えさせるためだとも一瞬考えたが、それは不可能だ。間違いなく強すぎる

力によって化け物が生まれるだろう」

「違うわ。私はジュエルシードの力で永遠の都、アルハザードへ行くのよ」

「アルハザード・・・・・なるほど、確かにおとぎ話通りならでは死者蘇生ができてもおかしくはないな」

「アルハザード？」

「一般には次元世界の狭間に存在し、今は失われた秘術の眠る地と言われているところだ。でも・・・・・あそこはもうないよ」

「あなた！アルハザードがどこにあるか知ってるの！」

公太の何気ない発言を聞き逃さなかったプレシアが公太に掴み掛る。

「言ったはずだ。もうない」

「そんな・・・・・・・・・でも研究で・・・あいつが・・・・・・・・」

どうやらプレシアにはアルハザードがあるという確証があったらしい。

でもあそこは本当にもう存在していないんだ。

「これからどうするんですか？頼みの綱が消え、あなたの手元にはフェイトしかいません」

「母さん・・・・・・」

希望が消え、力なく座り込んでいるプレシアにフェイトが手を伸ばす。

「触らないで！あなたはもう用済みなのよ！」

「そんなのフェイトちゃんが・・・・・・」

『なのは、ここは黙ってて』

『でも……』

『大丈夫だよ。フェイトならきちんと答えが出せる』

『うん』

プレシアに罵倒されながらも近づき、そして静かにフェイトはプレシアを抱きしめた。

「離れなさい！」

「いやです」

フェイトがプレシアさんにはむかったのはおそらく今回が初めてだろう。

「母さんがなんて言おうが私は母さんの娘です。アリシアにはなれないけど私は母さんが望むことをしてあげたい」

「なんで、なんでそんなことが言えるのよ。私は今まで散々あなた

にひどいことをしてきたのよ」

「私が母さんの娘だからです。それ以外に理由はありません」

フェイトの強さに正直驚いた。
プレシアさんがフェイトを人形扱いをした時の顔を見て正直だめだと思っていた。
でもアリシアの話を聞いて、フェイトの顔つきが変わった。
フェイトが何を想っているのか僕にも分からない。
でも、プレシアさんに対して言ったことに偽りはないだろう。

「分かってはいたの。あなたが私をどれだけ心配してくれていたのか。チーズケーキの件で改めて思い知らされたわ。でも私にはアリシアしかいなかった。アリシアに似ていたあなたが疎ましかったのよ」

自分でフェイトを作っておいてこれはない。
それでもフェイトはプレシアから離れない。

「私を許してくれるの？」

「はい」

その言葉にプレシアさんは涙を流した。
プレシアさんは僕が初めて現れたときから、フェイトに対しての認識に戸惑っていたのだろう。
今までアリシアのことしか頭になかったから分からなかったが、改めてフェイトのことを見つめるとどんなにプレシアに対して一生懸命だったか認識させられた。
プレシアさんも自分の娘のために行動していた。

それがわずかだがフェイトと重なったのだろう。
先ほどの病気を言わせなかったのもこれ以上フェイトに心配をさせたくなかったことからの行動だろう。

「お兄ちゃん、お母さんをお願いします」

「いや、これはフェイトとなのはの力がないとできないんだよ。あ、あとユーノもね」

「僕はついで・・・・・・」

なのはの肩の上で落ち込んでいるユーノを無視して公太は話を続ける。

「私がフェイトに対する認識を改めなかったら・・・」

「治せなかったでしょうね」

「・・・・・本当にあなたはむかつくわね。でもそのおかげで・・・・・・・・・ありがとう」

「どういたしまして」

人は変わろうと思えば変われる。
いやもともとプレシアさんは変わって等などいなかったのだ。
ただ自分の寿命と目的に混乱していただけだったのだ。

「とりあえず説明するよ。まずプレシアさんの病気を治すにはリンカーコアと同化しているウィルスを除かなくちゃいけない。この症状の恐ろしいところは、このウィルスが完全に同化しちゃって取り

除けないところにある」

「同化しているのに私のリンカーコアを傷つけずに取り除けるの？」

リンカーコアの破壊は本人の死につながる。

「そこは僕の能力でなんとかする。だけどそのためにはプレシアさんに流れている気を正常に戻さないといけない。本来なら僕がやればいいんだけど、別の作業があるからできない」

「でも私たちは気を扱えないよ」

「そう。だからユーノに調べてもらった。この症状の人は魔力の流れも同時に乱れている。そしてその乱れを定期的に抑えることによって死期を延ばしているんだそうだ」

僕が知りたかったのはどうやって延命するかのその方法だ。
そこからヒントが得られると思っていたからだ。
しかも僕が予想していた通り、気と魔力の流れが原因だったのだ。

「ということは私たちの魔力で気の流れを正常にするってこと？」

「そうだ。だが、気と魔力はよほど相性が良くないとうまく合わない。だからこの作業はフェイト一人にやってもらう」

「私・・・一人・・・・・・」

「大丈夫だ。作業自体は一人でできるレベルだ。ただプレシアさんとフェイトがどれだけお互いを信じあえるかが重要だ」

もともと病気を治すのにこの信頼関係が重要だった。
だから親子の仲を戻すことから始めたのだ。
フェイトはもう大丈夫だろうけど、プレシアはどうなのかという不安がないわけではない。
でも元からフェイトに対していい感情が、表に出していないだけであって存在していたのだ。
おそらく大丈夫だろう。

「そしてなのはにはウィルスを取り除いてもう」

「すごく大役のような気がするのですが・・・・・」

「大丈夫だよ。人間の体が壊れない程度に魔力を注ぐだけでいい。魔力供給の練習は毎日したでしょ」

「うん。フェイトちゃんのお母さんのためだもん。頑張る」

「アルフはプレシアさんの背中に手を当ててウィルスの気配を読み取ってくれ」

「あいよ」

「それとユーノはなのはのサポートを。微妙な魔力の調整を指示してあげて」

「分かった。それで同化の件はどうするんだ?」

「君たちのお待ちかね『眼』の力を使う」

まずみんな部屋の中央に移動する。

そしてプレシアさんを横に寝かせてフェイトがプレシアさんの手を握り、なのはがプレシアさんのリンカーコアがある位置に両手を添える。
僕は『視る』だけでいい。今回使うのは学校の屋上で触手相手に使った力だ。

「始めるぞ」

「待って。その前に今回君が使う能力を教えてくれ」

まあ何するのか分からなければ心配ではあるよね。
別に今回は堂々とするつもりだったから言ってもいいだろう。

「今回僕が使うのは『クロノスの眼』」

「『クロノス』って言ったら確か地球の時の神よね？」

さすがプレシアさんだな。
地球の神話まで知っているとは驚きだ。
となると他の能力がばれるのも時間の問題かもしれないな。
と言っても、今のプレシアさんなら問題ないか。

「そうです。この眼の能力は時の停止」

「そんなの無敵じゃないか！」

騒ぐなユーノ。
無敵なわけないだろ。

「今に分かるよ。それよりいいか？今回の作業は5分ほどかかる。

なぜならなのはの魔力がウィルスを完全に死滅させるまで5分かかるからだ。それまでフェイトは魔力をプレシアさんの気に合わせて正常にし続けなければならない。大丈夫か？」

このことを伝えておくのを忘れていた。
なのはは徐々に魔力を送らないといけないからリンカーコアの汚染具合から見てどうしても5分はかかる。

「大丈夫だよ」

「大丈夫」

「私はそのままでいいの？」

「大丈夫です。次に気づいた時にはもう終わっていますから」

「分かったわ」

「先に言っておくけど何があっても心配しないでね」

「「え？」」

僕は2人の疑問を無視して、右目の眼帯を外してプレシアさんを『視る』。
その瞬間プレシアさんの体が固まった。
今プレシアさんの体は僕たちの『時』とは違うところにある。
リンカーコアと同化をしているウィルスを除いて。

「まずはフェイト」

時を止めていても実際心臓や血の流れはそのまま動いている。
この辺の説明が少し面倒なのだが、今回は省くとしよう。

まずフェイトがプレシアさんの気の流れを正常にするために魔力を流し込む。
そしたらプレシアさんの体の周りに黄色い光が纏い始めた。

「いいぞフェイト。次はなのはだ。慎重にユーノの指示に従ってくれ」

「うん」

プレシアさんにあてている手からピンク色の魔力が流れ込んでいるのが視覚化されている。
そして少しずつウィルスの気配が薄くなっていることをアルフは感じている。

「あと少しだ」

順調だ。
特にプレシアさんとフェイトの気と魔力の同化がすごい。
つい先ほどまで争っていたのが嘘のような信頼関係を築いている。

「なのは、もうウィルスは完全に消滅したよ」

プレシアさんの背中に手を当てていたアルフがプレシアさんの完治を告げる。

「よかったあ」

おもいっきり脱力するなのはの傍らで、フェイトは涙を流している。
「お・・・にい・・・ちゃん・・・・・・・みんな・・・ありがとう・・・・・・」

そして僕は右目を眼帯で隠し、プレシアさんの時間を動かす。
「あら・・・・・・・終わったのね。本当に一瞬だわ」
確かにプレシアさんにとっては一瞬のできごとだっただろう。
それにしてもすんなり受け入れられるあたり、すごい人だと思う。
と、それよりもそろそろ限界だな。

「悪い・・・・・・あとはよろしく」
そう言って公太はフェイトの元へ倒れこんだ。
「「お兄ちゃん！」」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

～能力紹介～

・クロノスの眼
時を止めることができる能力。
実際は止めるというより、自分たちのいる時間とを隔離すると言ったほうが近い。
強すぎると思われる能力だが、その分リスクも当然でかい。
今回の5分という時間はかなり長すぎる時間だ。

本来は秒単位で使う能力。
次回リスクの詳細が出ます。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

～あとがき～

けっこうすんなりプレシアさんとの仲を良くした感じですが、アニメでもフェイトの優しさに気づいたら優しいプレシアに戻ったっぽかったのでこんな感じにしました。

アニメの場合は気づくのが遅すぎたからバッドエンドでしたが、今回は公太が気付かせたのでハッピーエンドで終わりました。

公太の能力についてはこの場では何も言いませんが、法則は変わりませんのでたぶんほとんど名称が分かっちゃうと思います。

もうすぐ第一章は終わります。

謎の組織はＡ'ｓ編に続きます。

第十三話　これから

「お兄ちゃん大丈夫なの？」

「大丈夫。ちゃんと生きているわ」

プレシアの病気が治り、公太が倒れて丸一日。
あれからすぐに公太の体に異常がないか『時の庭園』で調べた。
さすが研究者なだけあってそういうものには困らない。
そして体に異常がないことが分かったプレシアはすぐに高町家に連絡して公太を移動させた。
桃子たちは詳しい話を聞く前に公太をベッドに寝かせて看病をした。
プレシアによると体に大きな異常こそないものの、植物状態と症状が似ているとのこと。
だが公太の強い生命力のおかげか、植物状態とも違う微妙な状態らしい。

「そうですか。時を止める力か・・・・・・」

「ええ。私の病気を治すために・・・・・考えてみれば時間を止めるなんて力、これだけのリスクがあって当然なのに・・・・・・」

「気にしないでください。プレシアさん」

いつの間にか目を覚ましていた公太がプレシアをフォローする。

「公太！」

「「お兄ちゃん！！」」

「あれはフェイトのためでもあるんです。兄としては当然の行動だ」

こういう事態になることは分かっていたけど、まさか丸三日寝込んでしまうとは。

『なのは、母さんたちに話す決心はついた？』

『・・・・・うん』

『大丈夫？』

『もともと私のわがままで先延ばしにしてたんだもん。ちゃんと話す』

『分かった』

今回はいろいろと物事が動きすぎた。

もう黙り続けるのにも限界がある。

なによりもプレシアさんとフェイトに関して母さんも聞きたいことが山ほどあるだろう。

プレシアさんもいるし、この先のことを考えるとちょうどいいのかもしれない。

「お母さん、お父さん」

「なあに？」

「なんだい、なのは」

「私、お母さんたちに話さなきゃいけないことがあるの」

なのはの真剣な目に気付いた二人は真剣な顔つきでなのはを見据える。

父さんたちからしたらなのはのこの言葉を長い間待っていたのだろう。

やっとなのはが自分から話す決心がついたのだ。

僕もきちんと話さなくては。

そしてなのははは話した。

魔法少女になったこと、フェイトともいろいろとあったことすべてを。

そしてプレシアさんも話した。

自分が今までフェイトにしてきたこと、それによってなのはに迷惑をかけてしまったことを。

「本当にごめんなさい。そして公太、ありがとう」

プレシアの告白にみな唖然としてはいるものの何も言わない。

なのはとフェイトがすべて自分たちで決め、公太が導いたのだから何も言わない。言う必要がないのだ。

「じゃあ今度は僕の話ですね」

「待って公太。その前に僕のこともきちんと話すよ」

そういえばユーノのこともなんだかんだで言ってなかったな。

「うわ、フェレットがしゃべった」

姉さんが驚くのも無理はないけど、驚くのはまだ早い。

「公太は気づいてたみたいだけど・・・・・・」

そう言って、ユーノは変身魔法を解く。

フェレットからなのはとフェイトと年がたいして変わらない男の子へと姿を変えた。

「え、えええ！」

「あ、だからお風呂の時とかいつもお兄ちゃんが連れてたんだね」

驚くなのはと違ってなぜか冷静な分析をするフェイト。

姉さんは驚きを通り越してか、開いた口がふさがらない状態だ。

「驚いたな。魔法とはここまでできるのか」

確かに質量なんかの法則を無視した現象だけど僕には驚いたようには見えないよ。

「僕の名前はユーノ・スクライアです。そもそもの発端は僕のせいなんです」

そしてユーノは話した。

なのはと出会い、魔法少女にしてジュエルシード集めを手伝ってもらったことを。

「みんな、ユーノをあまり責めないでやってほしい」

確かになのはの運命はユーノによって大きく変わったことになる。

でも僕は腑に落ちないことがある。
もしなのはが魔法少女にならなかったらフェイトたちはどうなっていた？
そもそも僕もどうなっていたのか分からない。
必然・・・・・にしては出来すぎている気がする。

「確かに公太の言う通りだな。最初にユーノ君たちを襲ったものたちについては何か分かっているのかい？」

さすが父さん。魔法のことになってもその洞察力は相変わらずだ。

「そこは僕も気になっているところです。最初はプレシアさんの仕業だと思っていました。でも・・・・・」

「私はやっていないわ。本当のことを言うとやるつもりではあったの。でもその前に何者かが攻撃したのよ」

「となると、そのジュエルシードを巡って争うことになるかもしれないな」

恭也さんの言う通りだ。
だが分からない。なぜそんな回りくどいことをするのか。管理局が出ることも予想できるはずだ。
これは例の組織が関係しているのか？
だがそれにしても今分かる情報とうまくかみ合わない。

なのはへの妙な手紙
謎の組織
ジュエルシードの謎の襲撃者

分からないことだらけだ。

「まあその話は本職の人に任せたらどうだ？時空管理局と言ったか」

「そう・・・ですね」

確かにその通りなんだけど・・・・・・

先日リンディさんとも話したけどなのはたちにも危害が及ぶ可能性は十分にある。

なのはの手紙の件がそれを表しているのではないか？

だが現状どうにもならないからな。

「とりあえずこの件は置いていてそろそろ僕のことについて話しましょう」

とりあえず僕が今まで見せた能力から話そうかな。

「まずプレシアさんの病気を治したときに使った眼は『クロノスの眼』。能力は時の停止。というよりそのものの対象を僕たちのいる時間と隔離すると言ったほうが近い」

だから止まっている対象に攻撃しても住んでいる時間が違うから干渉を受けない。

「そしてリスクについてですが、時間を止めると歪みができる。その歪みが世界に影響を与えないようにすべて僕が受け止めてしまいます」

「そんな・・・・・・そんなことをしたらいずれ体が滅んでしまうわ」

その通りだ。時空の歪みは生半可なものではない。時間のズレを起こさないために反動が自分に降りかかるのだから正直キツイ。
だから本当は1秒ぐらいしか止めてはいけない。それでも連続で使用すると負担が大きいのだが。
もちろん先日の5分は異常すぎだ。

「『クロノスの眼』についてはまあこのぐらいで・・・・・・」

次はユーノたちとの模擬戦で使った眼について。

「フェイトも見たことはなかったものだけど」

僕は眼帯を外してあの時の能力を使う。
そしてベッドの上から扉の前へ瞬間移動をする。

「すごい・・・・・・」

「これは『カオスの眼』と言います」

「カオスって言うからには単純な瞬間移動ではないわよね？」

さすがプレシアさん。
実はこれは瞬間移動とは違う。

「簡単に言うと空間の接続です。紙に点を2つ離して書いて、それを無理やり点同士をくっつけるイメージでかまいません」

「それでリスクは？」

「基本的に症状は『クロノスの眼』と変わりません。ただこれも連続使用は避けたい力です」

最高で3回が限度かな。
一応僕と接触していれば何人でも移動はできるけど疲れる。
ちなみに移動できる範囲は眼が見える範囲。
ただし遠くに見える山の中とかは無理。
鮮明に山の中が見えていれば可能だけど、距離が離れているとそれだけ反動も大きい。

「こんな感じですね。まあ回数が限られてますけどもともと補助で使う能力ですからあまり問題はありません。僕の力は眼だけではありませんから」

「そういえば未来視の力はなんなんだ?」

あ～・・・・・恭也さんが気になるのも分かるけど・・・・・・・

「実はその能力だけはよくわかんなくて・・・・・・」

研究所でもそれなりに調べてたみたいだけど

「『クロノスの眼』も『カオスの眼』も基本『視る』ことで発動します。でもこの能力だけは視ているものが現在でもないし、お告げは視てすらいない」

「名称も分からないの?」

確かに名称が分かれば能力も自然と分かりそうだけど

「それが分からなくて・・・・・・そもそも他の能力の名称が分かった理由は・・・・・・・・・」

ピンポーン

「誰かしら」

話を中断するようにチャイムが。
このタイミングで来る人なんて一組しかいない。

「お邪魔します」

やっぱり・・・・・・

「リンディさんとクロノ君が公太君に用事があるって」

「ジュエルシードが残り一つとなったから報告とお願いに来たんだ」

２人によるとジュエルシードが２０個集まったが残りの一つがどうしても見つからないらしい。
だから僕に探してくれるように依頼にきたらしい。
話の途中なんだけど・・・・・・でもちょうどいいのかもしれない。
今後のことについて話し合う必要があるからな。

「分かりました・・・・・・・・では・・・・」

ジュエルシードの気配を探る・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・やっぱりないな。
そもそも今見つかるならもうとっくに見つかっててもいいはずだからな。

「ん？・・・・・・馬鹿な」

「どうしたの公太さん？」

全く存在を感じなかったジュエルシードが急に現れた。
そういえば今までも感じられる場所にあったはずのジュエルシード
が感じられていなかったりしたことがあった。
これもやつらの仕業なのだろうか。

「とにかく見つけましたから行ってきます」

「私たちも行きます」

「いや、リンディさんたちはプレシアさんたちに今あった話を聞い
ててください」

「話？」

「すべて話してもいいのかしら？」

「はい。今話したことはすべて話してください」

いずれは協力を得るために時空管理局には言わなければいけないの
だ。
もうフェイトたちの問題がなくなった今、管理局に隠し事をしてお
く必要もない。
僕の能力も明かしたところで何も問題はないだろう。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・

「またこの山か」

リンディさんが初めて僕にジュエルシードを探させたときに来た山だ。

「また発動前のジュエルシードが。しかもここは前と全く同じ場所だ」

なんだこの気配は・・・・・・！

「誰だ！」

目の前にある木の陰に気配を押し殺して誰かいる。
ここまで近づくまで気づかないとは。

「まさか僕の気配に気づくほどの探知能力を持っているとは」

あの時の白マスク！

「お前が僕たちにジュエルシードを集めさせているのか？」

「お前は早く目覚めるべきだ。自分の本当の存在に」

白マスクはそれだけ言って前回と同じく急に姿を消した。
あの時は僕が『ロスト』状態だったから気配が消えても不思議に思わなかったけど、『ロスト』でない状態でも気配が突然消えた。
ありえない。これは・・・・・

「・・・・・・・・・・・・ということがありました」

現在は『時の庭園』で今後について会議中。
この場にいるのは父さん、恭也さん、なのは、フェイト、プレシアさん、リンディさん、クロノそして僕だ。
母さんはそういうのは男の人に任せるわと言って家でご馳走を作ってもらっている。姉さんも一緒に・・・・・・・・ちゃんとご馳走になるのか？
そして今は先ほど最後のジュエルシードを見つけたときに出会った白マスクの男について話している。
ちなみにリンディさんたちは僕についての話を聞いて、能力の異常さに唖然としていたらしい。
リスクのことを考えても僕の体術と合わせることを考えると、今まで会ってきた中で最も敵にしたくない人物だと思ったらしい。

「あの男はどこか僕に似ている」

正確に言うと昔の僕にだ。

「私は昔の公太さんを知らないけど、どこか雰囲気が似てる気がするわ」

「気づいたのだけど、公太の能力は時間や空間を操るのよね？『未来視』も結局は時間を操っているわけだし。その白マスクの少年もそのどちらかを操っているんじゃないかしら」

確かにそうなら気配が急に消えたのもうなずける。

でも・・・

「それはありえない」

「なんで?お兄ちゃん」

「その能力を使っている僕が言うのもなんだけど、空間や時間を操る能力は普通の人では絶対に扱えない。もし扱えても一瞬にして体が崩壊する。そももしそうならやつは僕よりも力が強いことになります。僕の能力は視えているもの限定だけどやつはそうではないみたいですから」

可能性としてはやつが神代一族ってことだけど・・・・・・
やつは眼を使わなかったし、そもそも僕自身神代一族について全然知らないから何とも言えない。

「いやいや奴は同族だぞ」

「誰!?」

この場にいる者以外の声がどこからかした。
落ち着いた中年の男性の声だ。

「・・・・・さっき話そうとして中断してしまったのでちょうどいいですね。実物を見たほうが認識しやすいですし」

「どういうこと?」

「まあ見ててください」

眼帯を外して大きく息を吸う。

『我、神代公太が契約の元、汝を召喚せん。時の神『クロノス』よ、我に力を与えよ』

僕が呪文を唱え終わるとともに、右眼から魔法陣らしきもの（実際は魔法陣ではないがパっと見変わらない）が現れて、そこからシルクハットをかぶり、マフラーをしたチョイ髭の紳士らしき人間（神）が召喚された。

「坊やよ。あの者は坊やと同じ存在だよ」

「今更たいていのことに驚くつもりはないけど、この方は・・・・・・・・・・」

「神だ」

「神です」

「これが神の名称が分かる方法ね」

「そうです。『未来視』だけはなぜか顕現できなくて。そもそも能力を使うには神と契約をしないといけないんです。だけど『未来視』だけはどうやら生まれつき持っていたみたいで・・・」

「興味深い話ね」

時の神『クロノス』神話ではいろいろといい話を聞かないが、気さくでいい神だ。

少しおかしなところもあるが、少なくとも僕の知る神の中ではまと

もな部類に入る。
ただし神としての威厳は全く感じられない。

「ほわ～私神様を初めてみたよ」

「なのは、ふつう神様を見られる人はいないよ」

「それで本当なのか？あの白マスクが神代一族だってこと」

「だからそうだと言っているだろう。眼はコンタクトでも入れているのだろうな」

「なら能力はなんだ？」

「さあな。少なくとも私やカオスではないぞ。私たちは二人といないからな」

「プレシアさん」

「私が調べてみるわ」

とりあえず白マスクの件についてはこれ以上何も分からないからあとはプレシアさんに任せよう。

「それで今後のことを話す前に今の状況をまとめてみましょう」

なのはの謎の手紙
謎の組織
ジュエルシードの謎の襲撃者
白マスクの少年

「謎の組織と白マスクが繋がっていて、白マスクとジュエルシードが繋がっていた。ということは謎の組織とジュエルシードも繋がっていることになります」

「だがやつらはジュエルシードとやらを散らばらせるだけ散らばらせて集めようとする気配すらなかった」

僕は奴らの組織のメンバーらしきものに何回か会ったが、いずれも興味は僕にしか向けられておらず、ジュエルシードの話は一度たりともでなかった。

「その組織の規模は実際のところどれくらいなんだ？」

「分かりません。ですが実はこんな記録が・・・・・・」

そう言ってリンディさんが出した映像には一人の男の姿が。
一瞬現れただけですぐに白マスクの少年と消えてしまった。

「この男はＡ級指名手配犯のジャック・ガイヤ・ギリミアという」

距離があって映像がぼやけているからよく分からないが、屈強な男のように見える。
この人もかなり強そうだな。
異能の力を抜きにしたら恭也さんと同じかそれ以上だ。

「背後が本当に大きいのだとしたらそれぞれ役割があるんじゃないかしら。それも適材適所で犯罪者ばかりの集団だとしたらすごく厄介よ」

その可能性は考えていた。
だが、もしそうならこちらも少ない人数でそれぞれ役割分担をする必要がある。

「まず戦力補充が必要です。こう言ってはなんですが、クロノ以外の武装局員は使えません」

「はっきり言うなあ」

「事実だからしょうがない。そしてなのはとフェイトもこのままでは戦力にならない」

「う～・・・・・・」

「・・・・・・・・」

分かってはいたことだけど実際に言われると落ち込む2人。

「でもまだ十分に素質がある。魔法経験の問題だから修行次第ですぐに追いつけるよ」

「「うん！」」

公太の励ましにぱあっと顔を喜ばせる2人。
なのはは前からよく表情がコロコロ変わる子だったけど、フェイトもだんだんなのはに似てきたな。

「それと・・・・・・」

公太は士郎と恭也に顔を向ける。

2人は公太が何を言いたいのか分かっているみたいだ。

「だが俺は右膝に怪我をしている。それに相手が多少浮いているぐらいなら大丈夫だが、かなり高いとなるとどうしようもない」

「私も現役の頃よりは腕が落ちてるぞ」

いや、それでも十分強いって。

「恭也さんの足はどの程度なんですか？」

「普通に走る分には問題ないが、御神流の技がいくつか使えない。特に『神速』はもうできないだろう」

『神速』・・・・・常人のスピードをはるかに超えた眼に見えないスピードで移動する移動術。
僕の眼と同じで何度も使えない強力な技だ。

「・・・確かに『神速』が使えないのはキツイですね」

でも『神速』なしでも十分強いと思うけどね。

「足のほうはなんとか考えてみます」

「公太なら本当になんとかしそうだから不思議だ」

それ以前に公太が御神流の技を知っていること自体には何も疑問に思っていないところはどうなのだろうか。

「美由希も戦力に入れていいと思うぞ。今では俺より強いだろうし

な」

美由希さんもそれなりに強いとは思っていたけどそこまでとは。
でももう少し戦力が欲しいところだ。

「戦力の件はこちらでも探してみます。それでジュエルシードの件はどうしますか？」

「本部のほうには送れないんですか？」

「大きな力だから転送ができないの。それに送り届けるにしても往復で一週間ほどかかるから。今この星を一週間もほっとくわけにはいかないわ」

「ということはどう保管をするかってことね」

「なら・・・・・・・・・クロノス」

「うむ」

リンディさんが取り出して宙に浮かせたジュエルシードにクロノスは手をかざした。
するとジュエルシードが一か所に集まって、バリアによって守られる。

「これで大丈夫でしょう」

「これは・・・・・・？」

「このバリアはこの時間と隔離しています。たいていの人は目視す

らできません」

ここにいる人たちには特別に見えるようにしているが、バリア自体違う時間に幽閉しているから普通は見えない。
ちなみに僕が時間を止めるのとクロノスが時間を止めるのには能力に差がありすぎる。
僕ではジュエルシードほどの大きな力をせいぜいほんの数秒隔離するだけでここまで完璧にはおそらく一生できないだろう。

「まあカオスの力を加えたら時間と空間を完全に隔離することになるから神ですら解けなくなるだろうが」

「カオスは無理だな」

「どういうこと？」

「いじわるなんだよ」

カオスと会ったのは契約した時を含めて二回だけ。
そもそも契約の時ですらいろいろとあったからなあ。

「あれは坊やを認めていないだけだよ。まあ俗にいうツンデレでもあるがな」

「とても興味深いわ。神の存在だけでもすごいのにこの力、この神秘！」

プレシアさんってこんなキャラ・・・？
目がキラキラと輝いている。研究者の性なのだろうか。

「この神には実体がないみたいだけど力はどうやって使ってるの？」

「私たちは坊やの力を通して使っている。だから坊や以上のことはできない。ただし坊やが実際に使えない力でも潜在能力が高ければ私がそれを引き出せるのだ。でなければこんな芸当はできんよ」

おい、それ初耳だぞ。

「ということは公太にもこれだけの力が眠っているということね？」

「そうだ。まあこれからも完全に引き出すことは難しいだろうがな」

カオスが意地悪なのだとしたら、クロノスは性格が少々悪い。

要するにどっちもどっちってことなんだけど。

「まあジュエルシードの件はこれでいいとして一旦お開きにしましょん？」

とりあえず戦力は当面なのはとフェイトの強化、恭也さんの足の怪我の治し方でやっていくしかない。

ただ、ほとんどリンディさん任せになってしまうな。

その他の戦力補充、敵（組織）の詳細、簡単なことではない。完全にこちらが後手に回ってしまっている。

「そうですね。丸三日寝たからなのはとフェイトの修行もきちんとしたいし」

それぞれの役割を果たすためにみな転移の準備をする。

「そうそう坊やよ。一つ忠告だ」

「？」

クロノスの言葉にみな転移の準備の手を止める。
みんな神であるからかクロノスの一挙一動を見逃さない。

「坊やは先ほどまでほとんど仮死状態であった。本来ならまだ目覚められる状態ではなかったのだ」

どういうことだ？

「要するに本来なら少なくとも一週間は眠っていたはずだということだ。それなのにたった三日で目覚めた・・・・・・なぜだと思う？」

僕の力が上がったということか。
研究所にいたころはこれ以上力が強くなれなかったのに、なぜ急に・・・・・・？

「それで忠告って？」

力が強くなったことが忠告ではないだろう。
クロノスが深刻な顔をすることってそうないことだ。

「坊やはなぜ力が強くなったと思う？」

力が強くなった理由・・・・・・・・おそらくだがなのはとフェイトに会ってからじゃないだろうか。
僕自身眼の力はそれほど使ってはいない。
肉体的とかではなく僕自身が強くなるということは眼の力が上がっ

ているということになる。

「確かに嬢ちゃんたちに会ってから強くなったということは間違っていない。だがなぜ嬢ちゃんたちに会ってから強くなったか分かるか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・さあ？」

「それが分からないと悪しきほうに力が上がってしまうぞ。坊やの本質は坊やが理解している力ではないからな」

僕が理解している力ではない・・・？

「それってどういう・・・・・・・・・」

「ではな。私は久々に力を使ったから少し休む」

ポンッという間抜けな音を立ててクロノスは消えてしまった。

「おいっ・・・・・・」

ホントに性格の悪い神だ。

神というより悪魔に近いぞ。まあカオスほどではないけど。

「（ますます公太に興味が沸いてきたわ。それにまだ何か能力があるみたいだし。絶対にすべての神を解き明かして見せるわ）」

なかなか勘の鋭い科学者さんの意気込みは置いといて、フェイトは何か考え事をしているようだ。

「どうしたの？」

「あ、お兄ちゃん。お母さんが明日会わせたい人がいるって」

・・・・・また好きな人とか思ってんじゃないよなあ。

まあプレシアさんの話を聞いていたらなんとなく分かることだけど。

「気になるのは分かるけど修行にはちゃんと集中してね」

「・・・・・・うん」

なんかここんところシリアスな雰囲気ばかりだな。

でも悪いことばかりではない。

最善に至るために皆前に進んでいるのだ。

僕もそろそろ・・・・・・・・

第十三話　これから（後書き）

やっと第一章終了です。

なんか謎だらけですいません。
ところどころ分かりやすいようにまとめていこうと思っています。

ちなみにクロノスは農耕の神とも言われていますが、ここでは時の神としてしか扱いません。
そしてこのキャラはある漫画のキャラクターをイメージしています。
誰かわかるかな？

次回で管理局がプレシアに対してどういう処置を施したのか説明します。

人物紹介

～人物紹介～

＞神代公太＜
とある研究所から逃げ出してきた少年。
見た目は子供頭脳はなんちゃらの体で、だいたい１６才である。
見た目はクロノとさほど変わらない。
常に冷静沈着で自分のことよりなのはとフェイトのことを第一に考えている。
まわりから見たら大人びて見られなくもないが、時には子供相応の迷いを見せることもある。
月に三日間、「ロスト」と呼ばれる弱体化が起こる。
その間、あらゆる超人的な能力が失われて一般の子供と変わらなくなってしまう。
原因は強力な能力のせいだと言われているが・・・・・
ちなみに研究所は地球人が行ったものではないのであしからず。
以下能力詳細。

・クロノスの眼
時を止める能力。
実際は対象を公太のいる時間と隔離している。
発動は一秒単位で行うもの。
長く使ったり多く使うと意識不明の重体に。

・カオスの眼
点と点をくっつけるようにして瞬間移動をする。
眼の見える範囲ならどこへでも移動できるが、ぼやけるほど遠くま

では移動できない。
リスクはクロノスの眼と同じ。

・〜の眼
神の名称は不明。
未来を見る能力。
人生の分岐点（ターニングポイント）を見ることができる。
しかし、必ず分岐点に見られるわけでもなくコントロールができない。
夢の中でお告げが聞こえるのもこの眼のせいか？

＞高町なのは＜
原作との違いは、軽い砲撃ならほぼノーモーションで放てる。
公太のおかげで魔力のコントロールがうまい。
公太を恭也以上にお兄ちゃんとして慕っている・・・・・・ように見える。

＞フェイト・テスタロッサ＜
原作との違いは魔力生成がすごい。
公太をなのは同様お兄ちゃんと慕っている。
それ以外は今のところない。

＞プレシア・テスタロッサ＜
原作との違いは今のところ性格のみ。
フェイトをアリシアと同等に愛情を注いでいる。

＞クロノ・ハラオウン＜
原作との違いはあまり目立たないことぐらい。
エイミィとの仲をあまり描けていないのが残念。

＞ユーノ・スクライア＜
原作との違いは補助系がすごすぎると思われる点。
しかしあまり目立たない。
今のところクロノと同等の扱い。

～オリキャラ～

・宮井暁子
活発な女の子。
なのはとフェイトにいろいろと吹き込んで公太とのやり取りを楽しんでいる節がある。

・小鳥遊ミリア
立場的にはすずかと変わらない気がする。
暁子の暴走を止める役。
暁子とミリアの関係はアリサとすずかの関係に似ているが、はたして・・・・・・

・水城瑞希
なのはたちの担任。
先生とは思えない頼りなさだが、その性格ゆえか卒業後の生徒にも人気がある。

今のところ特に目立った立ち回りはない。

・白マスクの少年
名前も能力も不明。
公太と同じ神代一族で眼になんらかしらの能力を持っているようで、
公太以上の能力の持ち主の可能性がある。
公太のことを何か知っているようだが・・・・・・

クロノスについてはカオスと一緒に次回紹介します。

人物紹介（後書き）

第二章の投稿は若干遅れると思います。

第一話　闇の書

汝に新たな試練あり
汝の手に一人の少女の運命あり
闇の力に蝕まれし少女に足はない
光に紛れた闇、闇に紛れた光
汝の逸れし道もさらに分かれる

クロノスを顕現した会議から一週間。
なのはとフェイトの修行も順調に進み、管理局のほうでもそれなりに力のある局員を何名か地球に送る手はずがついたようだ。
ユーノに頼んだ恭也さんの足の怪我を治す方法もある程度目処がついた。
ただ敵の情報については全くと言っていいほど進展がない。
管理局という組織をもってしても分らないというのは少し妙だが。
ちなみにいろいろあって先送りにしていたプレシアさんの処遇についてだけど話し合った結果、今回の事件に協力をするということで話がついた。
もともとジュエルシードを使って何かをしたわけでもないし、プロ

ジェクトF．A．T．Eについても今の状況のフェイトを見て罪に問うのはどうかという話になって黙認してくれることとなった。

「今の2人ならたいていの魔導師相手に遅れをとらないと思うよ」

なのはの砲撃も撃った後の硬直時間の軽減と連続使用が少ないながらも可能にしたし、フェイトもスピードのキレがかなり良くなった。なによりも二人のコンビネーションがすごい。

二人ともコンビネーションの練習はしなかったんだけど、二人が個々に修行している間にお互いの動きを見てなんとなく合わせられるようになったみたいだ。

コンビネーションをよくするためには長い練習が必要だけど稀に深く信頼し合っているとなぜかできるようになることがある。

「じゃあ簡単な模擬戦をしようか」

今回僕は気配探知を全力で使う。

「なのは、私たちが強くなったところをお兄ちゃんに見せよう」

「うん。頑張ろうねフェイトちゃん」

さっそくなのはが砲撃の準備をする。

威力をかなり落とすことになるが、ほぼノーモーションで放つことができる。

ノーモーションで放っても所詮は直線攻撃。公太が避けられない攻撃ではない。

と、公太が避けたところに高速で移動してきたフェイトが後ろから切りかかる。

もちろんいかに高速で移動してきても公太の気配探知からは逃れら

れない。
公太はフェイトが振り下ろしたバルディッシュを掴んでなのはの方へ投げ飛ばす。

「きゃあっ」

ノーモーションから放った軽い砲撃とはいえわずかな硬直は免れない。
公太がフェイトを投げ飛ばすまでわずか一秒。なのはは飛んでくるフェイトから避けられない。

「ブースト」

フェイトは魔法で吹っ飛んでいる方向と反対の方向に魔力をブースト代わりにして再び公太に突撃する。
なのはも硬直が解けて再び砲撃の準備をする。しかも今度は溜めに入る。

「そんな単調な攻撃じゃいつまでたっても当てられないよ」

その公太の言葉にフェイトはにやりと笑い公太に突撃する。
この時公太はフェイトのたくらみに気づいた、が対処できなかった。

「これは・・・・・」

公太の周りにはたくさんのフェイトが。公太がフェイトに教えたのは魔力を使って推力を増す方法。
高速で移動しているため残像が現れたのだ。しかもすべての残像を行き来しているため公太の気配探知は役にたたない。どれも本物だからだ。

すべてのフェイトが一斉に公太に突進する。
だがこの程度では公太にかすり傷一つつけられない。
しかし気づいたらなのはの魔力が大きく膨れ上がっていた。
これは初めてなのはと模擬戦をした時に使った特大砲撃。
あまりにも大きすぎる魔力砲なため避けることが困難な攻撃だ。
ちなみに模擬戦をするときはユーノとアルフが二人がかりで防御結界を張っているから大丈夫だ・・・・・・・・・たぶん。

「フェイトちゃん！」

なのはの合図にフェイトはコクリとうなずいてさらに多くのフェイトが公太の視界を潰すように襲い掛かる。
そして同時になのはがフェイトごと特大砲撃を放った。

「なるほど。やはり二人は相性がいいな」

多数のフェイトのうち一つが消える。
フェイトのスピードならなのはの砲撃の範囲から簡単に逃れることができる。
さすがの公太もフェイトほどのスピードは出せないため確実に避けられない状態だ。

「あの時とは状況が違うとはいえ二度も同じ技にかかるとは」

さすがに今回は眼の力は使わない。
となると

「受けて立つしかないな」

最近倒れて弱っているところしか見せていない気がするからここいらで少し頑張らないと。

公太は右手に大きく気を込めてなのはの砲撃に一撃を加える。
公太のパンチとなのはの砲撃が当たった瞬間、なのはの砲撃が爆ぜた。

「一般の魔導師と比べると確かに威力は申し分ないけど僕にはまだまだ届かないな」

「う～悔しい～」

「でもなのはの一撃必殺の砲撃を2人でちゃんと僕に当てることができた。強くなったね」

なのはの砲撃を食らって無事な魔導師はおそらくいないだろう。
十分合格点だ。

公太の言葉に喜びを隠せない二人。
いつも思うがこの2人の笑顔は本当に心が安らぐ。
フェイトもプレシアさんとの件が済んでからより一層生き生きとしている気がする。
プレシアさんと言えば

「そういえばフェイト。そろそろプレシアさんのところに行ったほうがいいんじゃない？」

「あ、そうだね。それとお母さんがなのはとお兄ちゃんも呼んできなさいって」

・・・・・・・・・僕はともかくなのはも呼ぶのか。
フェイトにもそうだが、僕の考えが正しかったら小学三年生には少々厳しいことかもしれないからな。

「じゃあ転移するね」

そう言ってフェイトは微妙に公太のほうに寄り添いながら転移する。
それに気づいたなのはは、積極的になったフェイトは厄介だと密かに思うのであった。

もう何度目か分からない『時の庭園』に着いた三人はプレシアさんが待つ研究室に。
いつもプレシアさんが座っている部屋のさらに奥にある部屋のことらしい。
奥の部屋に2人の気配がある。
一人はプレシアさんだが、もう一人は分からない。
どこかアルフの気と似ている気がする。

「失礼します」

扉を開けて最初に部屋に入ったフェイトが入り口で固まる。
なのはも入り口で固まる。
僕・・・・・・・・・はさすがに固まらないけど。

「・・・・・・・・・・・・・」

目の前に移ったのはカプセルの中で衣服を一切身に着けていないフェイト・・・・・・によく似た人物。
その傍らにはプレシアさんと猫耳を生やした清楚そうな女性。
フェイトとなのははカプセルの中の女の子を見て動かない。

体はきれいだが生きてはいない。よくここまで完璧に遺体を保存したものだ。

「驚いたでしょう。でも公太は分かっていたみたいね」

2人からしたら驚いたなんてレベルではないだろう。それでもプレシアさんの言葉で二人は我に返ったようにプレシアさんのほうを向く。

「もう分かっているかもしれないけどこの子はアリシアよ。フェイトのお姉さんね。なのはも呼んだのは、フェイトに関することをきちんと知ってほしいからよ」

プレシアさんの顔はどこかすっきりしている。フェイトも同様だ。

「今回はアリシアと、フェイトも知っているリニスを紹介しようと思ってみんなを呼んだのよ」

「お久しぶりです、フェイト。それと初めまして、なのはさん、公太さん」

見た目通り落ち着いた声。この人もフェイトと同じ人造魔導師だろう。確かアリシアと一緒にリニスという猫が一緒に亡くなったと記録にあった。

もともとリニスは使い魔ではなくただの猫だったみたいだけど、プレシアさんがフェイトの教育係として使い魔にしたらしい。

「リニス！」

フェイトはうっすらと涙を浮かべてリニスに勢いよく抱きつく。

「大きくなりましたねフェイト」

「リニス・・・・・・・・・会いたかった」

どうやらプレシアさんはリニスを消さず、待機状態にしていたらしい。

リンカーコアの汚染で使い魔の継続すらできなかったのだろう。

それでも消さずに待機状態にしていたのには、もともとかわいがっていたペットの人造魔導師（元が猫だからこれで正しいか分からないが）だから消すことができなかったのだろう。

「そういえば公太。例の眼の話だけど一つそれらしいのを見つけたの」

唐突だな。この空気に慣れないのだろうか。

「運命の女神の一人、スクルドの可能性はないかしら？」

「ノルンのスクルドですか・・・・・・・・・その可能性は考えましたがあれは女神ですし・・・・・・それにスクルドはワルキューレだという説もあります」

「やっぱりそうよね」

知ってて言ったのか。よほどあの空気から逃げたかったと見える。

アリシアとリニスを見せる時点で覚悟はしていたはずなのに。

「それでアリシアのことはどうするんですか？」

「私はあきらめたわけじゃないわよ。でもだからといってもうフェイトみたいなことはもうしない。正攻法で科学者として頑張ることにするわ」

人を生き返らすなんてことは不可能だ。それは科学者であるプレシアさんなら分かり切っていることのはずだ。
だけど今更アリシアの遺体を焼くことはできないだろうから、建前としてそう言うのは仕方のないことなのかもしれない。
リニスを見ると同じことを考えていたようで複雑そうな顔をしている。
また話題を変えてやるか。

「そういえば今日久しぶりにお告げがでましたよ」

「・・・・・フェイトの話を聞く限りでは、お告げが出るたびになにか起こるようだけど」

唐突に嫌そうな顔をするプレシアに公太はうなずく。

「確かに。でも実は一つだけお告げ通りにならなかったことがあったんですよ」

これは事態が急変したからだと思うけど、それだけではないだろう。

「なのはとフェイトが戦わなかったこと」

「あ・・・」

あのまま中途半端な気持ちが続いていたらいずれ戦っていたかもしれない。

でも僕は思う。
もしぶつかり合っても最終的には仲良くなっていたと。
ま、ぶつからなかった理由の一つとしてプレシアさんが素直にフェイトと仲直りしたこともあるんだけど。

「ま、まあそうね」

本人も分かっていたみたいだ。

「ゴホン。それでお告げの内容は？」

「汝に新たな試練あり
汝の手に一人の少女の運命あり
闇の力に蝕まれし少女に足はない
光に紛れた闇、闇に紛れた光
汝の逸れし道もさらに分かれる」

プレシアさんの顔が苦虫をかみつぶしたような顔をする。
まあそうだろう。
普通に考えたら「新たな試練あり」とあるのだからまた事件が起きるということになる。

「足がないというのは何かしら」

「そのままの意味か居場所がないとか、いろいろととれますね」

でもなのはとフェイトはどうやら違うことを考えていたみたいだ。

「一人の少女・・・・・・・・・」

ああ、そこは僕もちょっと疑問に思った。

おそらくなのはとフェイトのことではない新たな女の子のことだと思う。

「またライバルが増えるのかな（ボソボソ）」

「お兄ちゃん学校でもモテるから（ボソボソ）」

ごめん。聞こえてる。

心配事はそっちか。

「安心なさいフェイト。何があっても公太が守ってくれるわ。そうよね公太」

ずいぶんと信用されてるなあ。なのはとフェイトもキラキラした目で見ないで。君たちにも強くなってもらわなくちゃ困るんだから。

でも、

「もちろんですよ」

この子たちを守ると決めたんだから手は抜かない。

・・

「いやあ今日も神代君のお弁当はおいしそうだねえ」

恒例の昼食タイム。いつも通りの光景だが、今回は少し違うところがある。

「いや、実はこのお弁当はなのはとフェイトが作ったものなんだ」

なぜか朝起きたときに二人がキッチンで母さんの指導を受けていたのだ。

いろいろと騒ぎ声が絶えなかったから苦労してたみたいだけど。

「まあまあ、仲がいいことで」

茶化す宮井さんの言葉でもじもじさせる2人。にしてもどんな心境の変化だ?

「お兄ちゃん食べてみて」

とりあえず卵焼きに箸をつける。見た目はお世辞にもきれいとは言えないが・・・・・・・・・おいしい。

砂糖の量なんかが絶妙だ。さすが母さんの指導と言えるが、他のおかずもかなりおいしい。

「どう?」

「おいしいよ。また頼んでもいいかな?」

「うん!やったねフェイトちゃん」

「やったねなのは」

だけど小学校でお弁当を作る子供なんてあまりいないんじゃないかな。
しかも兄とはいえこんなに一生懸命作ってくれるなんて。
まあうれしい限りではあるけど、夜修行をして朝早く起きるなんてけっこう体力的にキツイ気がする。

「じゃあ明日は私が神代君のために作ってこようかな」

「だ、だめだよ。お兄ちゃんのお弁当は私たちが作るんだから」

「その前に暁子ちゃんはお料理できないでしょ？」

「あ、そうだった」

だろうな。宮井さんの昼食はいつもコンビニ弁当だから。ちなみに母親は仕事で作れないらしい。

「そういえば昨日、図書館でお友達ができたの」

「お友達？」

「うん。車いすに乗っている女の子なんだけどね、たまたまお話しする機会があってそのまま意気投合したの」

車いす・・・・・・

まさか、ね。

「その子、今度会わせてくれる？」

唐突だとは思いつつもすずかにお願いをする。

「今日一緒に図書館に行く？もしかしたら会えるかもしれないよ」

すずかは特に疑問を持たずに了承してくれた。

「ＯＫ。じゃあ放課後ね」

「わ、私も行くわよ」

置いて行かれると思っていたのか、アリサが慌てたように言う。別に置いていかないよ。

「女の子・・・・・・」

なのはとフェイトが何やら呟いている。

どこかデジャブを感じるんだけど。

「お兄ちゃん」

「何？フェイト」

「・・・・・・・・・なんでもない」

なんなんだ、いったい。

「あ、２人とも・・・・・・さてはお兄ちゃんを取られるんじゃないかと心配してるな？」

「そ、そんなことないよ？」

「う、うん。そんなことない」

「いくら神代君でもそんなことにはならないと思うよ」

いくら僕でもって・・・・・・・・・宮井さんは僕のことをどう思っているんだ？

「まあとにかく放課後な？」

「「うん・・・・・・・・・」」

「これは面白くなってきた」

「あんた、完全に他人事ね」

車いすの女の子・・・・・・

足がないというのに合うけど、闇に蝕まれているというのはどういうことなのだろうか？

ものすごい人格が破綻しているとか犯罪を犯しているというようにも取れるけど、そんなことではないだろうし・・・・・・

～放課後～

「私図書館にはあまり行かないから久しぶりだよ」

「私はここに来るの初めて。大きい・・・・・・」

確かにかなり大きいな。ここでなら探している本は絶対に見つかる

だろうって大きさだ。もちろん地球限定だが。

「今日もはやてちゃんくるかなあ」

「はやてちゃんって言うの？」

「うん。八神はやてちゃんって言うの。関西弁を話す、すごくおもしろい子だよ」

明るい子なんだな。まあ明るくても闇には染まる。世の中には心を偽る人が大勢いるからな。

「さっさと入りましょう」

図書館の中は夕方なだけあってそれなりに人がいる。この広い中から人を捜すのは厳しいんじゃないかな。

ということで手分けして探すことに。

といっても僕たちはその子の顔を知らないんだけど。

「ん？」

目の前に車いすに座りながら一生懸命腕を伸ばして高いところにある本を取ろうとしているが、全く届く気配がない。

あの姿勢では無理があるだろう。

「はい」

公太は車いすの子が取ろうとしていた本を取って、その子に手渡す。

「ありがとう」

ずいぶんとなまりのある話し方だ。関西弁かな。

「君、もしかして八神はやて・・・・・・さん？」

「確かにうちは八神はやてやけど・・・」

いきなり見つけた。みんなと別れてからわずか１０秒だぞ。

そうか、この子が・・・・・・

「僕はすずかの友達の神代公太って言います」

「ああ、すずかちゃんのゆうてた神代君な！」

僕のことを話してたのか。にしてもアイドルを見つけたような眼差しをこちらに向けてくるんだけど。

「すずかちゃんゆうてたよ。とっても不思議だけどすごく優しい男の子がいるって」

・・・・・・なんか気恥ずかしいな。そんな風に思われていたのは光栄だけど、過大評価な気もするよ。

「すずかちゃんのゆう通りや。だって見ず知らずの人が困っているところをすかさず助けに来てくれたもん」

当然のことをしたまでなんだけど・・・・・・

「その当然ができるっちゅうのがすごいんよ」

そんなもんかなあ。僕は一般の生活をし始めてからまだ間もないからその辺のことはよく分からないや。

「とりあえずよろしくね。すずかたちも来てるから案内するよ」

そう言って公太は手を差し出す。

「私のことははやてでいいよ」

はやてもそれに合わせて手を差し出したのだが、

「っ！」

はやてと手をつないだ瞬間、ものすごいエネルギーを感じた。
このエネルギーは闇そのものだ。
なぜ触れるまで気づかなかったんだ？

「どうしたん？」

「い、いやなんでもないよ。思ったよりはやての手が冷たかったから」

「はは、私冷え性なんよ」

手を放すとエネルギーは全く感じられなくなった。
僕が触らないと感じられないなんて。しかもあれほどの闇のエネルギーを。

「じゃあ行こうか」

はやての車いすを押して、あらかじめ決めていた集合場所へと向かう。

「でもすずかちゃんのゆうとおり、公太君って不思議な感じやねえ」

「どのへんが？」

「小学生なのに眼帯ってのも雰囲気ばっちしやけど、それ以前にものすごい大人って感じがするんよ」

「それ、いつもみんなに言われてるよ。でもすずかも含めて僕の周りはみんな精神年齢が高い小学生ばかりだからね」

「そうなんか？確かにすずかちゃんはすごい落ち着いた人やったけど」

あれは小学生ができる落ち着き方じゃないと思う。アリサも落ち着いては・・・・・いないけどものすごく（頭が）キレるし、なのはとフェイトも小学生らしい部分はあるけどそれとは別にレベルが高い。

中途半端なんだよなあ。はやてもその部類に入るっぽいし。

「お、なのはたちも集まってるな」

集合場所は図書館の中央にあるフリースペースだ。広いため机といすもそれなりにあるのだが、なのはたちはいい意味で目立つからそんなに探すのに時間はかからない。そもそも僕が気配を手繰れば簡単に見つかるのだが。

「あ、はやてちゃん」

先にこちらに気づいたすずかが小さい声ではやての名を呼ぶ。図書館の中で不意に知人を見つけても大きい声を出さないあたりすごいと思う。

「ここで自己紹介をするのも周りに迷惑がかかるから一旦外に出ようか」

僕の提案に誰も異議を唱えず、すみやかに外に向かう。
そしていつもの公園に向かい自己紹介を始める。

「私は高町なのはです」

「私はフェイト・テスタロッサです」

「私はアリサ・バニングス。アリサでいいわ」

「みんなよろしく。私は八神はやて言います」

すでに自己紹介済みの公太とすずかを除くみんながそれぞれ自己紹介をする。
なのははいつもと同じように笑顔で、フェイトは人見知りだからかおそるおそるといった感じで、アリサはいつもと同じ強気な調子でそれぞれ自己紹介をした。

「公太君どうしたん？さっきから難しい顔して」

先ほどの一件で公太はずっと考え込んでいた。

「なんでもないよ。みんな自己紹介が三者三様でおもしろいなあと

思ってね」

「はは、確かにそうやなあ」

それから軽い雑談をして早々に帰宅することに。そもそも放課後に来たのだから図書館に着いた時点ですでに夕方である。夏だからまだ明るいとはいえ、今はもう夜と言える時間帯だ。

「じゃあね、はやてちゃん」

「また今度な」

「僕ははやてを送ってくよ」

「そんなええよ」

「こんな時間に女の子を一人で帰らすわけにはいかないよ」

「公太君は紳士やなあ。ならお言葉に甘えさせてもらうな」

なのはとフェイトには先に帰らせて自己鍛錬をやらせる。

公太がはやてを送ると言ったのにはもちろん先ほど言った理由もあるが、はやてを蝕む闇の出所を掴みたいという理由もあった。

「はやては一人暮らし？」

雰囲気からなぜか親がいるとは思えなかった。でもこの年で一人暮らしというのも考えにくいのだが・・・

「よく分かったなあ。一応叔父という人からお金は送られてくるか

ら不自由しとらんよ？」

セリフのところどころで疑問を感じるが、今はそんなことより

「ご両親がいなくてさびしい？」

なぜ親がいないのかとは聞かない。叔父がお金を送っていると言っているのだ。良い話ではないだろう。

「全然さびしくあらへんよ。まあこの状態やから少し不便な時もあるけどな」

小学生の車いすに乗っている女の子が一人暮らしをして、不便の一言で済むわけがない。

「そうか・・・・・」

微妙な雰囲気になりつつもはやての家に辿り着いた。

「せっかくやからお茶でも飲んでいかん？」

普通ならここはやんわりと断るところだが、今回の目的ははやての家にある。

「じゃあお邪魔してもいいかな？」

「どうぞどうぞ」

はやてから渡された家の鍵を使ってドアを開ける。

いや、開けた途端

「!?」

中からものすごい闇のエネルギーが。
家の中に充満しているのか?いや、それだとはやての体がただで済むわけが・・・・・・・・・・そうかそれで車いすに?
はやてが車いすを使っている理由を聞いてなかったが、そこら辺を調べる必要があるようだ。

「どうしたん?」

「いや、思いのほか中がきれいで驚いたんだよ」

「むっ、失礼やなあ。私だって女の子なんやからね」

「はは、ごめんごめん」

正直言うと中に入りたくない。自分の体にまとわりつくように闇のエネルギーが存在している。
だが、この出所を掴まないと意味がない。
普通の人にはこのエネルギーはまとわりつかないだろう。
はやてや僕みたいに闇のエネルギーに選ばれた者にしか影響は及ばない。

「とりあえずお茶準備するから座ってて」

リビングからは気配を感じない。と言ってもそこらへんに充満しているからすごく分かりにくいのだが、それでもなんとか糸を手繰ってみる。

「はやての部屋にいきたいな」

その出所がどうも奥の部屋から感じる。その扉には“はやて”と書かれた表札がかけられていた。

「な、なんや急に。公太君ってそんなキャラやったんか」

「いや、女の子の部屋ってなのはのしか見たことがないからどんなのかなあって思って」

初対面の女の子相手には少し苦しい言い訳だったか？と思った公太だったが

「そ、そなら私の部屋・・・・・・見る？」

いけるものだな。

「ここが私の部屋やよ。じゃあ用意してたお茶もってくるな」

はやてが何かを言っているが、公太の耳には入ってこない。

はやての部屋に入った瞬間すぐに分かった。

あの茶色い本が闇の原因だと。

公太はその本を取ろうと右手を伸ばしたが

バチンッ

まるで公太を拒絶するかのように触れるか触れないかのところでは

じかれた。
公太の右手から血が流れる。
公太はそれに構わず、今度は眼の力を使おうと眼帯を外しかけたところで

「お待たせー」

はやてがコップを載せたトレーを持ってきて扉を開けた。
急いで外しかけた眼帯をもとに戻す。

「って公太君血出てるやないか。ちょっと待ってて今治療箱持ってくる」

「待ってはやて」

急いで部屋を出ようとしたはやてを呼び止める。

「大丈夫だから。少し用事を思い出したから帰るね」

行儀が悪いと思いつつ、はやてが持ってきた紅茶を一気に飲み干して玄関に向かう。
もちろんトレーをキッチンに持っていくのを忘れない。
洗おうかと言おうとしたのだが、その前にその必要はないと強く言われてしまった。

「ごめんね」

「気にせんといて。今度はなのはちゃんたちと遊びにきてな」

「必ずくるよ」

あの本をなんとかするために必ずまたくるだろう。
公太ははやてと別れてすぐに『時の庭園』へ向かった。
今日はリンディさんがプレシアさんとお茶会をすると言っていたからちょうどよかった。
クロノとユーノもなぜかいたが、今の公太にとってはなのはとフェイト以外ならどれだけいても困ることはない。

「あら、どうしたの公太？」

「その顔・・・・・何か緊急のお話しみたいね」

「公太の持ってくる厄介ごとはろくなことがない」

「失礼だなクロノ。それに今回は僕に全く関係ない」

僕が重要なことを言おうとしているのに気づいたみんなは、すぐに真剣な顔つきになって席に座る。
そして話した。はやてという少女のこととそれに取り巻く闇について。

「・・・・・・・・どうしてこの町はこんなに厄介ごとが多いのかしら」

確かにそうだな。たった一つの町に大きな事件がこれだけ集まるというのもすごい話だ。

「それで、公太はその本の正体も予想ついてるんじゃないのか？」

クロノはユーノにだんだん似てきたな。

「あれはおそらく『闇の書』だと思います」

闇の書・・・・・・・・・転生と再生を繰り返す魔導書で主の望みを叶える存在と言われているが、複数の転生を繰り返すうちに悪意ある改変を受けて壊れたと聞く。
以降、旅をする機能と破損したデータの修復機能が暴走し、無限の再生と転生を繰り返すようになる。持ち主が蒐集を行わなければ持ち主の魔力を侵食し、蒐集が完成すれば無差別破壊のために持ち主の魔力を際限なく使わせ命を奪うものらしい。
はやての足が悪いのもそのせいだろう。あのままではいずれ命を落とす。

「闇の書・・・・・・・・」

ハラオウン親子はその存在を知っているみたいで、影を落とす。
何かあったのだろうか?管理局にいるのだから過去に闇の書とぶつかっていてもおかしくはない。

「それで覚醒するのはいつごろか分かるか?」

闇の書についての知識もあるみたいだな。
あの闇の書はまだ眠っている状態にある。
一度覚醒すると魔力の蒐集というのが行えるようになり、それによってすべてのページを魔力で埋めると完全覚醒する。
そうなると止めるのは難しい。

「まだ半年はあると思う。はやてを蝕む進行度から見て最近体調が悪くなったんだろう。だいたい12月までは持つと思うよ」

「そう・・・・・・・・・短いわね」

プレシアさんも闇の書についての知識があるのか、難しい顔をする。
とはいえ、覚醒がまだ一年以上あったとしても簡単にどうにかできるものでもないのだが。

「君の力でもどうにかならないのか？」

無理なのは分かっているという顔をしながらも聞いてくるクロノ。

「まあ全く手がないというわけでもない」

「！？」

公太の言葉にこの場にいるみんなが公太に注目する。

「本当なのか！」

「うん。まず僕自身は触ろうとしたら拒まれた。でもはやてに触れたときに闇が僕の体に流れ込んできた。おそらく僕は闇の書に魅入られているんだと思う」

「君が肩代わりをするというのか？」

「それもできなくはない。でもそれでは根本的な解決にはならないだろう。僕が主になっても暴走はする」

「ではどうするの？」

「・・・・・・これは最後の手段なので今は伏せておきます」

ここまで言っておいて伏せるというのもどうかとも思ったのだが、話している最中に言うのを躊躇ってしまった。
あまり褒められた解決方法ではないし、１００％反対するだろう。
それ以前に僕のさらなる秘密にかかわる。
これは言えないのではなく、言いたくないのだ。

「・・・・・でも他にも方法があるのでしょう？」

僕の気持ちを察してくれたプレシアさんがその内容には触れずに代案を聞いてくる。

「カオスとクロノスの力を借ります」

「神の力か・・・・・具体的にどうしてもらうんだ？」

「闇の書の時間と空間をこの世界から切り離します」

「そうか！それなら可能かもしれない」

「でも一生そうしているわけにはいかないわよね？ジュエルシードも少しの間だけと念を押されましたから」

何も考えずに喜ぶクロノとは別に、リンディさんがきちんと深くまで考えている。

「はい。あれは僕の力を媒体にしていますから。そしてあの力を使うのは一回目の覚醒後です」

２人の神の力を受けるというのは生半可なことではない。しかもす

でにジュエルシードに力を使っているのだ。易々と使えるものではない。

僕の考えはこうだ。

一回目の覚醒後、守護騎士というのが現れるらしい。そしてその者たちが蒐集を行う。だから僕は限界まで騎士たちを闇の書ごと異空間へ封じ込める。

そうすることによって完全覚醒はしないだろう。だが、はやての闇が蝕んでいくのは止められない。

そこで異空間に封じ込めている間にはやての中に移りこむ闇のプログラムを排除する。

覚醒前だとプログラムまでははやてのほうに移りこまないから、一回目の覚醒の後にする必要がある。

「要するに闇の書が覚醒した状態で主を失くすのか」

その通りだ。

闇の書の蒐集中に主が死ぬとそこで終了してまた転生するらしいから、それを利用する。

「でもそれだと完全覚醒を先延ばしにしているだけじゃないのか？」

「いや、それは失敗したらの話だ。プログラムを破壊して転生する瞬間に転生や再生を繰り返す元を破壊する」

「なるほど。それなら主のはやてちゃんには影響が出ないし、力もそんなに大きくないということね」

「でもその元がどこにあるのかどうやって探すんだ？」

それも賭けだ。一回目の覚醒が終わった後、闇の書を眼の力を使っ

て調べる。
ただそれには障害が二つ。これは異空間へ封じ込める前にしないといけないため、守護騎士たちが素直に闇の書を差し出すのか。
そして闇の書自身が抵抗をしないかという問題がある。

「本当に賭けになるわね。でもこれしか方法はないわけだし、これに賭けてみるしかないわね」

他の方法ははやて自身を永久封印することなのだが、あんないい子をそんな犠牲にすることはできない。

「でもそれだとすべて公太に頼ってしまうわ。それに眼の力を使うなんて大丈夫なの？」

一度眼の使い過ぎの結果を見たからか、プレシアさんが心配してくれる。

「まあなんとかなりますよ。ただ・・・・・」

これは闇の書だけに集中しないといけない。
他の不安因子は排除したい。

「分かっています。あちらの件は私たちでなんとかします」

例の謎の組織のことだ。
管理局のほうでなんとかすると言っても無理だというのは分かっている。
でも時間稼ぎにはなるからここは頼るしかない。
リンディさんのほうもそれは分かっているみたいだ。

「それでなのはさんとフェイトさんには言わない方向でいいのよね？」

「はい」

重要な人物ははやてだけだから、なのはとフェイトにいらぬ心配はかけたくない。

それにこの作戦には幸いなのはとフェイトの力を借りる必要がない。

わざわざ伝える必要もないからな。

「じゃあそろそろ帰りますね。さすがにもう遅いのでなのはとフェイトが心配します」

「そうね。早いうちにこのことが分かってよかったわ」

「でもすごい偶然ね。お友達の紹介でできた友達が闇の書の主だったなんて。やはり公太はおもしろいわ」

僕の因果について興味を抱いているのかは分からないが、さっさと立ち去ったほうがいいな。

「では僕はこれで」

後ろで何やら呟いているプレシアさんを無視して僕は転移した。我が家へ。

第一話　闇の書（後書き）

第二章突入です。
はやての関西弁がかなり間違っているかもしれませんがスルーしてください。
でも原作でもはやての関西弁って微妙な気がします。
闇の書については原作であいまいだった部分にオリジナルの設定を加えます。

第二章では途中で番外編をちょくちょく入れる予定です。

第二話　前へ進むために（前書き）

サブタイトルを変更しました。

第二話　前へ進むために

「2人ともいい感じだ」

現在はなのはとフェイトの模擬戦。
普段は近接タイプのフェイトと遠距離タイプのなのはと戦わせているが、今回は少し違う。
今回は二人のタイプを変えて、フェイトは遠距離戦闘、なのはは近距離戦闘で模擬戦を行ってみた。
今まではそれぞれのスタイルに合わせて修行をしていたが、実践ではその場の状況に合わせて臨機応変にスタイルを変えなければならないこともある。
今回はそのための模擬戦だ。
なのはは防御が高いから近接でもそれなりにいけるし、フェイトは素早い速度で移動しながらの砲撃や魔法の切り替えが早いためこれまたけっこう強い。
ちなみにこれは余談だが、僕も遠距離の攻撃方法はそれなりに持っている。
というより普段はただのパンチやキックしかしていないけど、それなりに派手な技は持っているつもりだ。
もちろん使うのは魔法ではないが。
それと魔導師はデバイスというのがなかったら、どの魔導師も使い物にならないだろう。
特にレイジングハートとバルディッシュはかなりのＡＩを積んだ高性能デバイス。
彼らの自己判断や魔力制御がなければなのはとフェイトも魔導師としての機能を十分に発揮できていないと思う。
まあそうは言っても、それはある程度のラインまでの話だ。
ここまで上達したのはデバイスのおかげではなく、二人の努力と才

能の結果だ。

「じゃあ次は、２人とも砲撃系をぶつけ合って」

「「はい」」

フェイトが大きな魔法をするためにバルディッシュを横に一薙ぎして巨大な魔法陣を出現させる。

『アルカス・クルタス・エイギアス、疾風なりし天神、今導きのもと撃ちかかれ。バルエル・ザルエル・プラウゼル』

呪文とともに大量のフォトンスフィアが生成されていく。
それに合わせてなのはもスターライトブレイカーを放つべく、大気中に散った魔力を一か所に集め始める。

「スターライト・・・・・・・・・」

「ｆｉｒｅ！」

「ブレイカー！」

フェイトは毎秒7発の斉射を４秒継続することで合計１０６４発のランサーを発射させて、なのはは巨大な魔力を一気に放出させる。
なのはの砲撃のほうが力が一か所に集中しているためフェイトの魔法を押している。
フェイトもどんどんフォトンスフィアを放出しながらも生成していく。これはすごい。
だが・・・・・・

「くっ・・・」

最終的になのはの砲撃がフェイトを包み込んだ。
直撃だけど非殺傷だから大丈夫。

「大丈夫、フェイトちゃん」

「大丈夫だよ。でも・・・・・・」

服がボロボロな状態でフェイトが無事を告げる。もちろん体にダメージはない。
それに・・・・・・

「あっ！」

なのはのジャケットもいくつか破損していた。
フェイトが放った圧倒的な数の魔法のうち、いくつかがなのはの砲撃をすり抜けてなのはに当たったのだ。

「引き分けだな」

「フェイトちゃんは魔法まで早いんだもん」

「なのはもどんなスタイルでもパワーがあるし装甲が固い」

「ま、どっちも成長しているってことだよ。じゃあ二人は先に帰ってお風呂に入ってて」

「えっ、お兄ちゃんは？」

「僕はプレシアさんに呼ばれたからちょっと『時の庭園』にね。まあたぶんいろいろと聞かれるだけだと思うけど」

なのはとフェイトに余計な心配をさせないように最初からプレシアさんと口裏を合わせていたのだ。

僕もこのままでは二人を守り抜くことはできないし、自分の身すら守れないかもしれない。

「分かった。早く帰ってきてね」

すんなりと帰っていく二人を背に僕は転移する。

目的地はプレシアさん特製の修行場だ。僕自身が強くなるためにプレシアさんがちょっとやそっとでは壊れないフィールドを作ってくれた。

ちなみに一切の記録等を取らないようにお願いしてある。普通に修行している場なら構わないのだが、見せられないものもあるから・・・・・・・

そのお願いにプレシアさんは何も聞かずに了承してくれた。

・・

唐突だが、ここで管理局について一度簡単に説明しよう。

リンディさんは管理局に属している。しかも提督という立場上、地球であったことを上層部に報告する義務がある（まあ提督でなくてもするが）。

ここで想像してみてほしい。

なのはとフェイトほどの高ランク魔導師を上層部が放っておくだろうか？

そしてさらにその2人の師匠である僕もだ。リンディさんたちと会った当初は、すべて僕についても報告していたと言っていた。
もちろん神についてなんかは黙っていてもらっているが、それでもそれなりに注目されているだろう。
それにプレシアさんもSランクオーバーだ。
管理外惑星の一つの町にこれほどまでの実力者が集まっているというのは非常に珍しい。
さて、上層部はこんな僕たちのことをどうしたいと思うだろうか。
答えは自分たちの組織に引き入れること。
幸い、リンディさんたちは例の組織がいつ襲ってくるか分からないということで本部に戻らない理由を作っている。
もし一度戻っていたら僕たちについて先延ばしにはできなかっただろう。
それでも上層部はリンディさんに僕たちのことをなんとかして引き込めと言っているらしいのだが。

「それでリンディさんはどうするつもりなんですか？」

提督という立場上上からの命令を無視することはできない。
僕たち全員を引き込むことはしなくても、なのはとフェイトぐらいは入れとかないと面目が立たない。

「公太さんも含めてプレシア以外はもともと魔導師ではありません。偶然魔導師としての資質を持っていて偶然魔導師になったというだけ。公太さんは魔導師ですらないですし」

となるとプレシアさんだけをぶち込んで収めるということか？

「いえ、プレシアもけっこうな年齢です。さすがに無理やり入れるということはできません」

本人が聞いたら怒りそうなものだが、確かにそうだ。

「難しいですね。とはいえ、プレシアさんならフェイトが管理局に入るぐらいなら自分が入ると言いそうですけど」

「そうなのよねえ。まあ本人がいいと言うなら問題ないのですが・・・・・」

「結局なのはとフェイトを入れないと上層部は納得しない」

「・・・・・・はい」

まあおばさんより若い子のほうが扱いやすいからな。当然といえば当然だが、すべてを自分の手元に置いておかないと気が済まないその欲には反吐が出るな。

「まあ最悪僕が管理局に入りますよ」

「・・・・・・ごめんなさい」

リンディさんが謝ることではないのだが・・・・・・

「そういえば最近なのはたちの勘がするどくて困っているのですが」

この話はこれ以上続けても進展はしないからと話題を変えてみる。これについて困っているのも事実なのだが。

「なのはさんたちは何について勘付き始めているのですか？」

「はやてのことと僕のことです」

僕がはやてに対して何かを思っているのに感づいているのと、僕自身が何かを決意しているんじゃないかということだ。

「実は昨日ここで闇の書について報告をした後に・・・・・・」

これは報告後に帰宅して夕食を食べているときのことだ。

「お兄ちゃん、今日はやてちゃんに対しておかしかったよね？」

なのはが何気なく言った一言に僕は内心ヒヤリとしながらも冷静に対処をした。

「そう？それよりもこの魚おいしいよ」

僕は普通に話題を変えたつもりだった・・・・・・のだが。

「お兄ちゃん、話題を逸らそうとしてる？」

フェイトの冷静なツッコミに不意を突かれて内心だけではなく、顔にまでヒヤリと焦ったのが出てしまった。

「あー！やっぱり何か私たちに隠してる」

「お兄ちゃんが人に優しいのはいつものことだけど、今日のはやてに対してはなんというかぎこちない感じがした」

・・・・・・否定はできない。

あの時は図書館ではやてと握手をした時に流れてきた闇のエネルギ

ーで動揺していた。
僕はちょっとやそっとでは慌てず冷静にものごとに対処できると自負しているつもりだったけどあの時は無理だった。
僕はとある理由から闇というものに恐怖している。
しかも自分に流れてくるあの感覚はどうやっても慣れることはできない。
その動揺が表に出てなくても、内心で動揺していたのがなのはたちには分かってしまったのだろう。

「公太でも動揺することがあるんだな」

恭也さん、一応僕だって人間です。
動揺ぐらいはしてもおかしくないでしょ。
恭也さんや父さんを見るとどうも本気で驚いているように見えるんだけど。
魔法について知った時以上の驚きに見える・・・・・・

「それでお兄ちゃんは今日、私たちの修行の後にどこ行ってたの？」

さらなる追撃。まさかそこまでつっこまれるとは思わなかったぞ。
これは動揺とはまた違うと思うのだが・・・・・なぜバレた？

「最近お兄ちゃんの考えることがなのはたちには分かるのです」

「暁子がこういうのを以心伝心といって仲睦まじい証拠だって」

いろいろとツッコミたい。でも宮井さんのことはいつものことだから放っておこう。フェイトのこの素直さはなんとかしたいところだけど。

「あの時も言ったけどプレシアさんに根掘り葉掘り聞かれてただけだよ。いろいろと協力してもらっているからこのぐらいはね」

「・・・・・・なのはたちには内緒なの？」

「・・・・・・」

この子たちは僕の言葉を全く信じてないな。

「・・・・・・2人には全然関係ないことだから安心して」

「私たちには関係なくてもお兄ちゃんが一人で抱え込むのが嫌なの！」

なのはの珍しい強い主張に僕やみんなは唖然とするが、今話すことではない。

「・・・・・夕食時に話すことじゃないな。明日の修行の時にこの話の続きをしよう」

父さんたちはすべて事情を知っているからか何も口出しをしない。

とはいえ、さすがに夕食時にこんな重くなる話はするものじゃないから明日に回しておこう。

それを食後とは言わず、明日までに回すのは僕の逃げ、なのかな。

「ということがありまして」

「それで公太さんはどうするのですか？修行ってこの後のことですよね？」

一応昨日父さんとも話し合って自分の中で答えを出した。ある程度は話すべきだということに。
だけどこれが正しいのかどうか分からない。

「私にも何が正しいのかどうかは分かりません。でも公太さんはなのはさんとフェイトさんのお兄さんなのですから、公太さんが正しいと思った通りに行動してみてはいかがですか？」

「僕には人生経験がほとんどと言っていいほどありません。知識はあります。戦闘の経験もあります。でも一般生活における知識と経験が全くと言っていいほどないんです。なのはとフェイトみたいに普通の子たちにどこまで言っていいのか判断がつかなくて・・・・・」

「士郎さんはなんとおっしゃったのですか？」

「『こういうことに関しては私は口出ししない。公太の思うとおりにやりなさい』と」

「さすが士郎さんですね。公太さんのことを信頼しているんですよ」

それは分かっている。僕のことを信頼してくれているのは、僕が高町家に厄介になった時から感じていたことだから。

「話はすべて聞かせてもらったわ」

奥の部屋からプレシアさんが出てきた・・・・・・・・・・なんで？

「ここは私の家なんだからいて当然でしょう」

そうだった。最近あまりにも自然にここ、『時の庭園』にくるようになってたからその認識が薄くなってた。

「あなたは私とフェイトを救ったときどう考えていたの？あなたが私たちの関係が直ることが正しいと思ったから秘密裏に動いていたのでしょう？何をいまさら臆する必要があるの」

確かにあの時はギリギリまでなのはたちには話さずに自分が思うとおりにことを進めていた。
あの時はフェイトの精神の脆さなどから言えなかったというのが強かった。
でも今は違う。きちんと現実を受け止めて改善に向けて前へ進むことができる。

「そう・・・ですね。ありがとうございます。プレシアさん、リンディさん」

僕は急いでなのはたちの元へ転移する準備をする。
もうなのはたちにこういうことで隠し事はしないと決めたんだった。

「ちなみに私をオバサン呼ばわりしたことについては後でたっぷりと聞かせてもらうから」

あ、やっぱり聞いてたか。
ちらっとプレシアさんを見ると、顔はにこやかでいるけど額に青筋が見えた。
リンディさんも若干冷や汗をかいている。
これはあとが怖いな。

…………………………………………………………………………
…………………………………………………………………………
…………………………………………………………………………

闇の書の一回目の覚醒が起こるまで約半年。
それまで僕たちはただ何もせずに待っているわけではない。
僕は自分自身の強化となのはとフェイトの修行により一層力を入れて、管理局は例の組織の情報集め。クロノだけはたまになのはたちの修行に混ざりにくる。
ちなみに僕に教えを請いてきたので一緒に指導してあげている。
父さんと恭也さんもそれぞれ鍛錬を怠らないようにしてもらっている。まあ言わなくても怠けたりはしないだろうけど。
プレシアさんとリニスさんは僕が頼んだロストロギアの探索。リンディさんには黙認してもらっている。
ユーノとアルフは無限書庫で闇の書について調べている。
闇の書は守護騎士さえ押さえれば大事にはならずに済むだろう。
例の組織もこのところ動きを見せない。
僕のロスト時には管理局のほうで警護してもらうことになっている。
そして僕は自身の強化ともう一つしておかないといけないことが。

「坊やよ。あいつをどう説得するつもりだ？」
プレシアさんに作ってもらった修行場でクロノスとこれから行うことについて考えているところだ。
これから僕がやろうとしていること、それは・・・・・
「カオスが素直に坊やの言うことを聞くとは思えんがな」
「だがやらないとあの作戦は成功しない。クロノスの時間隔離よりカオスの空間隔離のほうが重要だからな」

もう一人の神、カオスの顕現ａｎｄ協力要請。
まだ二回しか顔を合わせたことがないからなあ。こちらの呼びかけに応じるかどうかすら怪しい。

「カオスは単にツンデレなだけだ。坊やも嫌われているわけではないからな。あくまで坊や次第ということだ」

嫌われてないのか・・・・・・？

「・・・・・まあいい。とりあえず呼び出すぞ」

公太がこれまでにこれほど緊張していたことがあっただろうか。
なのはとフェイトには決して見せられない姿だ。

『我、神代公太が契約の元、汝を召喚せん。空間の神『カオス』よ、我に力を与えよ』

右眼から魔法陣らしきもの（実際は魔法陣ではないがパっと見変わらない）が現れて、そこから金髪で長髪の軽いウェーブのかかった女性が現れる。
服装は無地の白いワンピース。誰が見ても色気がないと思える恰好だろう。

「なんじゃ公太。妾に何か用か？」

めちゃくちゃ機嫌が悪いカオスがこちらに目もくれずに聞いてくる。

「それにクロノスまでおるのか。妾に頼み事か？」

ここでカオスが頼みごとを聞いてくれる、と喜んではいけない。

「クロノスと協力してあるものたちを異空間に封じ込めてほしい」

「いやじゃ」

間髪入れずに答える。僕が頼みごとを言うのを分かっていて準備をしていた言葉だ。

ちなみにここまでカオスは一回も僕と目を合わせない。

「しかもこやつとじゃと？なおさら嫌じゃ」

カオスはクロノスとどうも仲が悪い。

契約をした時から敵対心を持っていた気がする。

「カオスよ、いい加減そのツンデレをやめてはどうだ」

「ツンデレじゃと？いつ妾がこやつにデレたというのじゃ？」

「ほう。私が知らないとでも？知っているぞ。お前がいつも坊やの視界を共有してまわりを気にかけているのを」

クロノスの言葉にカオスは顔を真っ赤にして反論をする。

「な、なんじゃと。妾はそんなことしておらんぞ」

「私とお前は同じ人間に憑いているのだぞ。そのぐらい気づくに決まっているだろう」

「だ、黙れ！」

「前に坊やがロスト時に襲われた時のカオスの慌てっぷりときたら見てられないものだったな」

「黙れと言っておろう！」

「・・・・・結局協力してくれるのか？」

この2人はお互いの性格の悪さゆえかこういう話が絶えない。まだ三回目とはいえ、もう慣れてしまった。

「いやじゃ」

「その性格の悪いところは相変わらずだな」

クロノスの言葉にカオスはピクンッとして僕と目を合わせてきた。

「お、お主も妾は性格悪いと思うのか？」

そんな目で見られてははっきりとウンとは言えないが、僕のお願いに間髪入れずに嫌だというのだから性格が良いとは言えないだろう。

「お、思いません」

なぜか敬語で答えてしまった。

「・・・・・嘘っぽいのじゃ」

さらに機嫌を悪くしてしまった。クロノスは腹を抱えて笑ってるし。

「僕のお願いを聞いてくれたら性格がいいという証拠になるんじゃないかな」

気にしているみたいだったからここぞとばかりに言ってみたのだが。

「・・・・・なら条件付きで聞いてやらなくもない」

わりとすんなりと答えた。

まだたった三回しか話したことないが、カオスが譲歩するのは珍しいことだ。

「その条件とは？」

「今はまだ言えん」

・・・・・訳分からん。

「まだ半年猶予があるのじゃろ？それまでは待っとれ」

その時に力を貸してくれるのなら別にかまわないのだが・・・・・・僕、半年猶予があるなんて言ったっけ？

「お前が普段から坊やの生活を覗いているのがバレバレだな」

「～～～～～～！！」

カオスは言葉にもならない様子で顔を真っ赤にして消えてしまった。

本当にツンデレなのか？

「ま、坊やも頑張りたまえ」

そう言ってクロノスも消える。

「・・・・・・・・・まあ目的は達成できそうだし良しとするか」

カオスについてもなんとかなりそうだし、今のところすべて順調だ。
だが、順調にことが運んでいるときにこそ予想外の因子が飛び込んでくるものだ。
それに僕はまだ一つ気にかかっていることがある。
なのはの手紙だ。
あれには何かは分からないが呪いに近いものがかけられていた。
発動条件はおそらく長い間手紙・・・というより封筒を持っていることだろう。
内容についてだが、けっこう重いものだというのは分かるのだが読み取るということはできなかった。
発動条件が簡単に分かったのだから調べれば内容まで分かるものなのだが、その部分だけが厳重なプロテクトがかけられていて僕でも暴くことができなかった。
なのはの手紙はなのはが魔導師になる前のことだ。
ピンポイントで狙う理由がわからない。
一応封筒の気配とジュエルシードの出現場所がかぶったから例の組織に関係しているのではないかと思っているのだが、やり方が妙だ。
僕が転入してからは手紙が置かれていないから僕関係と考えていいとは思うのだが・・・・・・
ここは一度月村家に訪ねてみるべきか・・・・・・
あの呪いは月村家・・・というより『夜の一族』に聞いたほうが早いかもしれない。
だがそのことを聞くには、僕がすずかに夜の一族のことを知っていると言う必要がある。
どう言ったらいいかなあ。

方法としては、

1、さも当然のように夜の一族について忍さん交えて話す
2、すずかには内緒で秘密裏に話す
3、僕が夜の一族について知っているということをそのままぶっちゃける

ただ、事情が事情だから僕たちについてある程度話す必要がある。
戦闘や呪いなんか一般の子供たちには縁のない話だ。
いきなりなのはの手紙には呪いがかけられていた、と言ったら→なんでなのはに？↓魔法少女だから？（疑問形なのは、なのはが魔法少女になる前からの話だったから）↓公太君は知ってたの？↓僕も関係しているから→ということは公太君も魔法使い？↓いや、僕は違うよ→だったら・・・・・・・・・・

みたいな感じになりかねない。
これは僕が言うことじゃなくてなのはが言うことだ。
でもなのはにはすずかが夜の一族だと知られたくないだろう。
嘘をついてうまく丸め込んだり、黙ってやるのは簡単だ。
でも、自分の目的のために嘘をついて利用するようなことをしたくない。

「難しい問題だなあ」

きっかけとタイミングの問題のような気もするけど、すずかはなのはたちに隠したがっているようにも見えるし・・・・・・
一度忍さんと恭也さんに相談してみるか。

第二話　前へ進むために（後書き）

今回はちょい番外編みたいな感じです。
今は一応A'ｓ編ということになっていますが、少しの間闇の書覚醒までの空白期間のお話です。

第三話　夜の一族

ツンデレとは・・・・・・好意を持った人物に対し、デレッとした態度を取らないように自らを律し、ツンとした態度で天邪鬼に接する。

「何読んでんのよ」

「アリサ」

図書館ではやて交えてみんなで読書の中（なのはたちは宿題をしている）、僕はクロノスが言っていたカオスのツンデレについて本で調べていた。
こういう俗物的な用語までは詳しくはない。
確かにこの本の通りならカオスはまさしくツンデレだな。
まあ僕に対してプラスの感情があるのかどうか怪しいものだが。

「あんた、そんなのに興味持ち始めたの？」

興味、というと確かに興味だがおそらくアリサが思っているのとはたぶん違うな。
そういえばアリサはいつもツンツンした態度だけど誰かにデレたりするのだろうか？
アリサに特定の男子ができているとは思えないけど。

「あんた、なんか失礼なこと考えてない？」

・・・・・・アリサもなんかの能力持ちとかじゃないだろうな？

「そんなことないよ」

得意のポーカーフェイスで軽くかわしてから、ふと疑問に思ったことをアリサに聞いてみる。

「そういえば宿題は終わったの？なのはたちの姿が見えないけど」

「あんなのすぐに終わるわよ。すずかは今なのはとフェイトの面倒を見ているわ」

さすがと言ったところだな。僕から見たら小学生の問題なんて簡単なものだが、この年の子からしたらそれなりに時間のかかるものだと思う。

アリサとすずかは将来有望だな。なのはとフェイトは頭が悪いわけではないのだが、なのはは要領があまりよくなくて、フェイトは国語系の問題がまだうまく理解ができないらしい。

「アリサはここに何しに来たの？」

僕はここに来る前に宿題を終わらせていたため、宿題をやるみんなとは離れて読書をしていた。

わざわざ僕のところに何の用だろうか？

「あ、あんたが最近元気がなかったってなのはとフェイトから聞いてたから様子見に来てあげただけよ」

「心配してくれたんだ」

「勘違いしないでよ。別に心配とかできたわけじゃないんだからね！」

「・・・・・あ、ツンデレ」

「誰がツンデレよ！」

とりあえずツンデレの実物も見られたし僕が知りたかったことはだいたい分かったので、なのはたちの様子を見るべく席を立つ。
アリサも顔を赤くしてまだぶつぶつ言っているが放っておこう。
デレたのを隠すために再びツンになる。邪魔しちゃ悪いな。
これも勉強の成果だ。

「またか・・・・・・」

なのはたちのもとへ向かう途中、はやてが車いすに乗りながら高いところにある本を腕を一生懸命伸ばして取ろうとしている。

「はい」

「ありがとう。また助けてもらったな」

「自分一人で解決できないことは、誰かに頼ってもいいんだぞ」

「・・・・・うん」

これはまた一人で無理するな。
なのはとフェイトもそうだけど、小学生がなんでこんなに一人で頑張ろうとするかなあ。

「とりあえずみんなのところに戻ろうか」

はやてはあの時のフェイトと似ている。
まさか闇の書というものに気づいているとは思えないけど、自分の体に何が起きているのか、この先どうなるのか何か予感めいたものがあるのかもしれない。
小学三年生の女の子にはとてもつらい現実だと思う。

「ところですずかから聞いたんだけど、はやてって料理できるんだって？」

「ちょっとだけな」

「そう？そういえば初めて会ったとき僕が取った本って料理本だったよね。確か中華」

「よく覚えてるなあ」

まああの時のことは印象強いできごとだったからね。

「今度食べてみたいなあ」

「い、いややよ。なんか恥ずかしい・・・」

料理を食べたいと言っただけでなぜ顔を真っ赤にするのか・・・
でも年相応の顔だな。

「じゃあ練習で僕だけが食べに行くよ」

「え！？」

何をそんなに驚くのか？

「公太君一人で?そりゃあ前は私を家に送ってくれて少し家に入ったけど・・・・・・はっ!そういえば私の部屋まで入れてもうた気が・・・・・・」

そういえば前になのはとフェイトに言われたことがあったな。
僕は女心が分かっていない、と。
まさか今回も僕はなにかやらかしてしまったのか?
前は闇の書のことで頭がいっぱいだったけど、実はあの時も何かやらかしてたんじゃ・・・・・・

「はは、まあ考えといてよ・・・・・・・・・お、なのはたちは終わったみたいだね」

僕たちが着いた時にはなのはとフェイトの宿題が終了して片づけをしているところだった。
本を読む時間はなかったな。

「そろそろ帰ろうか」

「う〜・・・結局宿題だけで終わっちゃった」

「さっさと翠屋に行きましょ」

僕たちはお昼まで図書館で勉強をした後、翠屋ではやても一緒にお昼を取ることになっている。
午後は自由時間ということになっているけど、僕は・・・・・・

「そういえば最近恭也さんがお姉ちゃんといつも以上に仲良くなっている気がするの」

前回見ただけでも十分忍さんとの仲は良好に見えたけど、あれ以上にイチャついているってことか？
どうでもいいけどそういうのはすずかがいないところでやるべきだと思うんだ。

「確かにお兄ちゃん、最近機嫌がいい気がする」

「・・・・・・・・・あー」

「アンタ何か知ってんの？」

たぶん足の怪我のことじゃないかな。
前に僕の知識から引っ張ってきた術とユーノが探してきた術がうまい具合にくっついたことだった。
僕の知識が中途半端に欠けていて、ユーノが持ってきた資料も欠けていた。
でもその欠けている部分がちょうど補える形だったからなんとかなったということだ。
恭也さんの怪我は膝の半月板を砕いていることが原因なのだが、今は何かしらの能力により処置が施されている。
人工関節を入れる手術をすればなんとかなるとは思うのだが、いろいろな事情によりできない。
機嫌がいいのは前々から何とかなると言っていたのが一昨日確実になったからだね。
でもなのはたちには話していなかった。
というより他にもいろいろとあって話すことを忘れてただけなんだけど。
とはいえ、アリサたちの前で言うわけにはいかないからここははぐらかしとこう。

「忍さんとの仲がより深まったんじゃないかな」

「どういう意味よ」

「子供にはまだ早いってことだよ」

皆、僕の言葉に少しの間思案するが、

「あ、あんた何言ってんのよ！」

「・・・・・・・・・」

アリサとすずかは知ってたのか。すずかなんて顔真っ赤にしてるし。

「ねえねえ、どういうこと？」

なのはとフェイトは全く見当もつかないという顔だ。
この2人はこれが正しいな。
はやては・・・・・・・・・あ、この顔は分かってる顔だな。
パッと見、苦笑しているから肯定とも否定ともとれないけどはやてのこういう表情は知っている顔だ。

「アリサちゃんどういう意味なの？」

「あ、あんたたちは知らなくていいの！」

「ぶぅー。私たちだけ仲間外れ・・・・・・」

「どうしてもって言うなら公太に聞きなさい」

「え！？」

そこで僕に振るか。
またその顔で見ないでくれ。断りづらい。

「・・・・・なのはたちが中学生になったら教えてあげるよ」

先延ばしにしよう。
まあ中学生になったら自然と知るだろう。

「あ、僕は先に行って母さんの手伝いをしてくるよ」

僕まだ何か言いたそうな二人に気づかない振りをして僕は翠屋に逃げ込む。
僕が店に入ると、ちょうど母さんと姉さんがご馳走をテーブルに運んでいるところだった。
・・・・・・・・あれ？なんで姉さんも？

「なによその顔は。言っとくけど私は盛り付けをしただけだからね」

それはよかった。
前に姉さんの作ったパイを食べたときはひどかったからなあ。
焦げていたわけではない。中がドロドロで飲み込むのがつらかった。
味は？と聞かれたら表現できないとしか言いようがない。

「あ、その子がはやてちゃんね」

後から入ってきたはやてを見て僕のことをおいて近づいていく。
僕は姉さんの代わりに料理を運んでおこう。

にしてもかなり気合入ってるなあ。

「みんな手を洗ったなら座って」

ここまで豪華な食事は久しぶりじゃないかな。
僕の記憶だとなのはが魔法少女だと告げたときからだな。

「「「「「いただきます」」」」」

五人の少女たちが一斉に食べ始める。

「公太も食べなさい」

「そうだね。いただきます」

試しに目の前にあったサラダをお皿にうつして食べる。
味がしっかりしみこんでおいしい。
ドレッシングも母さん特製だ。

「桃子さんの料理はほんまにおいしいなあ。なのはちゃんたちのゆうてたとおりや」

「これははやての料理の腕もいつか母さんに見せないとね」

「あら、はやてちゃんもお料理できるの？」

「わ、私はたいしてうまくあらへんよ」

慌てて手を振って否定するはやて。

「でも料理とは別にはやては母さんと気が合うんじゃないか？」

「あら、どうして？」

「ん？だって同じ関西出身でしょ」

「・・・・・なんで公太はそんなことを知っているのかしら？」

あれ？なんか黒いオーラが。

関西出身というのがばれるのがそんなに嫌なのだろうか。

「そういえば恭也さんは？」

話を逸らすため・・・・・ではなく、本当に聞きたいことなんだけど・・・・・母さんはにこやかな顔を崩さないで僕を見据える。

「そういえば今日は忍さんも家に来てたよね」

「お兄ちゃんが珍しく焦ってる」

なのは、そんなこと言ってないで母さんをなんとかして。

「忍ちゃんと部屋にいるわよ」

なんともなかった様子で答えてくれた。

母さんがしつこい性格じゃなくて助かった。

ていうか恭也さんたちは真昼間からですか。

「あとでこっちにもきますよね？」

「お昼がまだだからくるんじゃないかしら」

「お、豪勢だな」

噂をすればなんとやらだ。
忍さんが恭也さんの腕に抱きつきながら店に入ってくる。
さすがに子供たちの前では控えなよ。

「恭也さん、忍さんラブラブなところ悪いのですがお二人にお話が・・・」

「あら、ラブラブを壊しにきたのかな？」

スルー。

「公太がお願い？お前のお願いはロクなことがないからなあ」

「はは、何を言っているんですか。足の怪我は誰のおかげで治ると？」

「ああ、恭也の機嫌がよかったのはそれね」

「・・・・・・分かった」

「でも私にも関係することなの？」

「まあ主に恭也さんより忍さんなんだけど・・・・・・・・・・・・・・・・・・『夜の一族』について」

「！？」

さすがに驚くか。
でも忍さんはそんなに驚いてないように見える。

「私はいつ言ってくるのかなあって待ってたわよ」

「・・・まあ確かに忍の家に行ったとき、気づいているみたいだったが」

最近何を言ってもたいして驚かれないから拍子抜けするな。
実はすずかも・・・・・・なんてことはないか。

「恭也さんには前に話しましたが、なのはの手紙について『夜の一族』の方に意見を仰ぎたくて」

「あら、でもそれだと私じゃあ役に立たないわね。となると御婆様かな？」

「お願いできますか？」

「そうね。確か今日はいらしたと思うから私から頼んでみるわ」

これで第一関門はクリアだな。
とはいえ、これで解決するとはまだ決まっていない。

「そういえばすずかには話したの？」

これは僕が、すずかが『夜の一族』だと気づいていることを話したのかってことだろう。

「いえ、話すつもりはありませんよ。すずかも隠したがっているようですし、説明が難しいですから」

「そう？公太君なら大丈夫だと思うけど」

どういう意味だろうか？

「あ、お兄ちゃんがまた内緒話してる！」

僕たちを見つけたなのはとフェイトがこちらに向かってくる。
そういえばなのはたちにはすべて話すと決めてたんだ。
でもこればかりは僕が勝手な判断でしてもいいことじゃない。

「「・・・・・・・・・・」」

2人は無言でこちらを見つめる。
自分たちから教えてくれとは言わないあたりがこの子たちらしい。

「あー・・・・・・・・・・」

僕は助けを請うように忍さんを見る。

「公太君がすずかをどうやって口説くかアドバイスに来たのよ」

「「え！」」

泣きそうな顔をするな。

「・・・・・・でもすずかちゃんなら」

「・・・・・すずかなら」

なにがすずかならいいんだ？
最近のなのはとフェイトはよく分からない。

「いやいや冗談だよ」

「そうなの？」

いや待てよ。
ここで肯定したら再度理由を聞かれるな。
かといって否定したらそれはそれで問題だ。
すずかもいい迷惑だろうし。

「半分」

突然クラスの男子がイエスかノーか半分かというよく分からないことを言っていたのを思い出した。
あの時は子供だなと思っていたがなるほど、こういう時に使うんだな。

「公太、クラスの男子じゃないんだからそれはどうかと思うわよ」

アリサに指摘された。

「ふふっ、ごめんね。公太君は私がちょっと頼みたいことがあって呼んだのよ」

「頼みたいこと？」

「大人の事情よ」

あいまいな言い方なのがちょっと気になるけど、ここは忍さんの言葉にのっておこう。

「まあそういうことだから、午後にちょっと忍さんの家に行ってくるね」

「・・・・・早く帰ってきてね」

女の子にこんなこと言われるのはうれしいものらしい。
僕もうれしくないわけじゃないけど、同時に心が痛む。
まあこればかりは仕方ない。

「それよりなのはたちはどうするの？」

「私たちはアリサの家で遊ぶ予定だよ」

まだ微妙に心配？しているなのはの代わりにフェイトが答える。

「そうか。じゃあこっちの用事が終わったらアリサの家に向かうよ」

「分かった」

「なら早いうちに向かったほうがいいな。俺たちが昼食を摂ったらさっさと行くか」

妙に恭也さんが逸るのが気になるけど、そうしたほうがいいのは事実だから黙っておこう。
それこそ大人の事情だな。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

～月村邸～

いつきても立派だなぁ。
それに加えて鉄壁の要塞っぷりもすごい。
とはいえパッと見では分からないものだけど。
僕が分かるだけでもレーザーや小型の機関銃っぽいものがあるのが分かる。
それに・・・・・

「お茶をお出ししますね」

このファリンさんとノエルさんはロボット・・・・・・だよなぁ。
見た目や行動は人間そのものだけどあきらかに気が人間のそれとは違う。

「おかまいなく」

まあわざわざ口に出すこともないから言わないけど、地球の科学ってこんなに進歩してたんだな。

「じゃあちょっと御婆様のところに行ってくるから待っててね」

どんな人なのだろうか。御婆様って言ってたぐらいだから厳格な人なのかもしれない。
何事もなく教えてくれればいいんだけど。

「心配することないと思うぞ」

僕の心の内を察してか、恭也さんがそんなことを言う。

「お待たせ。中で御婆様が待ってるわ。あ、でも中に入るのは公太君だけにしてだって」

どういう意味だろう。

ここにいる人たちはみんな夜の一族について知っている。

わざわざ制限する必要はないと思うのだが・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ああ、なるほど。

「月村家の方は茶目っ気が過ぎるのかなあ」

「公太君、どういうことかなあ」

「あ、すみません。すずかは違いましたね」

「だからそれは私も含まれてるのかな？」

忍さんのにこやかな笑みを軽くスルーして説明する。

「この扉になにかしらの術がかけられています。忍さんが出て扉を閉めたすぐ後にかけたのでしょう」

「あらあらお茶目」

忍さんの言葉をまたも聞かなかったことにして扉を見据える。

残念ながら僕に術を解く力はない。

だけど回避する力ならある。
右眼を覆っている眼帯を外してクロノスの眼を発動する。
呪いそのものの時間だけを隔離して扉を開ける。

「失礼します」

術をかけられたこともあって、扉を開けてからの不作法だが向こうはにこやかに迎えてくれた。

「何の苦労もなしに入ってこられるとは。忍の相方もそうだけどなかなか面白い子たちよ」

見た目はかなりの年齢に見えるが、走り回っていても納得できるような元気が有り余っているといった感じの人だった。
そして気の流れもすごい。
落ち着いた感じの流れだが、密度というかエネルギーの濃さがすごい。
これはまともに戦ったら勝てないかもしれない。
たぶん歳は百を余裕で超えてるだろうけど。

「初めまして。神代公太と申します」

「私のことは楓と呼んでくれてかまわないよ。それよりもここに入ってこられたのはその右眼のおかげかい？」

「はい。これは・・・・・・・・・」

僕が右目の能力について説明しようとしたら制止の声がかかった。

「いや、言わんでよろしい。大方因果関係の能力だろう」

すごい。実際に使ったところを直視したわけでもないのに僕の能力の根本を言い当てた。
これなら期待できそうだ。

「この度は楓様にお願いがあって参りました」

「そんな堅苦しい言い方をせんでいい」

なるほど。恭也さんの言う通りだ。

「・・・・・分かりました。まずはこれを見てください」

僕は目上に対する最低限の言葉遣いだけを用いて封筒を楓さんに渡す。

「ほう。これはまた厄介なものだねえ」

「分かるんですか！」

たった一目見ただけで分かるなんてどんだけすごいんだ、この人は。

「ふむ。だけどこれを持っていたのはすずかだね？」

「はい」

「それは運がよかった。もし一般の人間が持っていたら精神を操られてただろう」

「・・・・・それは精神を操る呪いなのですか？」

「厳密には少し違う。気づかない間に自分の心が作られてしまうものだ。本当は家族が好き。でもいつの間にか家族が嫌いになっている、そんな呪いだよ」

敵はこれをなのはにやるつもりだったのか。
なぜ、なんのためにそんなことをするんだ？

「これを送られた人間はお前さんの大切な人かい？」

「・・・・・はい」

「これは私のほうで処分しとこう。すずかももう少し長い間持っていたら危なかったものだ」

「ありがとうございます」

「お前さん、これの気配は覚えたね？」

僕はもう楓さんが、僕が気配を読むのに長けていることを知っていることにいちいち驚かない。
この人は僕とは次元が違う。
これは生きてきた年月の違いなのかもしれない。

「覚えました」

「この気配はこれを送った人間そのものだ。忘れないようにしなさい」

「はい」

「そしてこれがなぜお前さんにまで作用しなかったか分かるかい？」

「それは僕が精神操作に・・・・・・・・・」

「それはわかっとる。だがそれでも限界はあり、これはその限界を超えるものだ」

先ほどもう驚かないとは言ったが言葉が出ない。
僕のすべてが手に取るように分かっているこの人に、僕はある種の恐怖をしているのかもしれない。

「これはお前さんには絶対に効かないものだよ。その言葉の意味をよく考えておきなさい」

月村邸からの帰り道も家に着いてからも、僕は楓さんの言っていたことを考えていた。
あの人はおそらくやろうと思えば犯人を見つけることも容易いだろう。
でもそれをせず、僕に助言をするだけにとどめた。
僕はそれに何か意味があると思っている。
あの人は無駄なことはしないだろう。
それと僕はこれとは別にもう一つしないといけないことがある。

「なのは、フェイト。二人に大切な話がある」

もう好きな人とか勘違いしたりはしない二人は、喜びと真剣さが入

り混じったような表情をして僕の部屋に来る。
いや、ほんとに微妙な表情なんだよ。
真剣な表情をしながらも喜びを隠しきれない感じだ。

「今、また新たに起きようとしていることを二人に話す。少しショックなことだけど最後まで聞いてほしい」

本当はあの後すぐに話すつもりだったけど、重要なことは落ち着いた環境で話したほうがいいと思ったから僕の部屋で話すことにした。

「私たちが望んだことだもん」

「聞かせて、お兄ちゃん」

闇の書について、その主がはやてだということも含めてすべて話した。
ただ、封筒については話していない。
すずかのこともあるけど、どうもこれは僕が原因のような気がしてならない。
あいまいな情報でなのはとフェイトを不安にさせたくない。

「はやてちゃんをどうするの？」

「もちろん助けるさ。あんないい子を苦しませるわけにはいかない」

「お兄ちゃんなら大丈夫だよね？」

何かひっかかるもの言いだな。

「何か心配事でもあるのか？」

僕は二人の頭を撫でながら目線を合わせてで聞く。
そしたら二人は表情を緩ませた。

「何か思うことがあるなら言ってくれ。兄に遠慮はいらないよ」

どう言ったらいいのかわからないといった感じだったが、やがてなのはが口を開く。

「あのね、なんかお兄ちゃんが離れちゃう気がして」

「最近のお兄ちゃんは、昔の私みたいに自分で全部受け止めようとしている気がする」

これは反省だな。
僕が二人に内緒でこそこそと話をしていたことで、余計に不安を与えてしまったらしい。

「僕はそう簡単にはやられないよ。二人も知っているだろ？」

「うん・・・・・そうだよね」

「お兄ちゃん、はやてのことお願いね」

「ああ、任せろ」

しばらく二人の頭を撫でてからそれぞれの部屋に返した。
戻るときの二人の顔はすっかり落ち着いていて、「おやすみなさい」といつもの笑顔で言ってくれた。

「任せろ・・・・・・か」

任せろとは言ったものの、こういう時の第六感というのは侮れるものではない。

なにしろ僕の予想している最悪の事態と二人の感じたことは間違っていないからだ。

第三話　夜の一族（後書き）

～あとがき～

実際にとらいあんぐるのほうでいるかどうか分かりませんが、オリキャラとして月村家の長老的なおばあちゃんを出しました。

チートっぽいけど年寄りなので戦いません。

ちなみに桃子さんが大阪出身というのは隠れ設定として本当にあるんですよ。

私も偶然見つけて驚きました。

なのであの一部の会話はあとから突っ込んだものです。

次回は例のやつらが・・・・・・！

第四話　炎の申し子現る（番外編『ピック・ニッ・クゥ！』）

炎の申し子現る

灼熱の力と知恵を授かりし者

汝の導き手なり

しかし、少女らにとっては破滅

汝にとっても破滅となりうる

親しき者の道を正すのは汝なり

炎の申し子・・・・・・・・・まさか、ね。

「クロノ」

先日の月村家での内容をアースラーで報告した帰りにクロノを呼び

止める。
ちなみにリンディさんたちは特に月村家でのことを聞かず、すんなりと終わった。

「なんだ公太？」

「お願いがあるんだけど」

あからさまに嫌そうな顔をするクロノ。
この感じ、前にもあったぞ。

「君の頼みか？」

「なんでそんな顔をする？」

「いや、なんでもない。続けてくれ」

「・・・・・まあいい。それで頼みだが・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・をしてほしい」

「・・・なぜそんなことを？」

「保険だよ。じゃあよろしくね」

何か言いたそうなクロノを無視してさっさと転移する。
行き先は『時の庭園』。

「お待ちしておりました」

リニスさんが迎えてくれる。

プレシアさんはいないみたいだな。

「プレシアはもう一つのロストロギアを探しています」

「もう一つってことは・・・」

「はい。一つはこちらに」

リニスさんが差し出したのは手のひらサイズの石。
中央に赤い宝石が嵌め込まれていることを除けば普通の石だ。

「魔力を込めるだけで使えるんですよね？」

「はい。私のほうでも試したので間違いありません」

これで僕の戦闘の幅がかなり広がる。

「もう一つのほうの目処はついているのですか？」

「プレシアは場所は分かるけど入手が困難だと言っていました」

まあ能力的にも考えて入手することが難しいのは納得できないわけでもないけど、大丈夫なのだろうか？

「プレシアは必ず手に入れるから心配しないようにと言っていましたよ」

フェイトとの一件で僕にかなり感謝しているみたいで、かなり無茶をしがちだ。
とはいえ、それを承知したうえで頼んでいるのだから何も言えない

な。

「分かりました。とりあえず訓練場で試してみます」

というのが昨日までの話だ。
一週間前に見た予知夢からのお告げにより念のためということで手を回した。
プレシアさんの件は前から頼んでいたことで、今手に入れる必要はなくもっと後でもよかったのだが、念には念を入れて早めることにした。
そして今日は・・・・・・

「ピック・ニッ・クゥ！」

はしゃいでいた。

「ピック・ニッ・クゥ！」

尋常じゃないはしゃぎ方だ。
もちろんクロノがはしゃいでいるわけではない。
そしたら全力で頭を叩いて正気に戻させていただろう。

「なのは、最初からそんなに飛ばしてたら疲れちゃうよ」

「まあ普段の訓練で多少は体力が上がっただろうから大丈夫だよ」

「でもなのはだから・・・・・・」

フェイトが心配になるのは分かる。
基本的に運動音痴なのはなのだ。

疲れる疲れない以前に転ぶ可能性だって高い。

「まあ運動能力も上がってるだろうから・・・・・・」

自信をもって断言できないのが申し訳ない。

「だってお兄ちゃんとフェイトちゃんと三人だけで山登りだよ」

そう。現在僕たちは三人だけで山を登っている。
もちろん実際三人だけで来ているわけではない。
母さんや父さん、恭也さんと姉さん、それにクロノやリンディさん、プレシアさんとリニスさんも来ている。
しかし、山に登っているのは僕たち三人だけ。
母さんたち女性陣（姉さんを除いて）はロープウェイで先に登って、父さんたちは訓練として一般人が通らないところから登っている。
なのはとフェイトも本来ならロープウェイで先に行くはずだったのだが、二人が僕と三人だけで登りたいと言ったためこういう感じになっている。
ちなみにクロノは一瞬何かを考えた後、邪魔するわけにはいかないなと言って父さんたちと登ることになった。
まずクロノは途中でリタイアするだろう。
身体的にあの人たちについていけるわけがない。

「ピック・ニッ・クゥ！」

にしてもはしゃぎすぎだ。
何がそんなにうれしいのだろうか？

「私もお兄ちゃんとなのはと三人で登れてうれしいよ？」

最近訓練以外でかまってあげられなかったのがさびしかったのだろうか。
学校も休みがちだったからなあ。

「まだ先は長い。久しぶりにのんびり話しながら行こうか」

「「うん」」

ちなみに山登りをすることになった理由は分からない。
急に父さんがピクニックしようと言い出したのだ。
これはおとといの夕食の時のことだった。

「父さん、明日も少し用事で遅くなるから」

闇の書の存在を確認してから、僕とユーノはほぼ毎日夜遅くまで調べ物をしている。
僕は調べものに加えて自身の修行もしているからさらに夜遅くなりがちだ。

「話を聞いているからやめろとは言えないが、少し休んだらどうだ。特にここ一週間はほとんど休んでないだろう」

確かにまだ半年近くあるからここまで急ぐ必要はない。
しかし、あの予知夢が気になってしょうがない。
あの人が現れるとは思えない。
でもあの人でなくてもあのお告げは間違いなくロクなことではない。
今までお告げがあった後には事態の急変が起きて慌てていた。
だからできるかぎりやらなきゃいけないことを早く終わらせたいのだ。
ちなみにお告げのことはみんなに教えていない。

質問されたら困るからだ。

「すいません。もう少しである程度まとまるんです」

「いや、俺らはいいんだけどさ・・・・・・」

そう言った恭也さんがなのはとフェイトのほうを見る。

「お兄ちゃん・・・・・・・・・」

なのはとフェイトが心配そうな表情で僕を見る。
確かに最近模擬戦の時以外あまり顔を合わしていない。
今日の夕食だって三日ぶりにみんなと食べたのだ。

「心配しなくても僕は大丈夫だよ」

「「・・・・・・・・・・・・」」

何かを言いたい。でも言えないといった顔だ。
僕の気持ちを分かってくれているからこその対応だろう。

「よし。明後日は皆でピクニックに行こう」

「なん・・・・・・・・・」

「そうしよう、そうしよう」

僕が言葉を発し終える前に姉さんが遮るように声を出す。

「いやだからなん・・・・・・」

「そうだな。なのはたちも行きたいだろ？」

今度は恭也さんが遮る。

「うん！」

「行きたい！」

もう嫌だとは言えなくなった。

さっきまで沈んでいた表情が一転、ものすごい笑顔。

これを再び沈ませることは僕でなくたって誰もできないだろう。

「・・・・・分かりました。明後日ピクニックに行きましょう」

「やったあ！」

なのはは大はしゃぎして、フェイトは性格的にそういうことはできないけどものすごい笑顔だった。

この2人を見ていたら、こんなときだからこそ息抜きもいいものだなと思えた。

「ふふっ、なら明日は豪華なお弁当を作るために買い物に行かないといけないわね。なのはとフェイトちゃんも一緒に作る？」

「うん！作る作る」

「作りたいです」

そんな会話をよそに、僕は一瞬姉さんのほうを見てしまった。

よく見たら父さんと恭也さんも見ていた。

「私は作らないから安心して！」

拗ねてしまった。

仕方ない。この2人の笑顔を当日消さないためにも姉さんには遠慮していただこう。

「お父さん、クロノ君も誘っていい？」

最近よく訓練を一緒にしているからか、なのはとフェイトはクロノともだいぶ仲が良くなった。

ユーノはずっと顔を合わせていないから危ないだろうなあ。

忘れられてなければいいけど。だってユーノの名前は一度も出てこなかったから。

「私たちはかまわないが、あちらはお仕事で忙しいんじゃないか？」

「明日僕が聞いておきますよ」

行くとなったら準備が必要だから、朝一番に伝えに行った。

そしたら無理やりスケジュールを合わすということで楽しみにしていた。

ちなみにユーノにも声をかけたが、断られた。

発掘の予定と重なっていたらしい。

プレシアさんは久しぶりに娘と出かけられると喜んでいた。

そんなこんなで今の状況に至る。

「ピック・ニッ・クゥ！」

もう何度目か分からないこの発言。
本当に今までかまってあげられなかったんだなと反省したくなる反面、微笑ましい光景で心安らぐ。

「フェイトもたまにはなのはみたいにはしゃいでみたらどうだ？」

先ほどから会話はしているものの、テンションはいつもと変わらない。

「は、恥ずかしいよ・・・・・・」

まあこれがフェイトだよね。
でも・・・・・・

「なのはのそのテンションは見てて恥ずかしいって」

「えー！」

「そ、そんなこと言ってない」

分かってる。
でもフェイトがテンション上がっているところを見てみたい。
僕も内心結構テンション上がってるな。

「じゃあフェイトちゃんも一緒にっ」

「え、え？」

「いっせいのっ」

「ピック・ニッ・クゥ！」

「ピ、ピック・・・ニッ・・・・・・・・・・クゥ・・・・・・」

なのはの後に続くように復唱するが、恥ずかしがってだんだん声が小さくなっていく。

やばっ。めちゃくちゃかわいいんだけど。

無邪気に小学生らしいはしゃぎ方をするなのはと、真っ赤になって俯いているフェイト。

いつもと同じように見えて環境が違うからか、新鮮に感じる。

僕自身、普段そんな感情はあまり抱かないはずなんだけど抱いてしまっている自分がいる。

これだけで今日来てよかったなと心から思えた。

「はは、あとちょっとで頂上だ。頑張ろう！」

「お兄ちゃんが笑ってる」

「うん。初めて見た」

驚いた表情をする二人。

僕が笑うところを見たのが初めてという意味じゃないことは分かっている。

すごく今が楽しい。この状態で二人といつまでも一緒にいたいと思っている。

研究所にいたころはこんな生活が送れるなんて夢にも思わなかったからな。

ホントに協力してくれたあの人には感謝している。

「到着！」

一番に頂上に足を踏み入れたなのは。
途中転ばなくてよかった。
なんだかんだ言っても運動能力は上がっていたようだ。

「公太！」

先に到着していた父さんたちが声をかける。
クロノは・・・・・・・・あれ、普通だな。
絶対へばってると思ったんだけど。

「ああ、クロノ君は途中で飛んできたんだよ」

ズルっ！
父さんたちが魔法について知らなかったらどうしてたんだろう。

「この人たちは本当に人間なのか？」

そう言いたくなる気持ちは分かる。
明らかに人の領域を超えてるね。

「君がそれを言うか」

僕とは環境が違う。

「僕からしたらなのはもフェイトもみんなこの星の人はおかしいよ」

まあ地球の常識を考えたらそれも仕方がないかもな。

「まあまあそのぐらいにして、お昼にしよう」

父さんの声で納得のいかないといった顔をしながらもシートの上に集まる。
人数が多いこともあって、重箱のようなお弁当だ。
一段目はおにぎりで埋まっている。なぜかいくつかおにぎりと呼んでいいのか迷う形のものが見えたが気のせいだろう。
姉さんが一瞬固まったのも気のせいだろう。
二段目は卵焼きだ。
なぜかいくつか黒いものが入っているが気のせいだろう。
三段目はお肉とほうれん草だった。
これはきちんとできている。
四段目も色とりどりのおかずだ。
これもまとも。おいしそうだ。

「若干気になるものが見えたけど、どれもおいしそうだな」

恭也さんがわざとそんなことを言う。
まあ仕方ない。どう見ても目立つからね。

「いただきます」

１０人全員が一斉におにぎりに手を伸ばす。
これは形がひどいやつが残らないための競争だ。
本人も分かっていたのかおとなしく自分で作ったであろうおにぎりを食べて苦い顔をしていた。
自分で食べられないものを作るなよ・・・・・・
僕が食べたのはおかかのおにぎり。

「あ、それ私がにぎったおにぎりだ」

どうやら誰が何を作ったのか分かるようにそれぞれ中身を決めていたらしい。
僕が食べたのはなのはがにぎったおにぎり。

「形もきちんとしていておいしいよ」

「えへへ」

なんとも微笑ましい光景である。
視界の端にまだ苦い顔をしている姉さんが映っているのが残念だ。
続いて卵焼きも競争となった。
当然黒いやつが姉さんが食べて苦い顔をしていた。
そして僕が取ってのは特別甘いやつ。
かといってまずくなるほどではなく、ほどよい甘さのやつだ。

「それたぶん私が作った卵。みんな疲れてると思ったから・・・・・・」

こういうところを考えているのがいかにもフェイトらしい。

「おいしいよ」

そう言うと頬を緩ませて若干赤くなる。
なんとも微笑ましい光景だ。視界の端で飲み物を一生懸命ガブ飲みしている姉さんが映っているのが残念だ。

「フェイト、公太との山登りはどうだった?」

そんな様子を見ていたプレシアさんがそんなことを言う。

「すごく楽しかった」

笑顔でそんなことを言われると本当に良かったと思う。

「なのははどうだった？」

今度は母さんがなのはに聞く。

「すっごい楽しかったよ」

年相応の笑顔とはしゃぎを見せてくれる。

こんな子たちが砲撃を放つなんて信じられないだろう。

僕たちはただ山を登りながら話していただけだ。

それでもいつもの訓練とかとは全然違った。

「公太はどうだ？」

いきなり話を振られたことに多少驚くも、父さんの問いかけの答えは決まっている。

「楽しかったですよ。生まれて初めてこんなに楽しいと思えるほどに」

「そうか。俺たちも来た甲斐があったな」

今回、僕やなのは、フェイトのためにしてくれたのは理解している。

ありうがとう。

「今度ははやてちゃんたちも誘って来ようね」

「そうだね」
こうして僕たちのピクニックは幕を閉じた。
ちなみに帰りは夕方の訓練のためになのはとフェイトはロープウェイで降りたが、父さんたち（クロノは除く）は山を駆け下りた。
僕はなのはとフェイトと談笑するためにロープウェイで帰りなさいと父さんに言われたのでそうすることにした。

「明日からまた頑張ろうな」

帰宅途中の車の中、疲れたのか僕の肩に寄りかかって眠っている二人に向かってつぶやいた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・

ここまでなにもかもが順調だった。
あとは闇の書の覚醒まで各々力をつけるだけでよかったはずだった。
物事が順調に進んでいるときこそイレギュラーな事態は突然やってくる。
それはいつものなのはとフェイトの修行をプレシアさん特製の訓練場でしていた時だった。
それは突然現れた。

「よう、しばらく見ないうちに人間らしくなったじゃねえか」

例の白マスクの少年と赤い髪を逆立てた男が突然目の前に現れた。
炎の申し子・・・・・・にわかには信じられなかったがまさか本当に・・・・・

「やはりこのタイミングできましたか」

もし現れるとしたらこのタイミングだと思っていた。

「二人とも早く僕の後ろに！」

なのはとフェイトは僕から離れた位置にいる。

ちょうど僕となのはたちの間にやつらがいる形だ。

僕の声に2人は大きく曲線を描くようにして僕のほうに向かってくるが、

「おっと」

赤い髪の男が進行上に立ち塞がる。

僕はすかさず『カオスの眼』を使ってなのはたちの前に移動した。

「ん？なぜ今それが使える？」

「お、お兄ちゃん」

「浮いている・・・・・・」

公太はなのはとフェイトと同様に宙に浮いていた。

「その説明は後だ」

そして僕はなのはとフェイトを後ろで庇うようにしながら答える。

「今日がロストだと思っていたんですか？残念でしたね」

そう。本来は今日から3日間ロストするはずだった。
だからこそ来るとしたら今日だと思っていた。
そのおかげでうまく不意をつけたようだ。

「おいおい・・・・・こりゃちとマズイな」

あの男が一瞬白マスクの少年のほうを気にしたのを僕は見逃さなかった。

「お兄ちゃんどういうことなの？」

なにがなんだか分からないといった顔をしているなのはとフェイトが聞いてくる。

「ほう、お兄ちゃんか。お前がお兄ちゃんねえ」

ふざけた調子の男を放っておいて二人の疑問に答える。

「あの人は・・・・・・・僕の兄さんだ」

その言葉に驚愕の表情を浮かべる二人。
兄さんという言葉に何を思っているのか僕には分からない。

「まあロストのことも気になるがそれ以上に聞きたいことがある」

「・・・・・・・」

おちゃらけた感じの様子が急に真剣な空気に変わる。

「なぜ眼帯を右眼につけている?」

「・・・・・・・・・どういう意味だ?」

意味が分からなかった。

僕が眼帯をつけている理由は兄さんが一番よく理解しているはずだ。

なぜそんな疑問を問いかけてくる。

「お前・・・・・・それ本当に言っているのか?」

本気で驚いているみたいだ。

いつもの冗談とかではないらしい。

「・・・・・研究所をどうやって抜けたか覚えているか?」

「それは兄さんが協力してくれたからでしょう。その質問の意図が分からない」

しばらく兄さんは思案するが、不意に隣にいた白マスクの男が急に口を開く。

「そろそろ行くぞ。俺はあいつの状況を理解した。ロストしていないあいつに用はない」

ここでこいつらを立ち去らせるわけにはいかない。

「兄さん、久々に模擬戦やってくれません?ちょうどいいことにここは訓練場・・・・・・まさか断らないよね?」

兄さんは模擬戦という言葉が大好きだった。

もともと僕がなのはとフェイトに模擬戦ばかりやらせるのも兄さんの影響だ。
明らかに不自然さが出ているのは否めないが、兄さんがこの申し出を断るのはそれ以上に苦しいだろう。

「いいぜ。お前を妹たちの前で地に這いつくばらせてやろう」

乗った！

「おいっ」

白マスクの少年が止めようとするが、ここまできた兄さんを止めることなんてできるわけがない。

「二人は防御壁を展開しながら下がってて」

「お兄ちゃん・・・・・・」

「大丈夫」

二人の頭に手をポンッとのせて兄さんと向かい合う。

「俺に近接戦闘をしかけるか。いい度胸だ」

ここで兄さんに能力を使わせるわけにはいかない。
この訓練場が耐えられない可能性があるからだ。

「・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・」

誰の合図もなしに動く。
単純なパンチとキックの応酬。
なんの能力も使っていない単純な応酬だが、衝撃波が訓練場の壁を壊してゆく。

「ははあっ」

「くっ」

どんどんペースを上げていく兄さんに押されてきている。
やはり近接では不利だったか。

「ほらほらほらっ、そんなんじゃ兄としてカッコつかないぜ」

まず慣れない空中での格闘戦は自殺行為だった。
地に足がついていないから力が入りにくい。
仕方ないから気を込めて勢いを上げていく。

「さすが、気の扱いが俺以上なことはある」

兄さんの目が一瞬自身の拳にいったのを見逃さなかった。
僕はおもいっきり後ろに下がる。
その直後、炎を纏った兄さんの拳が空を切った。

「能力を使うなんてズルくないですか？」

「ちゃんと気づいたじゃねえか」

悪びれた感じを見せずに豪快に笑う。

もうそろそろのはずだ・・・・・・・・・

「何を待ってんだ?ま、大方これは足止めだろ」

「!?」

やはり気づかれていたか。
さすがに兄さんは一筋縄じゃいかない。
ここは勝負に出るか。

「なのは、フェイト、防壁をもっと厚くして!」

僕は二人の返事を待たずにさらに飛び上がる。
気を集中させて両の手のひらを交差させて気を具現化した。
その形は槍。黄金に輝くシンプルな槍だ。

「『大想を抱く槍』!」

槍を兄さんに向かって思い切り放つ。
兄さんは炎の膜を出現させて防御態勢をとった。
僕が放った槍が炎の膜に直撃して大爆発が起きる。
その爆風の中、僕は『カオスの眼』を使って兄さんの後ろに回り込む。
気配察知に長けている僕には爆風で見えないことなんて問題ない。

「ほんとに厄介だな」

兄さんも僕ほどではないとはいえ、後ろを取られたことを気配で察したのだろう。
そのまま『クロノスの眼』を使って兄さんの時間を止めた。

だがさすがは兄さん。時間を切り離せずに、動きを止めるだけにとどめられた。
『クロノスの眼』は対象が自分より強ければ強いほど止められる時間が短くなる。

「さすがだな。眼の切り替えも早くなったんじゃないか？」

「相変わらず余裕ですね」

いくら兄さんとはいえ、あと１０秒は動けないはずだ。
そしてもうチェックメイトだ。

「ん？」

兄さんの体を何重ものバインドで拘束する。
白マスクの少年もだ。

「間に合ったか」

クロノの登場だ。
僕が本来ロストであったはずの３日間、僕を監視するように頼んでいた。
完全に捕縛するための準備時間を稼いだ甲斐あって捕まえることができた。

「ご苦労様。いいタイミングだよ」

「・・・・・さすがにお前の頭脳には参るな」

「兄さんが余裕を持ちすぎなんですよ」

「いや、念話も妨害していたのにどうやって連絡したのか知りたかっただけだ。まさか俺が今日ここに来ることを分かっていたとは」

「炎の申し子現る・・・・・・・・・・お告げがありましたからね」

「・・・・・・・・・・・・・・」

突然訝しむ表情をする兄さん。
僕の前に現れてからこの表情ばかりだ。

「そろそろ帰るぞ」

兄さんが白マスクの男に向かって言う。

「逃げられると思っているのですか？」

「おいおい、お前も薄々気づいてるんじゃないのか？」

しまった！

「クロノ、バインドじゃだめだ」

白マスクの少年のほうを見ると消えていた。
視線を兄さんに戻すと横に白マスクの少年が立っている。

「昔のお前ならこんなミスはしなかったな。ガキたちと一緒にぬるま湯に浸かりすぎたんじゃないのか？」

「待てっ」

白マスクの少年の手が兄さんの肩に触れる。

「またな」

その言葉を残して二人は目の前から去っていった。

後に残ったのは静寂。

皆展開がいきなりすぎて処理が追いつかないのだろう。

「・・・・・・・・・プレシアさん、記録はとりましたね？」

「ええ」

今回だけは記録をとってもらうように頼んでいた。

準備は完璧だった。

最後の詰めが甘かったのだ。

兄さんの言うとおり昔の僕ならこんなことは・・・・・・

「皆さんも聞きたいことがあるでしょうから一度『時の庭園』に集まりましょうか」

「お兄ちゃん・・・・・・・・・私たちはいないほうがいい？」

今回話すことは、今まで僕が避けていた研究所に関することだ。

ちょっと前の僕なら席を外してもらっていたところだったが、今は違う。

「いや、なのはとフェイトにも僕のことをきちんと知ってほしい」

「「うん！」」

もう仲間外れにはしないよ。

第四話　炎の申し子現る（番外編『ピック・ニッ・クゥ！』）（後書き）

ピクニックからの急展開なのには理由があります。
本当はピクニックの話なんていれるつもりがなかったのですが、なのはとフェイトのかわいいところを書きたくて無理やり入れました。

それともう一作品、「“そうぞう”を超えた先には」というオリジナル小説を投稿致しました。
そちらもぜひ一度ご覧ください。

第五話　作戦会議

「どこから話したものか・・・・・・・・・」

先ほど訓練場で起きた出来事を説明するために『時の庭園』にてみんなが集まっている。
父さんと恭也さん、ユーノも交じって先ほど記録していた映像を見る。

「まずは兄さんのことについてですね。名前は神鳴龍炎（かみなりりゅうえん）」

「美由希のことは姉さんと呼んで、俺のことを兄さんと呼ばないのと関係があるのか？」

「そうですね。ただ、兄さんと言っても血が繋がっているわけではありません」

ではなぜ僕が兄さんと呼ぶのかという話をすると、長くなるし今回の趣旨とは違うので省こう。

「ただ気になるのはなぜ兄さんが地球に来られたのかということです」

「確か公太がいた研究所はずっと監禁に近いことをされてたんだよな」

僕の事情を知っている恭也さんが代表して説明する。

「そうです。だから出られるはずがない」

そもそも、兄さんはいつもあんなおちゃらけた調子だが、あれが長い間監禁されていた人間の態度なのだろうか。

「それにしても彼はかなり強いわね」

実際にその場の映像をとっていたプレシアさんの発言。
プレシアさんでなくてもそれは感じただろう。

「そうですね。兄さんはすべてにおいて僕を上回っています。僕が勝っている点と言えば、気配察知と気の扱い、ついでに言えば能力の希少さといったところでしょう」

「能力抜きで戦っても俺や父さんよりも強いかもな。能力というのは単純に炎を操ることなのか？」

「兄さんの能力は確かに単純です。ですが単純だからこそ応用が効いて厄介な能力になります」

攻撃にも防御にもなるし、攻撃の方法も多彩だ。
とは言っても、実は僕はあまり兄さんの能力に詳しくない。
ただ炎を自在に操るということしか知らないのだ。
研究所にいたころは単純な格闘しかしなくて能力に頼ることをしなかった。
おそらく僕の能力の回数が限られているから合わせてくれたのだろう。

「能力と言えばお兄ちゃんのあのすごい技初めて見た」

まあできるだけ気を使った技を使うことを避けてたからな。

今までのことは、僕があんな技を使ったらそれだけで事足りるレベルだったからだ。

「『大想を抱く槍』は僕の中距離技の一つで、本気の威力はなのはのスターライトブレイカーよりも強いよ」

まあ軽く5倍は超えるね。

「すごーい」

「・・・・・そういえば君はロスト期間の僕を監視してくれと言っていたが、なぜ能力が使えるんだ？」

僕の技に衝撃を受けたのか、軽く落ち込んだ様子のクロノが質問する。

「それは僕が仮死状態になったからです」

プレシアさんの病気を治したとき、僕は三日間仮死状態になった。そのためロストが三日間ズレたのだ。

「そういえばちゃんとロストロギア『フロート』を使いこなせてたわね」

「それってお兄ちゃんが浮いていたこと？」

「そうだよ」

僕は首からかけていた手のひらサイズの石を取り出す。

これは身に着けていればいいのだが、なんとなく自分でペンダント

型にした。

「これに魔力を込めると、だれでも宙に浮けるようになる。訓練場に行く前にユーノに頼んでおいたんだ」

残念ながら僕は魔力を持っていないので代わりに誰かに魔力を注入してもらわないと使えないのだが、満タンまで入れたら三時間は飛び回れる。

ただ速度に限界はないが、速ければ速いほど魔力の消費も激しいから配分を考えないと途中で真っ逆さまだ。

「私は白マスクの少年が気になります」

管理局として情報を集めたい気持ちは分かるけど少し落ち着いてほしい。

次々とくる質問に軽く喉が渇く。

だが気になるのは分かる。

僕がいた研究所に監禁されていた兄さんと一緒にいたということは、研究所と謎の組織が繋がっているか、同じ存在であるかだ。

「あの少年は僕たちが知っているやつではありません」

でも僕は騙されない。

気配が違った。

すごく似ているが気の質が違ったのだ。

それに一人称も違ったし。

「公太がロストしてないと分かった時、神鳴君が一瞬少年のことを気にしたのはそのせいか」

さすが父さんだ。
僕も気づいたがそれは実際にその場にいたからであり、映像越しで気づけたことにさすがと言わざるを得ない。

「だがそうなるとまた一つ問題が出てくるな」

全く同じ顔、全く同じ能力を持った少年がなぜ別々の組織にいるのか、なぜ存在しているのかだ。
フェイトの顔をちらっと見ると、どうやら僕と同じことを考えていたようだ。

「少し休憩にしようか」

どうやらフェイトの様子に気づいた父さんが休憩を提案する。
確かにこれは少しフォローが必要だな。

「そうですね」

『フェイトはあとで僕のところに来て』

『・・・・・・・・うん』

フェイトの念話での返事に覇気がない。
父さんと恭也さんはなのはを連れて部屋を出た。
プレシアさんの娘の状態に気づいたのか、僕にお辞儀をして出る。
リンディさんも気づいてクロノを連れて部屋を出てくれた。

「あいつが自分と同じなんじゃないかって思ってるんでしょ？」

「・・・・・・うん」

「確かにやつも人造魔導師なのかもしれない。でもだからってフェイトが気に病むことではないよ」

「でもあの人も誰かの代わりなのかもしれない・・・・・・」

確かに人造魔導師は必ず元となるオリジナルがいる。
でも用途はそれぞれ違う。
プレシアさんのような目的で造る研究者はおそらくそうはいないだろう。
まあプレシアさんと同じような境遇の人相手に、売るために造る下種野郎はいるだろうけど。

「プレシアさんみたいな人がいると考えたら攻められない？」

「うん・・・・・・」

確かに自分は仲を戻すことはできた。
自分と境遇を重ねてしまったらやりにくかもしれない。
ましてやあいつらは昔のフェイトに似ている。
感情の薄さなどがそっくりだ。

「僕もやつらの目的は分からない。でもやらないとフェイトもそうだけど、なのはにまで危険が及んでしまう。相手の気持ちを考えることは大切だ。でもだからといって何もしない、手を出さないというのとは違うんじゃないかな」

俯いていたフェイトが顔を上げる。
その瞳には少し涙が溜まっていた。

「向こうの状況が分かっているわけじゃないんだ。まだ僕たちと仲良くなるチャンスはあるかもしれない。その過程で戦うことになっても、それは相手を傷つけることにはならないと思うよ」

僕はフェイトの頭に手を乗せて撫でてあげる。
なのはとフェイトはこれだけで気持ちが落ち着くと言ってた。
僕も二人の頭を撫でるのは好きだ。

「ありがとう、お兄ちゃん」

フェイトはそのまま僕の胸に抱きついた。
フェイトは人一倍、相手のことを考えてそれがまるで自分がその場に立っているかのように感じることができる優しい子だ。
なのはもそういうところがあるが、フェイトは今までの経験上それを上回る。
でも僕はそれが悪いことだとは思わない。
確かに戦いには邪魔な感情だろう。
でも勝つために、生き残るために相手のことを全く考えず、殲滅することしか考えない子にはなってほしくない。
研究所にいたやつらは皆そうなってしまった。
だからせめてこの子たちはその感情を忘れないでほしいと思う。

「落ち着いた？」

泣いていたのだろう。
僕の胸にうずくまってジッとしている間に僕はずっとフェイトの頭を撫でていた。
フェイトも落ち着いたのか僕から離れる。
その顔はいつものフェイトだった。

「もう大丈夫。私はなのはと一緒に頑張る・・・・・・・・・・・・・・・・お兄ちゃんがいてくれるから私もなのはも頑張れるんだよ」

本人は誰から見ても分かるぐらい真っ赤にして恥ずかしがってるフェイト。

だから僕も本心を言う。

「僕もなのはとフェイトがいるから毎日が楽しい。君たちはいつも僕に力と安らぎをくれるからね」

「は、恥ずかしいことを真顔で言わないの！」

耐えきれなくなったのか、急いで部屋を出てしまった。

それはお互い様でしょ。

・・・

休憩から一時間ほど経って再開する。

フェイトはまだ顔が赤いけど、もう大丈夫だろう。

「じゃあ始めますね。とは言っても疑問については話せるところは話しましたから今後の方針について話しましょうか」

これはこれ以上話せないという意思表示だ。

今回のことでの疑問はすべて話した。しかしこれ以上疑問について話すとなると僕自身のこと、過去について話さざるを得なくなる。

それは今話すことではない。

「こちらがどう動くにしてもあの少年の能力はとても厄介です」

リンディさんの切り出しにより話し合いが始まる。

今後の方針をたてるということは、あの白マスクの少年をどうするかに繋がる。

「その前にどちらの少年を先に止めるか決めないといけないんじゃないか？」

「ならば最初のほうですね。彼は比較的おだやかな気の持ち主だった」

それに僕のことを知っている口ぶりだったから確かめたい。

ではどうやって捕まえるか。

出現する瞬間が掴めない。そもそも現れる目的すらわからないのではどうしようもない。

でも・・・・・・

「捕える方法がないこともありません」

「でもその方法には公太が臆する何かがあるのだろ？」

父さんは怖いほどズバリと的確に指摘する。

隠し事ができない親というのはやりにくい。

母さんもそうだからなあ。

「ちょっとやりずらい・・・・・・・・・いや、でも・・・・・・・」

少し考える。

確かクロノスは言ってたな。

「・・・・・カオス、見ているのか？」

虚空に向かって声をかける。
おそらくカオスは今も僕の眼を共有しているはずだ。
今日兄さんが来ると知っていたのならなおさらだ。

「頼む！」

少しの沈黙の後、空間が歪んでカオスが現れた。
僕が召喚したわけではないので実体はなく、透けている。

「なんじゃ」

「その方はまさか・・・・・・」

やはり一番に反応したのはプレシアさんだった。

「神です」

「神じゃ」

クロノスと違ってカオスはものすごく偉そうだ。
僕たちより高い位置に座して見下している。
いや、まあ神だからおかしくはないのかな。

「僕が何を頼みたいか分かるだろ？」

「妾は絶対にやらんぞ」

今回は眼を合わせてはくれているが、頑として譲らない。
この目は・・・・・・僕の身を案じてくれている？

「お主分かっておるのか。それをするということがどういうことなのか！そしてそれで少年を見つけて誰がやつを捕えるというのじゃ！」

ものすごい勢いで次々と言葉を投げかけるカオス。
そうか・・・クロノスの言うとおりカオスは・・・・・・

「ちょっと待ってください。どういう意味ですか？」

「・・・・・・」

「こやつは妾にこの星全体の空間の中から探知させて移動できないように空間を支配させるきじゃ。妾がそれをやるのは容易い。だが、その力はこやつを通して行う。どういう意味か分かるじゃろ」

リンディさんの問いかけに僕が答えられないのを見てカオスが代わりに答える。
クロノスの眼を5分使っただけで三日間の仮死状態。
使った瞬間に気絶しかねないレベルなのは百も承知だ。

「やつが空間移動できなければ管理局でもいけるはずだ。なのはとフェイトも強い」

「お主は全然分かっておらん！そもそもやつの能力が空間系でなかったどうするつもりじゃ！」

「もう少し冷静になれ坊や」

いつの間にか現れたクロノスも言う。
カオスと意見が合うのは今回が初めてだな。

「・・・・・そうだな。この作戦は穴がありすぎた。忘れてくれ」

他の人も何か言いたそうな顔をしつつ、カオスの勢いに唖然としている様子だ。
焦りすぎたのかもしれない。
今回の一件も含めて、なのはの手紙のことが分かってから力押ししてばかりだった。

「ありがとうカオス」

「な、なんじゃ急に。礼なんぞいらん」

「カオスのツンデレは健在だな」

「ツンデレではない！」

目をそむけてしまった。
どうやらカオスを勘違いしていたみたいだ。
今まで会ったのがたった三回だったからな（今回を抜いて）。
もう少し見つめなおす必要があるかもしれない。

「ええい、妾をジロジロ見るでない・・・・・それでどうするつもりじゃ？」

「闇の書の件もある。下手に被害を大きくすることは避けたほうが

いい」

「お主には聞いておらん」

あ、クロノへこんじゃったよ。

「いや、これは僕一人で考えることではないからそんなこと言わないでくれ」

「さっきまで一人で暴走しておったのは誰じゃ」

そう言われるとぐうの音も出ない。

「・・・・・やつが現れたときに小範囲での空間探知をします」

これはやつが空間系能力者だというのが前提だけど、これで位置の把握はできる。

ただしこれには欠点がある。

「だが、公太さんがその案を最初に出さなかったということは何か問題があるのよね？」

リンディさんもすぐに気づいて質問してくる。

「はい。僕が戦闘に参加できなくなります」

だから実現が難しい。

敵が少年だけならまだいい。

だが、今までの様子から敵は最低でも二人で行動しているっぽい。

僕が探知に集中したら少年以外の気配も読めなくなるし、全く動け

ない。

「だがいつまでも公太に頼るわけにはいかない。それぐらい僕たちで対処できるようになってみせる」

なってみせるか。まだできていないと思えているあたり安心だな。その辺はさすがクロノだ。己の力を過信せず冷静に対処できるところはクロノの長所だろう。

「今のところ盗人の女はなのはとフェイトでも十分渡り合える。白マスクの少年に関しても出現位置さえわかればクロノたちでもなんとかなるかもしれない。ただ、能力がまだ不明だから一回僕が本気で戦ってみるよ。でもそれ以外にもう一つ問題が・・・・・」

以前映像で見たジャック・ガイア・ギリミア。こいつはクロノたちが束になっても勝てない。

「前に映像で見せてもらった男のことだな。もし出てきたら私と恭也で相手しよう」

それしかないだろうな。

正直父さんと恭也さんの二人がかりでも厳しいだろうが、なのはたちが戦うよりはずっと勝機はある。

「だが俺たちは飛べないぞ」

「それなら心配ないわ。私が公太の持っている『フロート』のレプリカを作るから」

実はもう半分まで完成しているらしい。

実物は僕がずっと持っていたから最初にとったデータだけで作っているのだろう。
この人を味方にしてよかったと改めて思う。

「とりあえず完成したら何度か試したほうがいいです。お二人とも足腰が重要なスタイルなのでかなり戸惑うと思います」

このことも踏まえるとかなり分が悪いな。

「完成まではどれくらいなのですか？」

「あと一週間もあればできますから、完成したらリニスに持っていかせます」

「よろしくお願いします」

「それで現時点での戦力はどれくらいなんだ？」

「恭也さんと父さん含めて、なのは、フェイト、クロノ、僕、武装局員が何名かって感じです」

改めて確認すると少なすぎる。
プレシアさんには次元魔法を『時の庭園』からやってもらうつもりだけど、アルフとユーノではサポートにしかならないし、リンディさんは指揮を執っていないといざという時に混乱する。

「それでなのはとフェイトとクロノ君は、実質どのくらい戦力になるんだい？」

「そうですね・・・・・・・・・ジャック・ガイア・ギリミアを単

体で数分足止めできるレベルですね。白マスクの少年以外ならそれなりにいけるとは思います」

「ちなみに公太さんはどの程度の戦力と考えたらよいのでしょう？」

「白マスクの少年基準だと分かりませんが、ギリミア程度なら楽勝かと」

とはいえ、ギリミアと実際に対面したわけではないから正確には分からない。

それに１００％本気なんて出せるはずもない。

「・・・・・そ、それは頼もしいですね。楽勝・・・ですか」

珍しくリンディさんが動揺している。

他の人も開いた口が塞がらないといった感じだ。

「どうかしましたか？」

「い、いえなんでもありません・・・・・・・・・・・でも、そうなると神鳴龍炎はそれをさらに上回るってことですよね？」

「いや、そこは微妙なところです。僕の本気はおそらく兄さんも知りません。戦ってみないと分からないというのが現状ですね。ユーノには言いましたが、僕の本質は力ではありませんから」

「・・・・・そろそろ話もまとまってきたところだし、いったん閉めようか。なのはとフェイトはそろそろ寝ないとキツイんじゃないか」

あまり年の変わらないクロノが言うのも変な話だが、まあその通りだろう。
もう二時を回っている。

「じゃあ見つけましたらこちらから連絡します」

皆それぞれ自分の場所に戻る。
僕は一足先に自室に戻り、カオスとクロノスに会議中気になっていたことを聞いた。

「兄さんに何か思うことでもあるのか？」

神鳴龍炎の話が出たとき、２人はすごく妙な顔をした。
僕はそういうことにはすごく敏感だ。
というかこの２人がそういう顔をしたこと自体が気になる。

「いや、なんじゃ・・・・・・」

「・・・・・・」

言うかどうか迷っているって感じだな。
こういうところは人間らしい。

「私から言えるのは一つだけだ。真実から目を逸らすな」

「妾から言うことは・・・・・・・・ない」

「カオスよ。お前は体に気をつけろと言いたいのだろ？」

真剣だった空気が一変、クロノスとカオスのやり取りがまた始まっ

た。

「わ、妾がなぜそのようなことを言わなければならんのじゃ」

「素直じゃないな・・・・・・・・まあよい。坊やよ、とにかく気を付けたまえ」

ポンッというマヌケな音を立てて消える。

残ったカオスがもじもじしながら何か言いたそうにしている。

「何？」

「か、体に気を付けるのじゃぞ」

Ｏｈ・・・

「やっぱりツンデレだな」

クロノスが再度現れて茶化す。

「う、うるさい！」

顔を真っ赤にしてカオスは消えてしまった。

クロノスも後に続いて再度消える。

「・・・・・寝よう」

考えるのがめんどくさくなっただけだ。

ただ、カオスに対する認識は改めたほうがいいな。

第五話　作戦会議（後書き）

まだ不定期です。ご迷惑をおかけします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3822u/

魔法少女リリカルなのは　その瞳に映るもの

2011年10月3日02時28分発行